

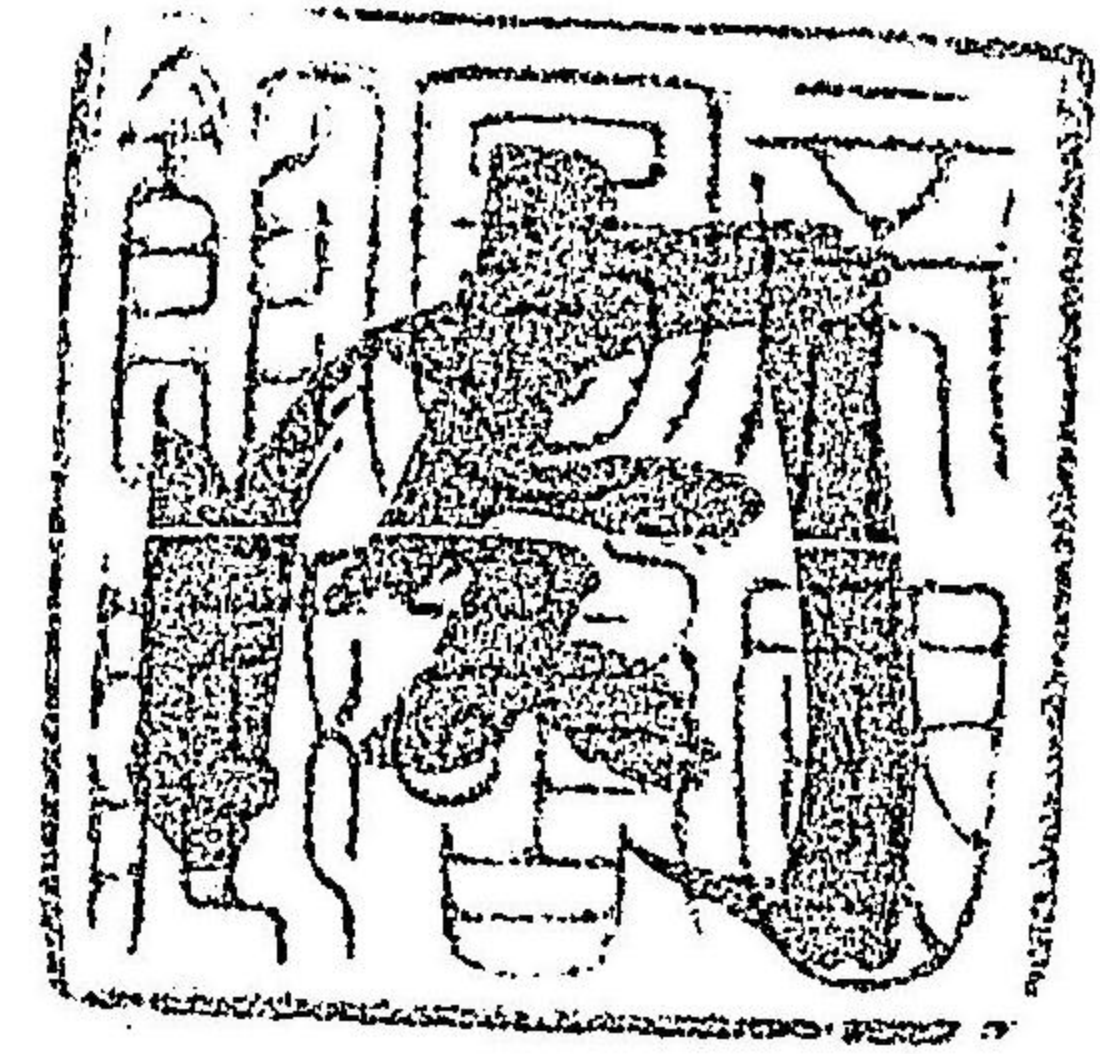
民
社

肉

彈

櫻井中尉著並畫

42-252
別-3



陸軍歩兵中尉櫻井忠温著 並畫

陣

旅順實戰記

明治
39 4 30
内交

恭しく此書を献じて

陣歿戦友の忠魂を慰す

陸軍歩兵中尉 櫻井忠温

乃木將軍

王師百萬征強虜 野戰攻城屢作山

愧我何顏看父老 凱歌今日幾人還

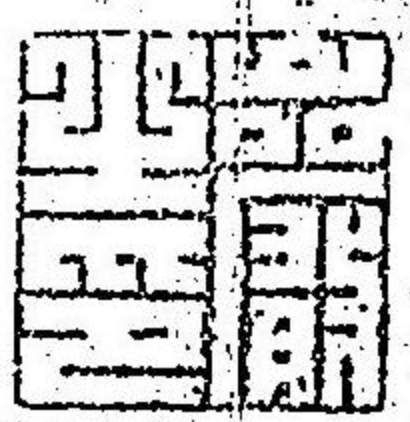


四沿三十七年之役嘗為世
林觀壯氣心氣激發五載
並如旅順收擊 揚井中尉
躬嘗叱衝叙不觀記學
併悉狀況範圍一論已盡
見忠勞好交之風年也



四治三十七年之役實為正世
 格觀壯氣以臨海牙五載
 蓋如旋順叔擊 楊井中尉
 躬嘗叱衛叙以觀記學
 詳悉狀况範圍一論已盡
 見忠勇收安之風平也
 宜於後人耳目也
 因書此以矣

二十九年三月 吳山 誌



士居 誌



贈
極井中尉
希典

川

水

近頃露國の非職將校で、ルツス新聞の通信員たるガ・フィールド氏が來訪した。彼は日露の數端を開いた當時、哈爾濱に在つて通信に従事して居たが、聽て召集せられて旅順へ向つた。然るに最早其時は我軍の爲に通路を絶たれたので、更に浦鹽へ向けられた者である。其人の話に、露都から來る汽車の中には、夥多の勳章賞金等を積載してあつて、同車に充滿せる將卒等は、意氣甚だ軒昂、文明の露軍は必ずや半開の日軍を粉碎して、彼の燦たる勳章を佩び、爛なる黄金を懐にするのであると、宛ら既に戦勝ちて凱旋門に入る者の如くて、虎穴に入り死地を蹈むの危惧を抱いてゐ無かつたことを實見したが、日本軍は全く之に反して、男兒一度死を決して陣に臨む、復た曷ぞ生還を期せんやとの意氣で、君國の爲、鼎鏝に甘んじ、犠牲たるを覺悟して、毅然奮進した。猶又た露軍は上下の一致和合を缺き、將は驕り、兵は倦み、將校は富み、兵卒は飢う

るの有様で、従つて彼等の間は犬猿も管ならずとのことである。然るに日本軍は軍紀の厳正なるに加へて、戦友相互に父子骨肉の如くに親密である。此に由つて観るに、日露兩軍が勝敗の數は、未だ平交を交へざるに已に業に決してゐたのであると、ガーフィールド氏は斯く語つた。蓋し氏の説は肯綮に中つたものと云ふべしである。

抑も我國の軍隊は軍紀嚴肅に、上下融睦し、以て君國に殉せんことを競うて、献身犠牲の精神が大に發動してゐる。是が大和民族の本領である。而して此壯美なる精神の最も旺んに發揮せられたのは、即ち旅順の攻撃である。物質的に打算したならば、此攻圍軍の損害は随分夥大である。然し乍ら又た之が爲に反映した精神的活動の方面から云ふならば、其利益は莫大であつて、確かに我大和民族の歴史に一大光榮を添へてゐる。下級の兵卒に至る迄が、死生の巷に出入し、且にして夕を圖らざる

に當つて、意氣凜然、死を見ること歸するが如してあつて、而かも亦た勇者最も情ありて、身矢石を冒し彈雨に浴するが中に、必ずや感慨禁せず、暗に涙を濺いだことも幾度かであつたらう。又た同時に名譽と任務とを敬重嚴守して、傷を蒙つて將に死せんとするに臨みて、天皇陛下の萬歳を絶叫するなど、蓋し斃而已の日本武士の本領を煥發してゐるのである。彼等の精神や行動は、彼の勳章や賞金を賭けられて、戦線に出たものとは同日の論で無いのである。

櫻井中尉は予が友人櫻井彦一郎氏の令弟で、自から旅順に實戦の慘苦を嘗めた人であり、而して又た文章の才に富みたる軍人である。予は中尉が猶ほ戦場に在つた時の書信の、戦争の表裏、又た其間に現はれたる人情の幾微を傳へてゐるのを讀んで、少からぬ興味を感じてゐたのである。後、第一回總攻撃の際、重傷を蒙つた事を聞いて甚だ悲しんだが、

The Strength of the Hill

} In memory of the heroism of General
Mogi, who fell in defence of the
territory of Japan and the rights of
China, one at Chuan-chai, the
other at Lo's Water-Hill.

The strength of the hill is great,
Where spurs of iron and steel
In the tempestuous of battle,
The red Death flashes out
The strength of the hill is holy,
Crowned with the hero's tomb,
And the living heart of a nation
Beats in the beating soil!

The strength of the hill is strong,
Oasis of a smaller sea,
Whisper of a smaller sea,
The flame of our altar of fire!
In the waves of martyr-tigons,
The throes of a fiercer death,
We have found the wonder of
That we are with the hero's soul!

Mrs. D. Harris

今や中尉は、敵弾の前に辛うじて全きを得たる左手を揮つて、實戦の跡を叙て、戦場の壮烈又た悲痛なる状態と、勇者も亦た涙ある奥床しき人憎の消息とを傳へ、旅順てふ大活劇を多感なる筆に描き出して、此書を公にするに至つたことは、予の最も喜びとする所である。王師連戦連捷の眞因を闡明し、忠烈なる無名の英雄の逸事を表彰し、遼東の野に白骨を晒したる幾多勇士の忠魂を慰する事は、曩には旅順の戦士たり、今は又た文士として、最も多趣味なる戦争文學に先鞭を着け、而かも大に成功せる、我が櫻井中尉に俟つ所甚だ少からざるものである。

明治三十九年四月

大隈重信

山の力

ハリス夫人作

日本の山と亞細亞の權利とを防護せんがため、
南山及び朝鮮山の露を清くし、乃木將軍の二
命令を授けて

すさまじの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

たゞりの

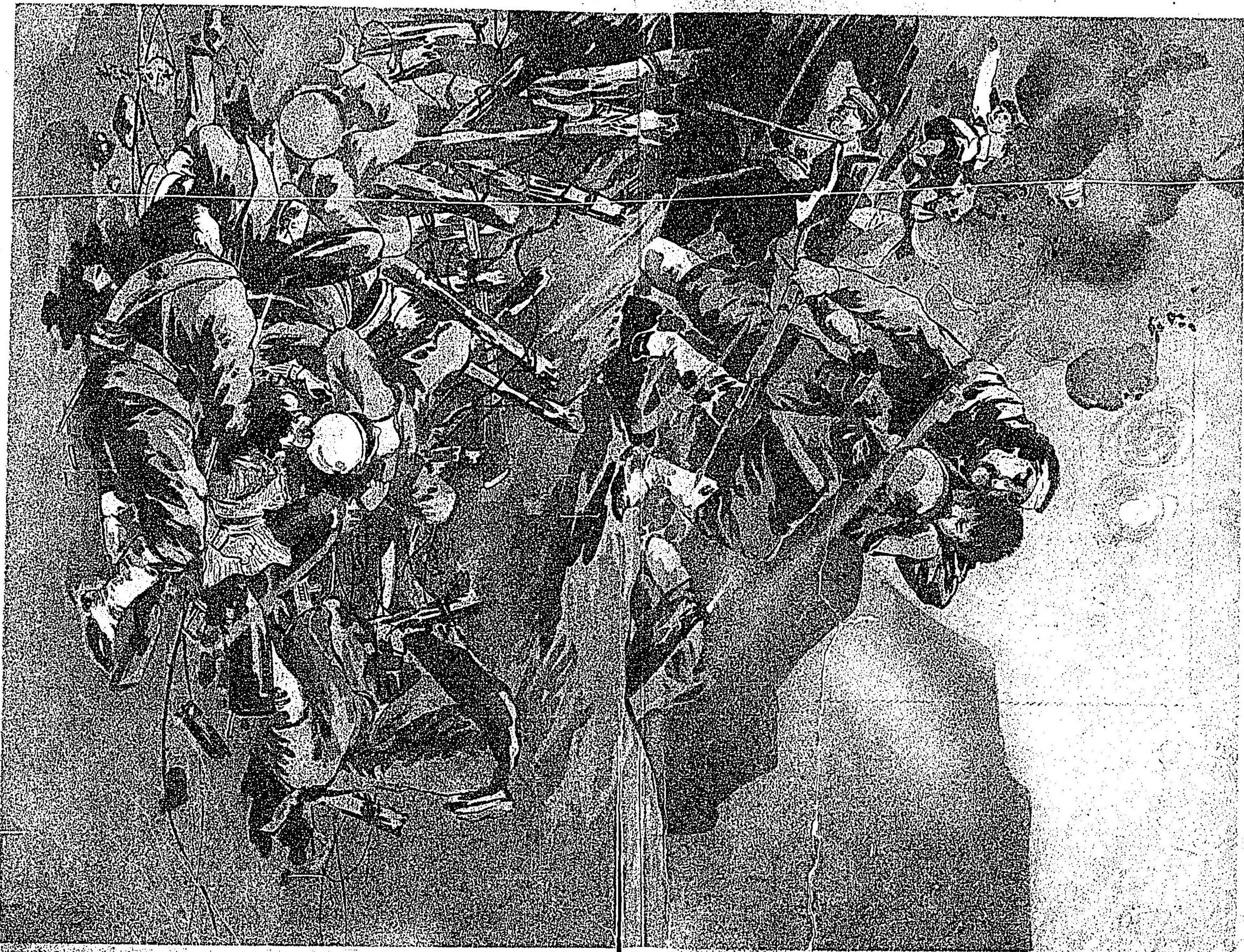
たゞりの

たゞりの

たゞりの

三十七年八月二十四日、予、皇軍に突撃して不幸敵圍
に陥り、白から敵剣を擧りて仆れ、部下亦た殆ど全滅
す。此時高知縣隊の一等卒近藤竹三郎なるものあり、
素より予と所屬を異にし、且つ未知の人なり。然るに
彼れ千辛万苦、遂に予を救うて敵圍を脱せしむ。予の
今日ある實に斯人の賜なり。由つて此書を編するに際
し、當時の状況を追想し、廢餘の左手に依つて、此書
を成し、以て再生の恩人に謝するの一端となす。

櫻井中尉識

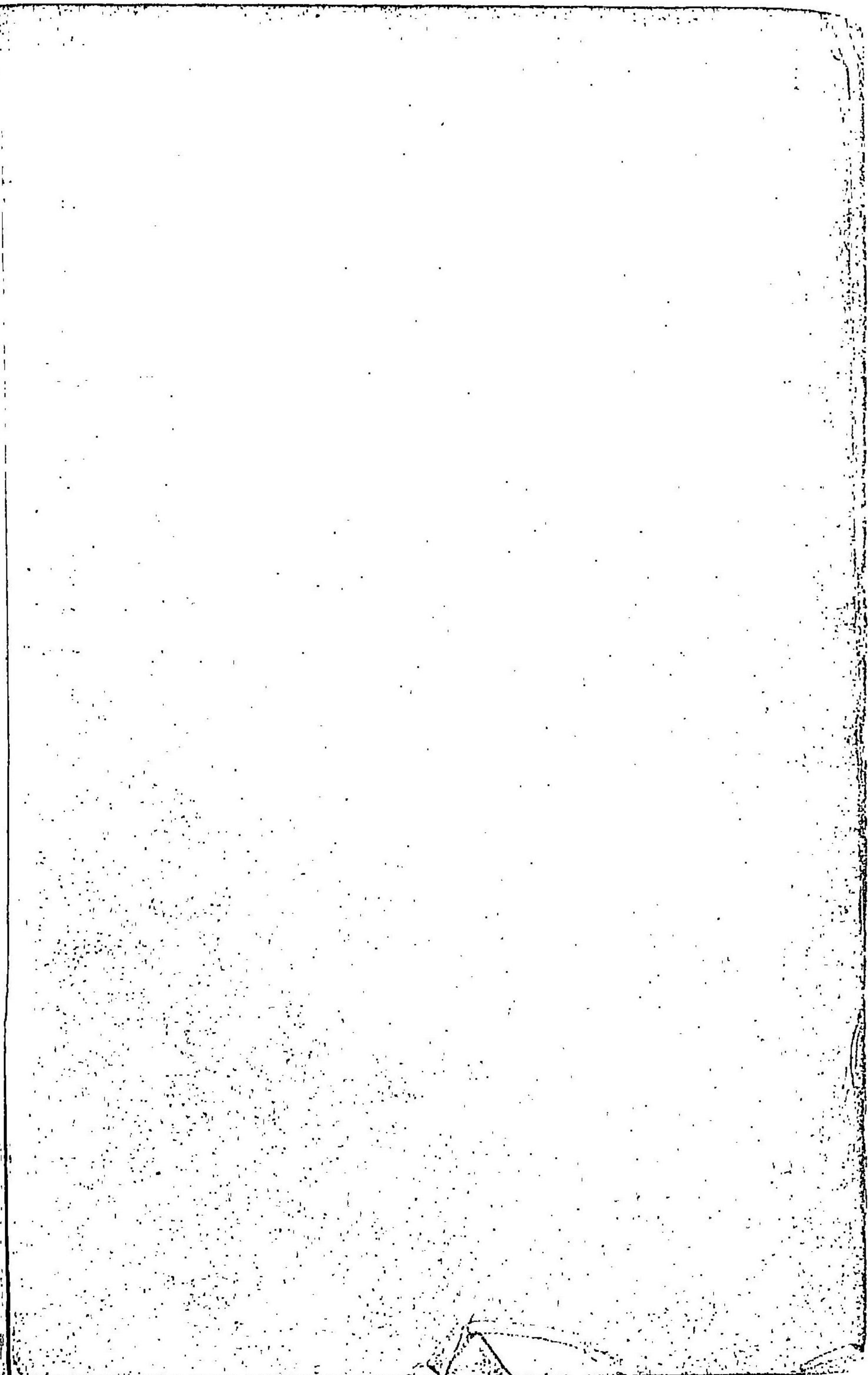


1940年12月11日

12

(9) 列二面頭(四條)

卷 垂 順 致 乙 九 號



眠れる旅順要塞

この圖は大孤山に接近せる要塞にして、即ち著者等が
向ひたる方面なり

- A. 大孤山北斜面の一部
- B. 白銀山
- C. 東鷓冠山東南砲臺
- D. 東鷓冠山砲臺
- E. 東鷓冠山新砲臺
- F. 東鷓冠山北砲臺
- F. 一戸砲臺
- G. 望臺
- H. H砲臺
- I. 盤龍山東舊砲臺
- J. 盤龍山西舊砲臺
- K. 盤龍山新砲臺

之れに連りて鉢巻山、二龍山、松樹山等あり、敵陣
の點線は悉く敵の鐵條網なり

予、素、一介の武將、文事を以て世に見ゆるの選に非らず。されど不肖
皇恩を荷うて、死生の卷に出入し、矢石の間立ちて、勇將猛卒の壯烈に
感じ、又た腥風血雨の慘酷に泣けり。今や干戈既に戢まりて、皇師茲に凱
旋するの喜事に際し、予たるもの豈に尙に既往を追憶して、再び旅順の烈
戦を夢想せざらんや。予の禿筆を呵して此書を成すは、蓋し是が爲なり。
此書旅順役の一面を描くに過ぎずと雖も、讀者或は之れに依つて、同役
の辛惨の一端を追記し、又た戦争の壯事及び其の悲劇の消息に通ずるを得
るを得ん乎。

此卑劣を公にするに當りて、大山元帥閣下、並に乃木大將閣下の題辭を
辱うしたると、又た負傷以來深厚なる恩容を垂れ給へる大隈伯爵閣下の序
文を賜はりたるは、予の感謝に禁べざる所なり。又た字句の刪正と出版
とは家兄鶴村の勞に頼れり。併せ記して謝す。

明治三十九年三月

櫻井忠温識

目次

元帥陸軍大將侯爵大山巖閣下題辭
陸軍大將男爵乃木希典閣下題辭
伯爵大隈重信閣下序文

勳三等 監督
ハリス博士夫人作

甲乃木將軍二令息英詩

(自筆寫真版)

勇卒近藤竹三郎著者を負ひて

(石版口繪)

著者左筆畫

望臺の敵壘を脱する圖

(寫真版畫)

著者畫

眠れる旅順要塞

肉弾

旅順實戰記

第一 戰友の血塊

第二 大命下る

一
六

第三	征衣上途	一七
第四	船中の隱憂	二四
第五	上陸の危険	三〇
第六	旅順の價値	四〇
第七	南山の激戰	四六
第八	戦後の南山	五六
第九	守備と偵察	六七
第十	捕虜の初獵	七四
第十一	歪頭山の初陣	八一
第十二	劍山の占領	八八
第十三	敵兵逆襲	九三
第十四	防禦工事	一〇四
第十五	幕營生活	一一三
第十六	警戒線の夜嵐	一二二

第十七 太白山の激戦(其一)苦戦……………一三〇

第十八 太白山の激戦(其二)占領……………一四〇

第十九 戦場の跡……………一五〇

第二十 綑帯所……………一六一

第二十一 長驅追撃……………一六九

第二十二 大孤山の攻略(其一)絶命……………一七六

第二十三 大孤山の攻略(其二)山上の日章旗……………一八六

第二十四 戦場の訣別……………一九三

第二十五 總攻撃の端緒……………二〇四

第二十六 肉弾又肉弾……………二一四

第二十七 必死隊……………二二六

第二十八 死中再生……………二三八



順實戦記

陸軍歩兵中尉 櫻井忠温著

戦友の血塊

凱旋の喜誌

日露戦争！此大戦争は茲に目出度其局を結び、幾十万の忠勇なる将卒は、名譽の月桂冠を戴いて、國民が感謝歡迎の裡に凱旋するに至つた。彼等戦勝將卒の勇ましき風采！嬉しさを露に、さばれ、彼等は單に嬉しい樂しいの念慮にのみ満たされてゐるものでは無くて、十有八ヶ月の間、日に焦げ、雨に曝された其顔に浮ぶる嬉笑の陰には、あはれ、御國の爲、陛下の御爲、其身は彼の荒涼なる滿洲の野の土と化し、露と消えて、最早共に今、日凱旋の樂しさを分つことの出来ぬ幾多の戦友を救く思の色が滲みて、戎衣の袖も折々

1650M24

暗涙に濡るゝのである。

日清戦役の終期に、かう云ふ話があつた。將に凱旋せんとした某部隊が、陣歿將卒の墓前に最後の別の手向せんとて整列した時、一兵卒あり、日頃愛し親しんだ故战友の墓標を撫しつゝ、涙をさめゝと流しながら、

战友の墓前

「オイ加藤、おらモウ國へ歸るのだぞ。風に吹かれ、雨に打たれて、共々玉の降る中で倒れたまへが戦死してくれて、おれがスゴ〜此面さげて國へ歸るのは、なんだか面目ないよ。おまへを獨り此處へ殘して歸るのは残念だ……だが喜んでくれ、オイ加藤、遠東半島は日本のものになつたのだぞ！おまへの骨は矢張り日本の土地に埋まつてゐるのだぞ。安心してくれ、イ、カ加藤……おらモウ歸るぞ……」

と、彼は恰も生けるに語るが如く、一言一句を真心より絞り出して、战友の忠魂を慰めたのであつた。再會期無く、永別今に迫りて、彼れ一兵卒の心中は如何であつたらうか？稍あつて彼は堰き取ぬ涙をよし拭ひ、水筒の水を手向けて、胸に餘る悲しさを押へつゝ墓前を去つたとの事である。嗚呼誰か此別離の悲しき言葉を聞いて泣かぬものがあらうか？誰か此可憐な兵卒の心に同情を寄せないものがあらうか？凱旋は成程嬉しい、嬉しさの極

みには相違無いが、共々に昨日の暑さ、今日の寒さを堪へ忍び、日夜硝煙彈雨の間を馳驅した肉身も及ばぬ兄弟分の蕭然と立てる墓標に對しては、どんなにか名残惜いだらう、どんなにか辛い思ひをするだらう！十年の昔に此情で泣いた將卒で、今日また同じ土地で同じ思ひに堪へぬものが多いことであらう。不幸負傷の爲、半途にして戦列を退いた予の如きも、今日此頃生ける战友の目出度き凱旋を迎へて喜ぶと共に、死せし战友の面影が一しほ悲しく我眼に映つて、悲喜交々胸に溢るゝのである。

不祀の鬼

扱て十年の昔、遼東を船出した凱旋部隊が、途中で、萬骨を枯らして占領したる遼東半島は、再び支那に還附せねばならぬハメになつたと聞いた時の其無念さ！腕を扼し胸を打つて、悔しがつたのも無理からぬ事。無限の芳名を傳へつゝ、笑つて瞑じた加藤の忠魂を慰籍したる彼兵卒は、那計り敷いたことであつたらうか？忠義の骨は日本の土に埋められたので無いことになつたものを。

战友の血塊

十年の遺恨を骨に刻み肝に銘して、待ちに待つたる此度の大戦争、遼東の空に迷つた十年前の战友の魂は、嚮ふ所敵無き皇軍を迎へて那計り喜んだことであつたらうか？予が初めて半島の一點に上陸して、一步二歩の足並を踏めめた時に、

『これも矢張り日本の土地だ！勇敢なる戦友の血の塊だ！』
 と嬉しく叫んだは、自然に發した聲ではあるまいか。予は出征中常に、十年前戦歿者の
 墓碑の片破れても残つてゐることかと、注意を拂つてゐたが、勇士を紀念すべき哀れ朽ち
 腐つた木片すら認め得なかつた。されど彼等勇士の靈は、國の爲、君の爲にと、再び奮ひ
 立ちて、予等と共に戰場を馳驅し、予等を嚮導し、予等を憤起せしめたのである。

兄貴の骨が
あるぞ

『この下には汝等の兄貴の骨があるぞ！此上には汝等の戦友の魂が迷つてゐるぞ！人は死
 しても靈魂は亡びない。地下の戦友は、汝等と共に、此度の戦をするのだ！』

とは予が常に部下を激勵する爲めに用ゐた言葉であつた。
 優渥なる天佑と、陛下の御稜威とにより、皇軍は嚮ふ處、海に陸に大敵を打破つて、我
 武維れ揚り、我威維れ振ひて、大八洲の國の光華を中外に耀かした。而して遺恨十年の遼
 東も再び日本の地となり、久しく祀を絶つた戦友の墓墳の地は取り返したのである。而
 して之が爲めには更に前に幾十倍した血を瀝ぎ骨を枯したのである。我軍の將卒は皆擧り
 て義あり、勇あり、大敵に當つて毫も屈せず、勝たずんば止まざるの意氣で、さしもの露
 軍を破つたのであるが、この勝利となり、今の目出度き凱旋となるが爲めには、家を棄て、

墳墓の地

國を去り、死を決して前後出征したる約一百万の日本武士が、遼東の山、滿洲の野に、黄
 海、日本海に如何ばかりの艱難を具にしたか、また之が爲に幾許大の價を拂つたか、これ
 は國の歴史が詳かに記して、後世子孫をして永く忘れざらしむべきものである。

日露大戦争記——これは史家、文豪の靈妙なる筆を働うて始めて成るべきものである。
 而して予の如きは唯だ一個微小の軍人として、古今の軍記、戦術史上に未曾有の劇戦否な
 難戦として録せらるべき旅順の攻圍軍に参加して親しく經歷し、また見聞もした事實の多
 少を茲に回想し、劍執る手の柄にも無き筆を呵して、此難戦についての國民の記憶を新に
 したいと思ふのである。

第二 大命下る

到任報切りに

明治三十七年二月、日露兩國の外交終に破れ、干戈を以て相見ゆるに至り、既に仁川に、旅順に我海軍は露の海軍を畏懼せしめた、宣戰の大詔は煥發せられた、動員令は此處彼處の師團に下つた。此時、予等軍人たるものは、今更の如くに骨鳴り血湧くを覺えた。動員令——この三字の響は如何に吾等を樂ましめたか。また如何に其下令を待遠しがつたか。今日は何師團に動員下令があつた、明日は何師團に下るさうな。付ては我師團は何日頃動員せらるゝだらうか。一日も早く下令になつて、一日も早く戰地に往きたいものだ。功名を争ふのでは無いが、他の師團のものに早くから骨折らせて、予等は後からノソノソと往くやうなことは面目が無い、とは云へ大命無くんば如何にせん。大君の御言かしくみ水にも火にも入るべき軍人である予等は、たゞ出で進めの大御言を待つべきである。ア、其御言！其動員令！それを待つた予等は、大早に雲霓を望むやうで、動員令とは異様な文句であるが、雨乞ならて予等は動員乞をなし、彼方へ往つても動員、此方へ往つても動員、暫

動員を

くは丸て動員の噂で持切つてゐた有様であつた。然るに武夫の心の色に蒸る春は四月の半ばになつて、待ち焦れた動員はいよいよ我師團に下令せられた。大命は遂に下つた。これによつて我師團は活躍すべき時機に到達したのである。當時聯隊旗手であつた予は早速聯隊長殿に、

「御日出度う御座います。只今動員下令がありました。」

と報告すると、青木大佐は莞爾として「占めた！」といはぬ計りの、何とも形容の出來ぬ嬉しさな笑顔を呈せられた。此日ほど壯快極まる時は無かつた。予も嬉しさの餘、夢中になつて、各中隊の將校に此事を振れて廻ると、乍ち一種壯烈なる彩光は、神洲男兒の粹に誇る我健兒團を輝して、其前途を祝するものゝ如くに感ぜられた。將卒誰も彼も僕一人で、露西亞を引受けてくれんずとの元氣で、魂は既に遠く遼東の槍舞臺に馳せて、修羅の巻の快戦を夢みつゝあつたのである。

充員召集

充員召集の命に應じて旗下に馳せ集つた豫後備の軍人も、等しく皆これ忠勇義烈の塊。自分が居無ければ、妻子を養ふことの出來ぬ窮夫もあつたらうし、命旦夕に迫れる父母、看病に疲れた孝子もあつたらう。百人が百人、千人が千人、皆夫々止むを得ない公事私

を持つてゐたらうが、併しながら、一旦緩急あらば義勇公に奉ずるの志は、乃ち此時に發揮せらるゝぞ、今更家と思ひ、私に二拘うて、婦女子の態を學ぶべき時では無い。男子國難に殉ず、これ程名譽な事があらうかと、一日一日と日を追うて參集したる健兒、これ皆棺葬の花役者だと思へば、眞に愉快では無かつたか。

哀な中村某

かう云ふ哀れな話があつた。中村某と云ふ豫備兵の家は、ブラ／＼病の妻と、今年三歳になる小兒との三人暮して、其日々々の細き煙も立てかねる有様で、中村が居なければ、見す／＼妻子は餓死しなければならぬ程の貧乏。それにしても、此大事に臨んで、一家の事を考へてゐる場合で無い。それで夫が出發の前後に、病める妻は、無理と元氣を作り、町に往つて、僅か二合の米と、一錢の薪木とを買つて歸つた。二合の米、一錢の薪木、それが何の意味をも有せずと思ふ勿れ。僅かに二合の米、これぞ夫の目出度き出陣を祝する爲の病妻が心ばかりの馳走であつたとは、如何にも感然では無いか。父子夫妻が一生の哀別ほど悲しきは無きに、而も夫の身を挺して國難に赴くに當り、妻は病み、子は飢う。嗚呼何等凄慘悲壯の状ぞ。かくて中村某は翌朝未明に妻子に最期の暇を告げ、村民の一人にだに見送らるゝこと無く、涙ながらにも勇ましく召集部隊に駆け付けたのである。かやう

二合の米

な哀れは單に彼中村の身の上のみ限らず、全國に亘りて、多く其類があつたらう。されど仁あり義ある我國民は、かやうな哀れな、いぢらしい勇士の家族を能く救濟し、出征者をして後顧の憂なからしめたこと、信ずる。

不合格者の嘆

豫備兵が入營して、扱て身體検査となつて不合格と認定された者は、見る目も氣の毒な程、シヨンボリと歸つて往く。どうかして連れて往つて下さい、郷里を出る時分、盛な送別會をして貰ひ、萬歳の聲に送られ、生きて再び歸らぬ覺悟をして來たのに、體が悪いので除られたと云つて、どうしてスゴ／＼歸られませう。どうか御願ですから、連れて往つて下さい。など、健氣に云ふものもあつたが、體が悪くては致方が無い、氣の毒でも可哀さうでも宥めて歸らせたのであつた。

兵士の健信

「元氣でやれよ。後の事は心配するな、イ、カ？」
「大丈夫だ、露助の首の十や二十は御土産にするわい！」
「ヤイ作。病氣などで死んでくれるな。死ぬるなら戦死だぞ、阿母のこたア心配するな！」
「生きて再び日本の土地は踏まない覺悟だ。おれが戦死したと聞いたなら、喜んでくれ。」
「皆様ドウも御丁寧に難有う御座います。屹度目障しい手柄を立て、御覽に入れます。」

「國野爲雄君、萬歳——」
此等は皆應召員控所に起つた壯快なる響であつた。國民に此覺悟があり、軍人が此決心
て居たればこそ、此度の大戦争が、常に「幸運に導かれ得たのである。

動員の完結する迄は、予等は目の廻る程忙がしいことであつた。野戦隊に編入せらるゝ
者、補充隊に残さるゝ者、それ／＼に區別せられて、動員は即ち完了し、何時なりとも出
發の出来るやうに整頓した。

補充隊に編入せられたものは、如何にも失望落膽して、知合の將校などへ直々泣き付い
て、どうぞ御願ですとか、補充で残されて残念でなりませんとか、どうにかして野戦隊へ
廻して下さいとか頼んだけれど、人員に限のある事として、一々それを取上る譯にも行かず、
中隊長等は其決心覺悟を賞讃しつゝ、彼等を慰撫したのである。假令補充隊に編入されたに
しろ、今度は非常の大戦争だから、半年や一年で片付く譯のものでは無し、それに二度戦
争をすれば、直ぐに補充を要するやうになるのだから、其時には一番懸に戦地へ來られる
やうに世話をしてやる。落膽するなど女々しいことではいかぬ。何も早く戦地へ往けない
からとて、軍人として一つも恥づる所は無い。殊に最後の名譽ある勝利を占むる仕合は汝

補充隊兵の
失望

等補充隊の上にあるのだ。精々勉強して戦地へ來られる時を俟つてゐよ』などと云ひ聞か
せたのである。中隊長始め皆の將校は、かゝる可憐の兵卒の心事が殊勝で可哀さうだ、共
々に戦地へ連れて行きたいは山々だと思つたが、致方が無いものだから、或は賤し、或は
戒めたのである。如斯くに熱烈なる兵士の氣魄、これあればこそ、我軍は戦へば必ず捷ち、
攻むれば必ず取つて、世界の人をして日本軍隊の武力と兵員の忠烈とに驚歎せしめたので
ある。

宮武藤吾

我聯隊の動員完結後に一つの勇ましくも亦た哀れな珍事が起つた。觀音寺と云ふ寺院に
宿泊してゐた補充隊の二等卒宮武藤吾なる者は、自分の補充隊に残されたのが、非常に殘
念で残念でならず、此通り體も丈夫だし、それに郷里を出る時、村の人や親兄弟に、先頭
第一に出征して目醒しい働きをする、一度家を踏み出したからには、生きて再び歸らぬと
覺悟を決めて來ながら、何だつて意外地の無い事だらう。オメ／＼補充隊に残つて何の面
目があるか、戦争はたとひ長くかゝるにしろ、いつ戦地へ行かれる事か分らぬ。生恥晒し
てモテ／＼してゐるよりか、なまじひに死んだが増した。國家多難の此秋に、墨の上で、
タレ死をするのは無念だが、是も同じく國を思ふ真心だ、體は死んでも、魂は朽ちぬ。

と聞いている。死んで魂になつて、早く戦地へ行き、御國の爲に忠義を盡くさう。意久地の無い體には、これに増した名譽は無いと、哀れにも藤吾は狭き心に思ひ詰めて、或夜、戦友の寐静まつた隙を覗つて、覗引き寄せ、

十二

私せんちへ行けぬのが、さんねんでなりません、どんなに頼んでもつれていつてもらへませんから、死んでちゆうぎをつくします。
と云ふ意味の悲壯な遺書を認めて、兼ねて用意の白鞘の短刀抜き放ち、頃は五月十二日、さらでだに物悲しき古寺の一隅、折しも軒端を傳ふ雨の音に一しほ淋しき今夜、藤吾は、天皇陛下万歳の聲微かに、無限の紅涙を流して、腹一文字に掻切つた。さりながら天安んぞ此可憐の丈夫を殺さんや、彼は直ちに戦友の認むる所となつて病院に送られた。負傷の経過良好で、やがて全治し、一旦除隊にはなつたが、後再び徴されて出征した。冷酷な道理から云へば藤吾の所業は愚と評すべし、早く戦地へ往かれぬから自殺するとは淺慮だ。されど君國の爲と思ひ逼つた彼の心の中や可憐では無いか。藤吾の種氣は、却つて全軍の意氣と誠心とを下すべきものでは無かつたか。
之に反して、國の廣さを以て居り、兵の多きを以て誇り散じた露國は、ツァールの徳下

露軍の弱點

に普からず、有司の苛政民を虐するが故に、イザ國家の大事と云ふにも、人民は奉公の志が薄く、コサツク騎兵は銃劍で威かしつけ、思み嫌がる國民兵を驅り集めて、滿洲へ送つたと云ふ次第であつたから、其兵はよし強くとも——なかくに強いけれど——戦闘第一の要素たる志氣を缺いてゐた。されば祖宗以來、神洲に磅礴たる大和魂の凝りて成したる我軍隊の忠魂義膽と、鐵石の如くに至嚴なる軍紀の下で鍛ひ上げたる有形上の戦闘動作とは、優に敵兵を壓倒して餘りあつたのである。

南阿戰爭

南阿戰爭に於ては如何であつたか。世界の最大強國として自負せる英人が、彈丸黒子の地に割據したるボア人と戦を開いた時には、世界は擧りて、是れ恰も鐵槌を以て卵石を碎くが如きのみと信じてゐた。然るに意外にも、英軍の敗報連りに天下を驚かしたは何故か、乃ちボア人の勇敢慧敏なると、彼等の祖先以來英人に對する歴史的敵愾心と、又其スバルタ的精神教育とに基因したことは云ふまでも無し。

動員の完結

動員に關する總ての忙がしき事務は、平素からの計畫に従ひ、極めて短少な時日の間整頓せられて、予等は出發命令の下るべき日を、今か今かと待つてゐた。抑も軍隊の間は、何でも快速に而も綿密に處理せられ無ければならぬもので、殊に動員となるし

十三

一秒を争うて、速に整備せられ無ければならぬ。千八百七十年佛蘭西軍がワイセの初陣に、見事獨逸勢の爲に打破られて、千秋の恥辱を殘したは、即ち動員の完結、充分なりしに拘らず、兵を動かすの止むを得ざりし結果に外ならぬのである。

野戦隊の貔貅が、腕を撫り、劍を磨いて、明日か明後日かと、出發の其日を樂んで、うもせう、カウもしてやらうと色々の空想を盡きつゝ、片唾を吞んでゐた程、愉快な事は無かつた。予もさうであつたが、唯かし誰しも半宵月影の兵舎を照らす時、露滴る軍刀を一揮再揮、微笑も洩した事であつたらう。

動員が完結した後で、我聯隊長は一般の武裝検査を行はれた。さしにも廣き練兵場の端から端までは、戦時要員を充したる數千の健兒、撰りに撰つた精銳なる將卒で塞まつてゐた。これが日ならず旗鼓堂々海を越え、飛彈爆鳴を冒して、敵の金城湯池を壓倒すべき勇士であるか、之が日ならず瘴煙蠻雨の裡に在つて、共に寐ね共に食ひて、具に艱難を嘗むべき兄弟であるか、戦友であるかと思へば、如何にも頼もしかつたては無いか。

嘖嘖たる喇叭の響と共に、名譽ある軍旗は迎へられ、森嚴なる儀式は聯隊長青木大佐に依つて行はれた。並みぬる勇健敢爲なる將卒三千、彼等の行動を指應し、彼等の生命を掌

勢揃へ

握する聯隊長の、此時の得意想ふべしては無いか。聯隊長が武裝と軍容とを檢するに當つて、概極まつて又た言ふ所を知らずと云はれたのは、真に其通りであつたらうと思ふ。式が濟じと聯隊長は頗る満足の面を以て、部下一般に訓示を與へられた。其語や痛切な悲壯、吾人の心腹に泌み渡り、上は將校より、下は兵卒に至るまで、手に汗を握り、唇を固く閉ざし、動躍將に天を衝かんとするの意氣を示した。

武裝検査後數日又た、當時の旅團長山中少將は我聯隊長に對して、一篇痛切なる訓示を與へられた。其中には實に左の如き語があつた。

旅團長訓示

其聯隊の軍容は既に日清の役に於て赫たる偉勳を有せり。其勇名は世人の齊しく知る處なり。諸士は此名譽を保持するの責任を有すると共に、又益す其武威を發揚せざるべからざる責任を有す。而して其名譽を發揮し得ると得ざるとは、諸士の覺悟如何にあり。若し一度不覺を取り荷くも汚名を受くるとあらば、再び之を雪ぐの機會は容易に來るべきものにあらず。加之初戦以來已に有したる軍旗の光輝をも消滅するに至るべし、深く戒心すべき事とす。余は此名譽ある歴史を有する軍旗の下にある諸士と生死を俱にし、榮辱を同くするを無上の光榮とする處なり。

常に 陛下の股肱國家の干城を以て自ら任ずる吾等が此重大の責任を盡すの途他なし、厚く勅諭の五事を服膺し、一誠以て各其本分を盡すにあり、平生の覺悟を實際に發表するにあり。然るに今又 陛下は卿等の忠誠勇武に倚賴し、其目的を達し、帝國の光榮を全ふせんとを期せよと、勅語を賜へり。此優渥なる詔勅に對し奉りて、恐懼言ふ所を知らず。余は諸士と死力を竭し、速に此敵を討滅して、上は宸襟を安じ奉り、下は國民の信賴に背かず、以て國家を富強の泰きに置くを得ば、吾等の微忠も亦効果ありと謂ふべし。

さなり、我等の責任は重きが上に重きを加へられたのである。ア、我等は如何に此責任を盡くして 大元帥陛下の御信賴に應へ奉り、且つは我軍旗の光譽をして益す赫耀たらしめんとしたか？

第三 征衣上途

聊か心配

動員下令のあつた其日から殆ど一ヶ月目、乃ち五月二十一日、これを生涯忘るゝことの出來ぬ壯んな、また嬉しい日であつた。

我等が此日の來るを待つてゐた間に、九連城方面の捷報は、連りに我々を狂喜せしめたと共に、またかう云ふつまらぬ心配も起した。斯うドシ〜と勝つて行けば、イザ我々が出發と云ふ時には、戦争は濟んでしまひはせぬか、それにしても第何師團は此二三日内に出發するのであるさうな。それに我々は何日まで手を束ねて待つてゐるのだらうか。グツ〜してゐる中に、吾々の樹つべき戦功は、他の師團の者等に奪はれてしまふわけだ。早く行かなげや戦をしやうにも場處が無くなるだらうと、早雄の我等は一日たりとも早く日本の土地を離れなければ、折角力瘤入れた腕前を示すが出來ぬかの如くに妄想してゐたのである。されば愈々目出度く戦地へ行けるやうになると、半時も早く出發しなければと、誰一人として思は無いものは無かつたらう。

出發の吉日

心は矢竹張弓の待ちに待ちたる出發の日、其吉日は決定せられて、午前六時、城内練兵場に整列すべく命令せられた。

男子の涙

日頃の熱望は茲に達せられて、男兒の本懐之に過ぐるものは無い。我等の喜びや無限大であつた。されど此喜びあるに伴つて、又た暗涙の霧に襟を濡すことが無くてゐられたらうか？ 丈夫涙無きに非らず、されど別離の間に涙がずとか。無論、今更戀々として家を顧み、親を慕ふのでは無かつたか、されど其決心のあればある程、これが父子兄弟今生の見納なるかと思へば、鬼の目にも涙の簞、よしや紅涙襟を潤さずとも、眼底たしかに男子の涙が催し出すにはゐられ無かつた。

號砲三發

出發の前夜、予は舊友の寫眞を出して見たり、机の中を片付けたり、死んだ後でも、留守の者に、何一つ分らぬと云ふ事の無さやう、それ／＼に整頓してから、疊の上での最後の眼を求むべく寢床に就いた。

父子告別

實にこれを最後と信じた禮拜を、先祖代々の佛前に捧げた時には、全身冷水を浴びた如く『汝は汝にして汝に非らざるぞ。陛下の御爲、粉骨碎身進んで難に赴くべし。卑怯な振舞として、祖先の位牌に傷なづけ』と戒められるやうな感じを喚び起された。而して又一族の者等は、予を圍繞して別の酒杯を擧げ、皆々予の出陣を祝つてくれた。

加の水杯

『後は露ほども心配するに及ばぬから、日頃の存念通り思ふ存分働けよ。其元の戦死は此の父も覺悟してゐる。立派な功名して家門の華を咲かせよ。』

妻の病死

『私の事は決して御心配遊ばさぬやう。武門の譽として、これ程嬉しい事は御座りませぬ。唯だ多病の御身、折角御大切に遊ばせ。』

無く、決然、涙を揮つて征途に上つたとの事である。壯なり、偉なり、此男兒、國難に臨んで私愁を断らば断つたもの、嘸かし血を吐くの思ひであつたらう。彼が冷き露營の夢は、恐らく蕭然たる妻が紀念の木の邊に、又た母を亡つて泣く孤兒の枕に迷つたであらう。午前六時、聯隊は整列を終へ、軍旗は幽玄莊重なる「足曳」の曲の吹奏に迎へられ、之を靡いて胡沙朔風に翻すべき聯隊長を仰いだ。勇氣奮勃たる精兵は聯隊長の手足なり、我等はまた既に家も無く親も無し、聯隊長は我等の父にして、漠々たる滿洲の原頭は我等の家とすべき處となつた。幸ひる者、幸ひらるる者が、此時相互の間に催した感慨は、筆紙の能く傳ふるところでは無い。

聯隊長は隊伍を睨一睨して、耳朶を劈くばかりに、故國を去るに臨みての最後の訓示を朗讀せられた。終ると、其の發聲にて、衆は一同に 大元帥陛下の萬歳を大聲三唱した。

あゝ益々雄の伴は起ちぬ。我大君の御言のまに、戈執り競へり、嚮ふ所、天も裂くべし、地も砕くべし！

大君の御言のまに

『第一大隊より前進！』

これぞ進軍に臨んで、青木聯隊長が、我等部下に下された最初の號令であつた。これより

して我等は、聯隊長一たび號令を發すれば、如何なる堅壘に對しても、如何なる猛火に對しても、常に、前進し無ければならず、冒進しなければならなくなつた。

國民の聲

長蛇の如き我聯隊は、熱心誠意より進り出でたる國民が萬歳の聲に送られて、一步一步に前進した。遠く消えゆく軍靴の響、靜かに摩する銃劍の音、これ等は熱せる國民の耳朶に那計りが勇ましく聞えたことであらう。遠くまた近く響き渡る喇叭の聲は、即ち至愛なる同胞に對する囑言であつた。若いたるも若きも、手に手に國旗を振翳しつゝ、天地を蔽かす萬歳の叫びに對しては、我等は如何にもして此至誠に報いなければならぬと思ひ、會て敵壘に向つて、耳も聳する喊聲を揚げて突撃した時には、背後で國民の萬歳の聲が、潮の如くに湧き起るやうに感じたのである。我等が喊聲も蓋し亦た國民の聲の反響に外ならぬのである。巨彈耳を掠むる戰場の巨にも、瀟として膚寒き露營の夕べにも、我等の決して忘るゝ能はざりしものは、國民が熱血を絞りて叫びし萬歳の聲であつた。

軍旗を捧持す

予は數ならぬ身を以て、名譽ある聯隊旗を捧持するの重任を荷ひて出征したものであつた。路傍に群立せる人民が、軍旗に向つて丁重なる敬禮をなすと共に呼ばはる萬歳の叫びは手をして益々激勵せしめたのである。而して如何にして此重任を全うすべきかを恐れし

恩師の訓戒

めたのである。行進の途中、會て五年の長さ、懇篤なる薫陶を垂れたまひし、中學校の見島教諭は、予を見るや、欣躍に禁へざるもの、如く、二歩三歩忍び寄り、

『櫻井シツカリやれよ！』

と、肺肝より小聲に絞り出し玉ひし此最後の訓戒、予は戰場馳驅の間、常に此語を繰返して師恩に背かざらんことを期してゐたのである。

可憐なる幼稚園の兒童が無心に歌ひし軍歌は、いかばかり我等軍人を感奮せしめしぞ。

幼童と老嫗

道に蹲まる老嫗が、珠數繰りあげつ、

『御六師様が守つて下さいませ。兵隊さん頼みますよ。』

と云ひつゝ伏し拜みしなど、いかばかり我等の肝を刺りしことなるぞ！

鹿兒島丸、八幡丸等の運送船は、遙かの沖に碇泊してゐた。兵員は續々乗船を始めた。

通船は海を蔽ふて往復する、陸には市より村より人々が黒山の如くに群つて、國旗を打振り、歡呼の聲を放つてゐた。又た彼の聯隊長が、決別の握手を知事に求められた時の、何

とも云へぬ悲壯沈痛な光景は今なほ目に浮んでゐる。乗船悉く終り、軍旗を甲板上に樹て、國民に最後の別を告げると、運送船は舳舻相衝

最後の別を告ぐ

んで、黒煙漠々、何處を指すか？ 波濤を蹴破つて、西へくと航進した。時しもあれ一天搔き曇りて、雨は緩より急となつた。

嗚呼熱誠なる國民よ、嗚呼狂喜せる國民よ！ 汝等は彼時、勇心勃々、軍旗を押し立て、出征した數千の健兒が、やがて打揃ひ、凱歌を奏して目出度く歸り來るべしと豫期してゐたらうか？

第四 船中の隠藝

向ふ處を知らず

國民が歡呼喝采の聲の、猶ほ遠く近く耳朶に響くが如くに感じ、心には山河千里の大戦場を夢想しつゝあつた我等を乗せて、船は西へ西へと駛せたのである。されど知らず、我等は何處に向つて行くのであつたか？…何處へ上陸するのであつたか？…そして孰れの方面に於て戦闘するのであつたか？…これは輸送指揮官たる聯隊長と、内命を受けたる船長との他には、一人として知り得なかつたのである。又た聯隊長や船長とても、其時々々の命令を受けるのであつたから、上陸地點や、戦闘方面は前以て詳かに知つてゐなかつたのである。上陸地は或は鎮南浦だとか、或は鴨綠江口だとか、そして吾等は海城方面へ行くのだとか、イヤ旅順の攻撃をやるのだらうとか、たゞとどろくの噂をしてゐたのであつた。さり乍ら、大命の指す處、軍旗の懸く處、南下北上、孰れに向はんも、我等は何の關するところぞ！たゞ滿身の勇氣を發揮するの時が、一分二刻に近づき來るのを思ふて、我等は甚だ壯快の感に堪へ無かつた。

二十一日の天將に暮れなるとする時、丁度馬關の海峡を過ぎた。これが愈々日本の國の見納めなるかと思ふと、何と無く名殘の盡きぬ心持がした。

『さうならば我日本の地！さらば我故郷！』
日本海上の夜波騒がず、朝來の驟雨は残り無く晴れて、四面唯だ寂寞、茲に幾千の勇士は靜かに眠りに耽つた。出征第一夜の彼等が夢は何方に馳せしぞ？東か果た西か？…程かな波の聲、静けさ機關の響、また折々聞ゆる咳拂ひの音など、一しほ凄涼の感を催さしめた。

明ければ二十二日、一天拭ふが如く、半片の雲も見えない、これを眞の日本晴の空であつた。凡ての船は恰も此時、六連島の沖を、ガチン／＼、全速力で、合ひつ離れつ、遙かに對州の山を望みつゝ前進した。時しもあれ一羽の靈鷹は、我等が船の甲板に舞ひ下りた。兵士等は彼方に追ひ此方に追ひ、嬉々として此瑞兆を祝した。鷹は暫く此船を離れ去らんとせず、或は橋上に或は甲板に勇ましく翔ひ廻りつゝ、健氣なる將卒の多望なる前程を祝福した後、又もや次の船へ飛び行くべく其影を失つた。

一日と暮れ、二日と經つ中に、予等は追々退屈てゝたまら無くなつた。て之を感むる

隠藝下る

漢々たる雪煙の中々に晴れやらぬ對州を見送つて、我船は遠く朝鮮の連山巨峯を眺めつゝ、森々たる大洋を北へ北へと針路を取るに至つた。昨日も今日も義太夫、講釋は例によつて例の如く、又た笑ひが少し收まる時は、怪しき手付てピアノを弾いたり、或は甲板に出て、金切り聲の軍歌を吐鳴る。あるは基を圍むやら、腕角力をやるやら、それも飽足ると、今度は我等の本職に立ち戻り、黒幕の純帳が一刻も早く切り落されて、戦場の活歴舞臺に自から花役者の大立廻りを演じ、敵はあるか、全世界の者に一泡吹かせたいものだがなと軍議を凝らす時もあった。

末代迄の紀念

忘れもせぬ五月二十三日の事であつた。船長は末代までの紀念にしたいから、一同の自署名簿を欲しいと云ふので、これも無聊をやるの一興と、予は一枚の半紙の上方へ、鹿見島九航海の粗畫を描き、其下方に青木大佐始め、各將校名々自分の官姓名を書き並べた。嗚呼此の一葉の紙片に名を署したる三十七人、其中生あるものは僅かに數名に過ぎざるに至つたと思へば、これを實に尊き紀念物である。胡國に赴きし蘇武は、再び漢土の月を眺めたけれど、勇士は屍を滿洲の野に曝して、幽魂再び還らず。今は有つて反つて仇なる此紀念、生殘の予の如き、之を見て感慨幾許なるぞ！去乍ら屍を馬革に包むは丈夫の本懐、を啣つのである。

聯合艦隊見

二十四日の午前、我船は長山列島附近を航進してゐた。すると遙か水や空の間に並行線状に細き黒煙の、幾線と無く漂ふのが見えた。是れを即ち我が聯合艦隊の集合してゐるのであつて、幾十隻の艦體は、英氣勃勃々波濤を蹴つて進み來つた運送船を迎へてゐたのである。其壯景偉觀、我等をして筋骨皆躍々たるの概あらしめた。頓て二隻の巡洋艦は煤煙を揚げて近づき來り、何事かの命令を齎らして、運送船と共に進行した。此に至つて我等は愈々上陸の機の近づきたるを知つた。戰場活劇舞臺に於ける、予等の出幕にも程無さを知つた。されど猶ほ未だ知らず、我等は何處の地點に上陸するのであつたか、そして何處へ向つて前進するのであるかを。衆は等しく期して望めり、旅順方面！

第五 上陸の危険

上陸地點、これは我々が祖國の海岸を離れてから此の方、常に疑問に附してゐた事であつた。或は北、海城、遼陽を突かんが爲の大孤山上陸説、或は直ちに渤海灣に進んで、營口に上陸するなるべしとの説、又た或は遼東の某沿岸に上陸して、南下、旅順の堅塞を衝くものなるべしとの説、我等は思ひ／＼に判断を下し、それも船の前進するに連れて、變化してゐた。然るに今は船のいよ／＼海面上長山列島の南方を駛せつゝあるを見ると、我等は確かに旅順に向ふを目的としたる一角に上陸するものなりとの説に衆は一一致した。護衛艦と運送船とは舳舳相衝突して、盛に煤煙を吐き、白波を蹴立て、上陸地點に向つて駛せ行くを見た時の、我等の快感！稍や暫くすると、向ふに暗灰色の細く長き陸地が、濃烟裡に髣髴として横はつてゐる、嗚呼これを實に遼東半島！十年の昔に、日本男兒の忠義の骨を埋めた墳墓の地、而してこれより又た我等が屍を曝すべき處であつた。而して昨夜來天色暗濘とし、鼠色の雲霧は切れては結び、結びては切れ、海風は檣頭に荒み、波浪は

遼東を見る

遼大澳の風

舳舳に碎けて雪と飛び、花と散つた。後を顧れば、万里の雲と水、かの雲のあたりや、日本空か？されど、國民が万歳の歡呼、老嫗が數珠繰る音、兒童が無心の軍歌、これ等はなほ風に傳つて、耳に響くもの如くに感じた。
我等の上陸地點は、半島の東海岸に貔子窩の西南なる鹽大澳と云ふ一灣であつた。灣か、澳か、蓋し漫々たる支那海の一曲浦に過ぎないのである。東海岸では、只だ一つの大連灣を除けば、他にこれぞと云ふ良港が無い。されど大連は猶ほ敵の存、故に如何なる困難危険を冒しても、戰略上此地點に上陸し無ければならぬ。元來此の近海は波濤潮流共に險惡で、少し強い風が吹かうものなら、上陸はちろか、碇泊する事さへも覺束無いのである。殊に遠淺で、船は陸より一里餘の遠き沖に投錨せねばならず、而も烈風の時は數里の沖へ流されると云ふ有様なのである。さればかくも困難で危険なる上陸地點に於ての輸送指揮官の盡力は察するに餘りあるでは無きか。又た其苦心はどの位であつたらうか？親鳥の雛を護るが如くに、護衛艦は遠く近く、警戒をさ／＼緩み無く、我等の上陸を援助してゐる。されど朝來の風は愈よ烈しくなり、怒濤激浪山岳の如く、運送船や輕舸は木の葉の如くに動搖し、彼方に躍り此方に舞ひ、無理に云へば壯觀とても形容せんか。而して又た御用船

として雇はれた支那船は帆檣林の如く、烈風之を掠めて翻弄するの状は、恰も蒙古襲來の大活畫を現出したやうであつた。

狂瀾怒濤

此の狂瀾怒濤を冒して、無事に上陸が出来ぬものだらうか？ それにしても敵前上陸をなすべき状況であるのか？ 我等士卒は馬車馬同然、周囲の事情は更に解し得無い。斯の如きは、我等の生命を掌握せる聯隊長のみの關知せる所、吾等は唯だ上陸！ 前進！ 此二つの外は何事も知ら無かつたのである。稍や少時すると、戦況の許さぬ事情があつたと見えて、無理ながらも上陸を開始する事となつた。數百隻の傳馬、ボート、又は何處より跟いて來たか、夥多の小蒸汽、就れも盛に煙を吐き、擺を操りつゝ、皆運送船を取巻いて、士卒を満載するのであつた。劇浪は或は高山の如く、或は深谷の如く、思ふがまゝに小舟を弄び、水煙飛沫を跳らして、轉乘せる士卒を一呑みにせん勢であつた。予は恭しく軍旗を捧じて聯隊長と共に端舟に乗り移つた。幾多の小舟は數珠の如くランチに繋かれ、轉がるやうにして疾風を切り抜けつゝ、ビークの汽笛は續けざまに、全力を揮つて、海岸に向つて急駛した。予の乗つた舟は、幸にも轉覆の危険を免れ、軍旗を烈風に翻しつゝ、怒濤を冒して、遂に恙無く上陸することを得た。嗚呼此一步！ 嗚呼其二步！ 祖國を離れしはツイ昨日

軍旗の上陸

と許り思つたに、夢ならて今は現に、嬉しや敵地に踏み入つた其足並は、如何に愉快なりしかよ！ 『これも日本の土地！、同胞の血の塊！』なる遼東半島に、陛下大稜威の御旗を押し立てたるは、如何に壯烈なりしかよ！

時しも強風は益々強なるを加へ、怒り狂へる波浪は天を浸し、これでは逆でも上陸することが出来ぬ。だが既に轉乘した者は致方が無いから、劇浪に翻弄されつゝ、辛うじて岸近くまで寄つては、ザンブと水に飛び込み、無理やりに上陸するのであつた。此の慘狀に遭遇したる我友筑土大尉(邦帶)を茲に記して、其の那計り烈しかつたか、又た那計り困難であつたかを紹介しよう。

筑土大尉

筑土大尉も六十餘人の部下を載せたる端舟に長として、小蒸汽に曳かれつゝ本船を離れた。然るに中途にして、暴風は怒濤を洩うて、ボートを弄ぶこと、玉を轉ばすが如く、遂に一寸をも進むこと能はずして、渦浪の中に旋回し、海苔の暴威は、健兒を呑んで水底に葬らざるは止まざるの狀に陥り、剩へ小蒸汽は危険を恐れて、無残にも纜を解いてボートを見離した。嗚呼萬里を翔る大鷲も波には翼折れぬべしとかや、まして之は片々たる小舟

かくなりては唯だ劇浪の弄ぶに任かせて、勇士徒らに魚腹の餌となるより外無し。救助の途は絶えた。これも天命ならば、如何ともし難し。死は素より覚悟の前、されど敵を眼前に叩へながら、恨みの一太刀も加へず一發の彈丸も放たて、おめく水の濺屑と消えんことは、如何にしても無念！これにて從容死に就くとが出来やうか。大尉は血湧き、肉躍り、髪逆立ちて、百方部下を救はんとすれども、怒れる浪は愈よ狂ひて、今は絶體絶命、恰も過ちて野中の古井戸に落ちたる人の、沈みもやらず、上りも果てず、命の綱と辛うじて取り縋りたる蔓の端を、野鼠の噛むが如き窮狀となつた。筑士大尉は果して其部下を救ふことが出来たらうか？

挺身出下
救ふ

大尉は決然身を躍らして海中へ飛び込んだ。部下を救はんとする一念に、荒波物の數かはと、抜手を切り、岸邊を指して泳いだ。心は剛に、氣に逸れど、怒濤は大尉の身を、或は呑み、或は吐き、揉みに揉んで弄んだもので、遂には大尉も力盡き息塞がつて、人事不省に陥つたが、幸なるかな、天は未だ此勇士を棄てず、彼は海岸にて救ひ揚げられ、漸く己に還つた時は、丸の全裸、かくても部下を思ふの初一念は、いかにか滅却せん。其姿を直ちに碇泊場司令部へ駆け込み、泣くにも涙は乾き、言ふにも聲は噎れ、辛うじて意を通

戦死者の魁
輸卒

じて救助を訴へ、やうやく部下を全うするを得たのである。

筑士大尉と同じく渦浪中に巻き込まれたる、行李駄馬を載せた小舟は遂に轉覆して、不意にも其中一頭の馬は沖へ沖へと泳ぎ出た。すると附いてゐた輸卒某なるものは、我身を忘れ、此馬を追うて泳いだが遂に達せず、兎角する中馬は溺れる、彼も亦た劇浪に巻き込まれて其姿を失つた。あはれ忠勇なる輸卒よ、汝は夜の鶴の子を思ふにも増して、汝が馬を愛するの情より、之を激浪の中に尋ねて、遂に自から死するに至つた。感泣何ぞ禁へんや。汝は彈丸に斃れざるも、任務の爲に名譽ある戦死者の魁をなしたのである。

荒原沙漠

あらゆる空想に空想を書きつゝ、待ち草臥れた上陸地、十年の昔、一旦日本男兒の血を以て購つた其土地は、果して豫想通りの場合であつたか？否なく決して夢にだも想ひ及ば無かつた程の荒涼索莫なる土地である。砂漠、砂原、これが即ち此處に適當なる名詞であらう。見渡す限り幾百里のウネリ／＼とした大荒野、一面に大霧を流したやうな、薄雲を溶いたやうな、單調無味なる大キャンパス、之を昨日まで見馴れた極彩色の日本繪と比べたら、誰しも締りの無いやうな、淋しいやうな感じを起すだらう。まして幾百とも知れず土民が、馬を追ひ、車を曳いて、上陸地附近にガヤ／＼集まれる状態は、何とも云へぬ

色であつた。人か獸か、彼等は底氣味の悪い面構をして、何事をか眩さつゝ過ぎ往くのであつた。腹の黒いチャンと思へば面憎いが、これが即ち亡國の民かと、下目で見れば、惘然なり、可哀相なりである。彼等は最初、日本人を畏れ、驚きの眼を騰つて居る許で近寄らず、戦も震へて逃げ隠れしたものもあつたのである。これも嘸かし、露兵が到る處として、財を掠め、婦女を辱しめ、有りとあらゆる亂暴狼籍を働いて、民を虐げた結果であらう。されど我軍の上陸以來、秋毫も犯すところ無く、常に士民を慰撫して、其業に就かしためたが爲め、後には簞食蕪漿以て皇軍を迎ふるに至つた。さり乍ら元々金儲にかけては抜目の無い奴ばかり、金銀の爲には生命もいらぬと云ふ祖先傳來の吝嗇根性、懐に一萬金をねぢ込んで燕壘の中に屈むと云ふ始末におへぬ野郎であるから、我軍の彼等が爲に、不慮の災難を招き、敵ならぬ彼等に苦しめられたことが、實に度々であつた。之は後に至つて詳かに述べたいと思ふ。

支那人

土人の牛馬

『アタ、アタ、ウオー、ウオー』

これは戦地に於て絶えず耳にした異様の響であつた。これぞ土民が牛馬を追ふ時の懸聲なのである。彼等が牛馬を御するの巧妙なるは、連も日本人の及ぶ所が無い。牛馬は恰も己

長上の命令

の手足を動かすが如くに、此聲に應じて直に或は右し或は左し、鞭を入れるまでも無く、命のまゝに自由自在に動く有様は誠に感服に堪へ無い。之を管に取るのは異なるのだが、軍隊にても長上の命ずる所、部下たるものは、假令火の中、水の中、如何なる處でも、長上の手足となつて、自由自在に活動し無ければならぬ。決して鞭撻叱咤せらるゝが爲て無くて、部下が長上を神の如くに尊敬するによりて生ずる任意の服従が無ければならぬ。一朝事あらば死生を共にする父子兄弟の間柄であれば、従つて鐵石の如き軍紀の下に、亂れざる秩序を保たねばならぬ。讀法にも『長上の命令は其事の如何を問はず、直に之に服従し云々』と教へられてある。露西亞の軍隊が勇猛大膽、常に頑強なる抵抗を試みたにも拘らず、一戦として勝を制した事の無きは、要するに上下の秩序が、日本軍隊に於けるそれの如くに整つておらず、服従の精神が缺乏してゐたからだと思ふ。此事は後になつて、捕虜の言によつて證明しよう。

陸上停止

我が若干部隊が上陸した後で、海神は益々の不機嫌、八ツ當りに當り散らすので、詮方無く、上陸停止の命令が下つた。而して予は聯隊長、副官、通譯、布教師、それと若干の護衛兵とて、漠々たる荒原を辿つて、今夜の宿營地と定められたる王家市を指して往つた。

地圖と磁石との首引、通譯は土人を相手に迷りに方角を尋ねる。予も『日清會話篇』を繰り出して『俄國兵來丁麼』(露兵は來無いか)と尋ねると、『上旅順口逃去丁』(旅順へ逃げ込んだ)と答へたので、何だか氣の抜けた工合は、一時も早く露兵と對面したいと心許り焦つた我々荒武者には無理もあるまい。

砂原七里、踏み鳴らし、何の風情も無く、風凄しき夕暮、雨さへ加はりて、見馴れぬ群鳥の啼をさして歸る頃、野邊の横路分け行き、暮れ行く楊柳の蔭、此處王家屯に着た。

まぬけ顔の老爺、鼻垂れの小坊主が、彼の家からも此家からも、蟻の如くに這ひ出て、物珍しげに我等を仰ぎ見たのだ。長い煙管をガラリと噛みめ、此處許りは天下泰平、自國の騒ぎも、他所の空、其の香氣さ加減、寧ろ哀むべしてあつた。家屋の汚穢と土民の不潔とは、何とも御話にならぬ。土地馴れぬ我等はいつも鼻を掩はずにはおられ無かつた。名こそ舍營だが、實は軒端の雨宿、浸み込むやうな異様の臭氣は、到處から舞ひ上り、大蒸臭い大チャン、小チャン、豚の如くにゴロ／＼鎮座しますすに至つては、逆も堪へ切れぬ程であつた。山海の珍味よりも難有じと戴いた大軍の握飯、晋吉、腸藏の喜ぶ暇も無かつた。

一陣の臭氣ブンと来て、忽ち嘔吐を催さずにはおられ無かつた。

上陸の出來た部隊は、此夜此附近で、遼東第一夜の露營をすることゝなつた。定めし、地下の戰友は茲に彼等を迎へ、彼等の夢に通ひて、繁き涙の露を拂ひ、千秋畫さざるの恨を物語らんとしたであらう! 淋しき天幕の端に、夜寒むの風の侵すとも知らず、露しげき黍穀の上で無心の眠に耽る者、時々洩らす微笑は如何なる夢をか結びつらん。嗚呼可憐の兵兒よ、眠れ! 眠れ! 滿身忠と勇とに湧く汝の血潮は、頓て醒めては、忽ち蛟龍雲を呼ぶの概あらん。石垣の陰に飯盒を吊し、玉蜀黍の殻を焚いて、ツクネンと坐り、饑別の殘物を喰りつゝ、目ばかり光らしてゐる者、彼等が思ふ所は果して何の邊ぞ? 夜色沈々また悽愴、悲風蕭々として樹に動き、雨露團々として草に落つ。遼東第一夜斯くて更け行かんとせし乎、否か? ……

夜將に更けなんとして、忽ち起る西天一角の電光雷鳴。否な、電光に非ず、火焰なり、雷鳴に非ず、砲聲なり。凄味は加はる風の音! 殺氣を孕む空の色! 嗚呼壯快! これぞ南山の劇戰! 今は立つても坐つても居られぬ!

第六 旅順の價値

大々吉日

明治三十八年一月二日、大々吉日は、萬世未代までも決して忘るべからざる日である。戦捷の風、目出度く吹いて、都も都も新玉の萬歳樂を謳ふ其時、何たる慶福ぞ、吉祥ぞ！曰く皇孫殿下の御降誕、曰く旅順口開城、千古未だ嘗て斯くの如く慶賀すべき新年を迎へた例は無し。

旅順開城

旅順開城、これを世界の史乘に一時期を劃すべき大事蹟である。されど忘るゝ勿れ、事茲に至るには、幾千斛とも量られぬ膏血の流されたことを。往年クロバトキン將軍が、旅順は如何程猛烈なる攻撃を受くとも、優に年餘を支へて餘りありと自負した位の堅城である。然るに我軍の一旦之を攻むるや、江河の決するが如く、山嶽の崩るゝが如くに、猛烈に轟進して、逐次幾千万の彈丸を雨注し、順次幾万の精兵を驅つて、肉弾又た肉弾、突撃縦横、實に二百四十餘日の間、一日として攻撃を休止する事無く、死屍は積んで山を築き、鮮血は流れて河を成し、世人をして其陥落を疑はしめたが、我軍は阿修羅王の勢もて、不

大和魂の價値

撓不屈、息をも續かず乗り越え々々攻め戦ひしより、遂には難攻不落と誇りし、さしもの堅城も白旗を樹て、守將自から出て降を我軍門に乞ふの止むを得ざるに至つた。南山以來、人命を抛つ事幾許なるを知らず。されど所謂發しては萬衆の櫻となり、凝つては百鍊の鐵となる大和魂は、眞に此時に於て、愈よ其價値を發揮したので、之に對しては、あらゆる器械的の防禦も能く其効を全うすることが出来無かつたのである。然れども亦た旅順を守備したるステッセル將軍以下の、頑強勇敢なる防禦に至つては、實に感嘆せざるを得無い。將卒相繼いで斃れ、糧食彈藥亦た殆んど缺乏を來したにも拘らず、殘餘の部下を激勵し、百方策を廻らして、西天落日の如き孤城を死守し、其任務の爲めに、飽くまで決死の日本軍に抵抗したる其勇武は大いに之を賞讃し無ければならぬ。外人が「能く攻めた、而して能く守つた」と評したのは、洵に妥當の表彰である。

勇敢なる敵

日清戦役以來、旅順口なる名は、世界の注目する所となり、殊に露國が十年の日月を重ね幾億の資を投じて、此地に堅壘を築いてより、戰略上最重要の地點となつて、恰も露土戦争がブレヅナの陥落によつて、勝敗の數全く決したるが如くに、旅順さへ陥落するならば、日露戦争の全局面は終りを告ぐるかの如くに考へられてゐたのも尤もな次第である。

難攻不落

旅順の地たるや、市街と港灣とを抱き込んで、二百乃至四五百米突の高地がツネくと引廻されてゐて、自然の防禦陣地を形成してをる。既に此天險あり、加ふるに築城工事にかけては世界で有名な露國が、彼山、此高地と到る處として各種の砲臺を築き、之に無敵の巨砲、機關砲、小銃を配置して、正面から撃たうが、側面から撃たうが、自由自在に設備した上に、地雷、狂奔、鐵條網等を始め、あらゆる防禦材料をば、蟻の這ふ隙間も無い程に布設して、如何程猛烈なる日本軍の砲火に對しても、如何程精銳なる邊兵の突撃を被つても此要害こそ、敵を制するに間然する所無き、難攻不落の堅城なれと自信してゐたのである。之に反して我軍の攻撃正面は如何なる地形であつたかと云ふに、峻峻なる山を攀づるか、千仞の谷を下るか、さも無くば敵の陣地向つて、自然に緩徐なる傾斜を以て登らねばならぬのであつて、旅順口一帶の地利は即ち守るに易く、攻むるに難きにあつた。殊に糧食彈藥等は、他よりの供給を仰がずとも、充分持久の籠城が出来ただけの永久經營は殆ど完備してゐたのであつた。

要塞

されど何の要塞でも、永久に抵抗してゐた先例は無い。遂には力屈して城を枕に蹙るか、又は城を開け渡して降服するか二途其一に歸着するので、今後の戰爭でも、要塞の

旅順の價值

陥落せぬ事は無いだらう。唯だ館細工の城を打ち毀すやうに、容易く行かぬ迄の事である。セバストポールは三百二十餘日の間、英佛聯合軍を支へてゐたが、船渠は破壊せられ、砲臺は爆發せられ、市街は見る影も無く荒廢されて後、始めて陥落した。又たカースでは、勇敢なるウイリアム將軍が、僅かに三ヶ月間の糧食と三日間の彈藥とを以て、土耳其兵と共に、五萬の露軍に抵抗せしこと七ヶ月にして遂に陥落した。其時敵將ムラツイエフは、此の『カースの英雄』に向ひ『天下後世は閣下の勇武と訓練とに驚異すべし。願くは我等をして入道に害ふこと無くして、戰爭の要求を満足せしむる事に就きて商議するの光榮を有せしめよ』と感嘆したと云ふことである。又た普魯亞が巴里をして城下の盟を結ばしめたまでには實に百三十二日を要した。此等は戦史上最も著名なる數例であるが、昔からどの要塞でも遂には陥落してゐる。されど凡そ要塞の任務は、一日でも長く包圍軍に抵抗して、敵全軍の作戰を阻害するにあるのだ。然らば旅順要塞の任務は何であつたか。即ち日本軍を一兵でも多く、一日でも長く、南方に牽制して、北滿洲に於けるクロバトキンの作戰を有利に導かんとするにあつた。此重大なる任務の爲に、ステッセル將軍は世界無比の堅塞を固守して、飽くまで攻撃軍を拒止せんとしたのである。假りに旅順が、奉天の大會戰を

死守死攻

て持續したものとしたり、我軍に取つてドツであつたらうか。旅順の價値はしかく大いなるもので、彼は此價値を失はざらんとし、我は此價値を奪はんとし、彼に死守あれば、我に死攻あり、而して乃木將軍、遂に能く幾万精兵の犠牲を拂つて、此價値を購ひ、而して旅順の價値をして益す大ならしめた。

古今の最慘戦

百年をも支へ得べき此堅城を抜くに、僅かに八ヶ月を以てしたること、既に其攻撃戰の如何に慘烈なりしかを察するに餘あるのである。旅順戰は古今の最慘戰である。近世の慘戰を云ふもの、これまではブレンツナの要塞戰を稱し、彼のマカロフ提督と共に旅順港に沈んだ露國の大書家ウエンスチャギンは、其慘況を畫いて百世に傳へてゐるが、若し彼をして生あらしめて、旅順攻撃を敗るを得せしめたなら、彼の靈筆は乍ち動いてブレンツナ以上の大慘畫を描き來り、以て天下後世をして戰慄せしめたであらう。從軍記者ケナン氏は、此攻撃戰を評して、阿吽叫喚の地獄を此世に現出したものだと云つたが、真に其通りであつた。而して此大悲劇を演ぜしめたものは、元はと云へば全く旅順要塞の價値其者に外ならぬのである。旅順は如何にして攻撃せられたか。これを予が此書に於て語らんとする眼目なのである。

が、之を語るに先だち、茲に以上少しく旅順の價値を説明して置くことを必要と認めためたのである。

予等は遼東上陸の第一夜、西天の一角に當つて、旅順の關門たる南山の砲火を聞いたのである。予は今其話に立戻ら無ければならぬ。

第八 南山の激戦

心は南山に
馳す

電光か？雷鳴か？あらず、南山方面の火光砲聲は、時刻の進むと共に、益々劇しくなつた。修羅場の光景や如何に？我战友の武者振や如何に？最早占領したであらうか？さも無くば苦戦をしてゐるのだらうか？少くとも我々は此戦——我等の爲には初戦たるべき——に参加するの光榮も荷はなければならぬ。未だ前進の命令は下らぬのであらうか？……と斯く我等は氣苛ち、心は南山に奔馳してゐたのである。然るに後續大隊の上陸が無事に出来たか出来無いかを知らず判然せず。連絡の爲に派遣した傳令は一晝夜を過ぎても更に還らぬ。今聯隊長が手許に握つてゐる部隊は僅に五百人、眞に心細い事だ、ても五百人もあれば充分なりとして、早く前進戦闘すると云ふ調子に運ばぬのだらうかと、上官の顔を窺ふ、上官が濟まぬ顔をしてゐられると、嗚呼迎も駄目かな、對岸の火災と傍觀し、ソクネンと其鎖まるを御待ち申すのかなと落膽の氣味になつた。戦局の前途は遠遠なり、序幕が開いたばかりの此の南山で大切になる譯のものでは勿論無いが、ても既に敵地に入

つて、敵と會するを得ず、戦既に 離にして、遠くから其音を聞いてゐるだけとは情無い
ては無かつたか。

などて我等が此愾みの通ぜざるべき、果然次の如き恩命は發せられ、續いて前進の命令
が傳へられた。

急行命令

『第二軍司令官の指揮下に屬し、南山に向つて急行せよ。』
と、勇氣と喜悅との満面に溢れた聯隊長の口より、日頃の命令に彌増して勇ましく且つ嚴格に達せられた。部下の將校兵卒は天來の福音を傳へられたやうに感じ、手に汗して待ちに待つたる事であるから、最早支度も何も入らぬ、前進、否、猛進！出来るだけのコンパスを伸ばして、踏破急行山野村間幾里なるを知らず。敵が目にちらつて、足の痛みなどは少しも覺えず、流汗瀧の如く砂塵と混じて顔に假面を塗りつけても毫も意とせず、水筒の水は既に飲み干して、一滴の流水口を潤すべき無くとも、唾腺乾涸して呼吸も塞がらんとしても、一兵の隊列を離るゝ無く、盛んに起る砲聲は、疲労、困難はた疼痛を打消して、一意専心、敵の陣地と覺しき方角を睨んで、慕地に奮進した。

『南山は未だ落ち無いらう。』

『まだ、今が最中だ、早く行ななさい。』
 これは途中で、戰場から歸り来る人足等と兵士等との間に交された問答であつた。可笑しいやうだが、我々は、自分等の戰場に到達する迄は南山の占領せられざらんことを希望し、また新手の我々が戦闘するので無ければ、迎も陥落はし無いだらうなどと、一人天狗をなごめ込んでゐたのは事實だ。遂に我兵が捕虜將校二三名を護衛して後送するの見て、一つには、初めて敵に見参するのだから珍らしくもあり嬉しくもあつたが、又た一つには、若しや既に陥落したのではあるまいかと異なな感覚も起してゐた。

戦時の行軍

一寸序ながら茲て話して置きたい。凡そ軍隊では、何事に由らず、出来得る限り便宜許可し得べき事柄と、又た如何やうなる事があらうとも、決して許すべからざる事柄とが、判然と區別せられてゐる。行軍に於て殊に然りて、平時の行軍や、又たは戰場でも敵に懸合はんが爲て無い行軍ならば、出来得るだけの休息を與へ、給養を豊にするが、いざ鎌倉と云ふ時、即ち敵を前に控へて行進する場合には、火が降らうが、槍が降らうが、飲水も無く、食糧も無くとも、ドン／＼行軍を續けねばならぬ。兵卒は各、十貫前後の重荷を負つてゐて、水筒の水一杯を命の親とも頼み、それを飲み盡したら、後は一滴の喉を潤すべ

きを得無い。而も毎日々々露營ばかり、篠突く雨の夜も、石を飛ばす風の夕も、人家の檐下に憩ふことすら出来ぬ。疲労痛苦も決して容赦は無いのである。汗を拭ふ際も無くて、顔一面は鹽を振かけたやうになり、呼吸は喘ぎ苦しむ、今にも絶えなばかりて、其状や惘然、之を顧るに追無きは頗る残酷だが、任務の爲に犠牲となるとであれば致方が無い。散兵線に一銃をも減じてはならぬ、一兵だも後に残してはならぬ。而して斯くの如くに困難なる行軍の後では、直に激烈なる戦闘に従事するのである。されば行軍の強弱を以て、既に勝敗の數を判断することの出来る位なのである。だから平時よりして、訓練が肝要なので、無水行軍とか、夜行軍とか、急行軍とかの演習は、無用の事のやうだが、それが實際の戰場に於て、忽ち價値を現して來るのである。

談は元に戻つて、南山の初戦の事のみ考へてゐた我等部隊は、勇みに勇み、否寧ろ狂ひに狂つて、遂に戰場の近くまで前進した。見れば此處の山陰、彼處の樹下に、方錐形の天幕が、幾個とも無く重り合つてゐたのは、云はずとも知れた、我軍の野戦病院であつた。其數の多きより、我等は戦闘の経過が氣に懸つてならぬ。殊に見る／＼中に、負傷者を載せた擔架が陸續運搬されては入り交り立ち交り、其擔架は更に再び戦線として急ぐのであ

擔架類繁

つた。又た歩行の出来る負傷者は、喘ぎ／＼數限り無く来るのであつた。擔架に横臥せるものも、歩行して来るものも、軍服も顔も泥と血とに塗れて、其勇戦苦闘を舌よりも能く物語り、眞白に白き繻帯の朱に染みたるが、殊に目立つて、此の中には名譽の傷を包んでゐるのであることを思はしめ、又た擔架を透してポツ／＼と地に印する血潮は、靈光を放つが如くに感ぜられて、彼等に言ふに言はれぬ威嚴が生じ、我等は尊く難有くて、覺えず感謝の聲を發せざるを得無かつた。

恰も此時、これより先き命令受領の爲に前進した聯隊副官は歸り來り、復命して曰く、南山は既に陥落したり、總隊備隊は鍾家屯附近に宿營して後命を待つべしと。嗚呼落膽！上は聯隊長より、下は馬卒の面々に至るまで、何と無く張合の抜けたやうな工合で、孰れも、張り詰めてゐた腕を撫して、残念やと地輔陥ひのであつた。敵が咽喉と頼んでゐた此南山が早くも陥落したことは、爾後の作戰に、何程莫大な効果を生ずるか知れ無いのであるから、此報を聞いては跳り上つて喜び祝ふべき筈であり、勿論大いに嬉しく思つたが、でも上陸地から一息も吐かずに、唯だ何でも早く南山でと意氣込んで、駆け付けた我等の身になると、目的地に近くや否や、唯の今陥落したと聞いて、ガツカリしたのも無理は無

さだらう。モウ坂一つ、之を越せば、即ち血の河、屍の山なる修羅の戰場、これ迄來ると今の今迄耳を醒せしめた砲聲はバツリと絶えて、山谷は静まりかへつた。唯だ負傷者のつぎ／＼後方に送られ来るを見たのみ。予等は彼等に逢ふ毎に其痛苦を慰め、其勞を謝しつゝ、一先此坂の上り口にて休憩した。其休憩地に、此戦闘に加はつた一馬卒が居て、さも得意氣に其激戦の狀を物語るのであつた。講釋師然と手眞似身振り、當時の我等になほ目新しかつた、敵兵の水筒などを見せびらかして、自分一人て戦をしたがやうに、からして、あゝしてと、鼻糞かして手柄顔に吹聴した。之を聞く我等——未だ一度も銃に填装せず、軍刀の鞘を拂はざる我等は何だか耻かしく、さまりが悪いやうであり、戦闘員ならぬ此馬卒さへが何と無くエラク見えて、其働振を賞揚しつゝ、種々なる質問を持ちかけて、其詳しい、そして得意な戦況談を聞かせて貰ふのであつた。

奥第二軍司令官の直接指揮下に屬せし我が總隊備隊の、今夜宿營すべく下命せられた鍾家屯へは、此處から元の道を一里半も引き返さなければならぬのであつた。其行軍の張合の無かつた事實に御話にならぬ。人も馬も首を垂れて、スゴ／＼と歩を拾ひ、空に舞ひ上

る黄塵を浴びて目も鼻もザラ／＼、黄粉餅と云ふ鹽梅。先きの晝夜兼行の急進軍には、砂塵の雨の中も、敵と云ふ目當があつたから、足の痛みも物かは、一圖に勇み狂うたが、今や戰場から後退りしての宿營と来ては、先の勢のあらはこそ。平時の機動演習でも、サブ銃砲聲が起るとなると、足の痛も軀の疲も、遂に忘れて飛び立ち、並足は速足となり、速足は知らず／＼駆足となつて、章駄天走りに敵の陣地へ突き込む迄は、九切り夢中となるものだが、一度背進となると、ソロ／＼足は重くなる、轍の跡も小石も一として癩癩に障らぬは無く、それは／＼は元氣も何もあつたもので無い。これは日本人の特質の一たる進むを知つて退くを知らぬ精神から、かうなのか。由來露國兵の退却に機敏なるに反し、日本兵は退却が下手だ。されど前進となると、彼に一步も負は取らぬ。彼等は驚くまでは唯だ前進あるのみとの氣質を遺傳的に得て、更に之を培養されてゐる。我軍が常に頑強なる露軍を壓服したのも、此精神が最大原動力をなしてゐたと云ふべきである。

退却は下手

運々として鐘家屯に着けば、荒村細流の邊、此夕月冷かに星稀に、自然は如何に將卒をして、黍殼引き結ぶ假の枕に、陣歿戰士を敷じて戎衣の袖を絞らしめしことなりしぞ。夜既に更くるも、此處に彼處に眠りもやらぬか、眼許り光からしてゐた者は、萬感交々胸

に迫りしが爲ならん。一聲二聲啼いて過行く村鵲 誰が口すさみか、微かに聞ゆる琵琶歌、嗚呼實に悲壯沈痛の一夜であつた！

予は遺憾ながら、南山の戰鬪に従事するを得無かつたが爲、茲に標題を『南山の激戦』としたもの、實は當時の激烈なる戦況を語るの權利を有せぬのである。切めて予の實見した同戦後の光景を次章に於いて、少しく物語つて、それより序を追ひ、章を重ねて、旅順要塞攻撃の實戦談に移らう。然るに今此章を終らんとするに臨んで、予は茲に一勇卒を紹介したい。

傳令卒楠武市

予等は王家屯を出發する際、我隊の任務と後續上陸部隊爾後の行進とに就いて、楠武市なる自轉車卒傳令使を、上陸地點の鹽大澳へ派遣した。楠武市は平素から、かゝる特別任務に服するに、常に其耐忍と豪膽とに依つて成功したのであつた。それで出征の際には、特に彼を聯隊本部附の傳令卒として、其中隊から擢拔してゐた。されば上陸後初めて此の大切な傳令勤務も亦た之を武市に命ずる事となつたのである。彼は日暮獨り自轉車に飛乗つて上陸地點へ向つたが、元々我等が王家屯に來た時も、道無き原野の中を踏み迷つて、ヤットの事で到着するを得たほどであつたから、武市たるもの素より安々と目的地に

自轉車を負ふ

達し得ることを期してはゐ無かつた。踏み馴れぬ支那の地、勝手は知れず言葉は通ぜず、彼は唯だ北極星を目當にして進んだ。受けたる任務は重大なり、彼にして一刻でも遅れるなら、即ち後継部隊の動作が一刻遅れるわけて、若しも南山戦闘の経過が豫定通り都合なく進捗せぬ時は、豫備隊たる我隊は、一兵でも多く一銃でも多く戦闘線へ出さねばならぬ、此豫備隊を隊長の手許に取纏める事の命令を握つてゐたは即ち楠武市で、彼が任務達成の如何は全隊の動作に非常な關係を有つてゐたのである。武市も出發の際に、隊長から能く／＼其事は示されて、重き任務だとは百も二百も承知してゐたが、内地とは異り、西も東も知らぬ遼東の野の八九里、剩へ道無き旅に眞の間、今は自轉車も却つて邪魔物となり、遂には之を負うて一心不乱に目的地を志したが、不幸にも彼は方角を誤つて、どうしても到着する事が出来ぬ、翌朝天明、更に一考したが、切々何處が我隊の所在地なるやの見當も分り兼ねた有様。忍耐にして誠實なる武市は食ふに食無く、飲むに水無きも、唯だ任務の爲の犠牲と覺悟し、之を遂行せねば死すとも大死、兎やせん角やせんと焦るは心ばかり、身體は遂に疲れ果て、後には一步も足を運ぶ事さへ出来ぬ程になつても、武市は自轉車を負うたまゝ、匍匐しては休み、休みては匍匐し、目當も無く、唯だ僥倖にして

傳令勤務

所屬隊を求め得るの萬一を冀ひつゝ、猶ほ其任務を忘れ無かつた。其夜幸にも憲兵の通過するに出逢つて、親切に道を教へられ、且つ一飯を恵まれたるに漸く力を得て、時刻こそは遅れたれ、遂に其目的を達すると得た。諸君は平時演習の際、他の多くの者は、行軍をしてゐるか、戦闘をしてゐるかに拘らず、鐵蹄軽く揚げて砂塵を飛ばし、『傳令』と聲掛けつゝ急駛する兵卒あるを見たりや。又た徒歩の儘でも、同じやうに隊伍の間を切抜け驅脱け、彼方此方へと馳せ廻る者あるを見たりや。彼等が即ち傳令使である。彼等は他の多くの者よりも一層重大なる責任を有してゐるのである。將帥が幾萬の大兵でも、自由自在に驅使する事の出来るには、傳令使の任務遂行に待つところ甚だ大なるものがある。されば此兵卒の双肩には、全軍に關する重大なる責務が荷はされてゐるので、此任に當るものは、勇猛、堅忍、思慮、果斷、此四の性質を具備してをらねばならぬのである。而して此の楠武市、彼こそは實に完全なる傳令使として、其勇、其忠、大に敬重すべき兵卒では無さか?

第八 戦後の南山

五十六

南山の價值

南山は金州半島の咽喉に當り、高峻からずと雖も、嚙响として深く、守備するには都合の能い處ではあるが、防禦陣地としての眞價から云ふと、一つ後の南關嶺に劣つてゐる。日清戦役の時には、支那兵一時此南關嶺に據つて抵抗を試みたのである。然るに露國が南關嶺を棄て、南山を撰んだ理由は、彼に取つて最も大切な不凍港の青泥窪(今の大连市)がある爲であつた。露國は大連灣頭柳樹屯の對岸なる地を下し、此處に青泥窪の大市街を建て、遼東唯一の高港となし、東清鐵道の起點となし、又た之を援護せんが爲に後方南山の地形を撰びて、半永久的の築城工事を施したのである。されば十年以來露國が旅順要塞と青泥窪市街との經營に、幾億方の資を投じて、無辜なる露國農民の膏血を絞るを厭は無かつたと共に、此陣地にも同様、出来るだけの力を注いで設備を盡したのであつた。故に當時敵の參謀將校にして我軍の捕虜となつた者が云つた通り、露軍では、南山は日本軍から如何程猛烈なる壓迫を被るとも、優に半年以上を支へ得べしと信じてゐたのである。然る

死傷四千餘

に第二軍の之を攻むるや、威を揮つて終地に進み、困厄に據まず、犠牲を顧みずして、あらゆる障礙を排し、一晝夜にして金州及び南山を陥れ、青泥窪を奪つた。それから推して此戰鬪の劇烈なりしことが想像される。二十七八年役でも、南關嶺の蹙破、旅順の占領が、必ずしも赤子の手を捻る如くに容易であつたとは云はれぬが、當時此方面の戰鬪に興つた將校で、今度も攻圍軍中に加はつた者が、南山の防備を見た時、十年前の戰爭は眞の戰爭では無かつたのだと語つた。それ程防禦堅固の南山であれば、之を陥るゝが爲に、我軍は實に四千餘人の死傷者を出したのである。されば其戦後の光景も亦た一通りの慘狀では無かつた。尤も之とて後の旗幟總攻撃に比ぶれば其惨烈の度、遙かに及ぶべからずではあるが、予は南山に於て、臍の緒切つて以來初めて激戦後の光景を實見したので、一しほ強く予の心を竦動せしめられたのである。

予等は鐘家屯にて、兎角の一夜を明かした翌朝、更に命令に接して、南山の麓にて閻家屯と云ふ村落へ宿營移轉をする事となつた。そして我聯隊の第五第六兩中隊は南山の守備を命ぜられた。

五十七

酷烈酸鼻の
状

に金州を控へ、左に大和尚山の險を望んでゐる。嗚呼此地、劇戰の巷となつて、砲聲、喊聲天地を撼かし、幾百の勇士は此處に屠られ、幾千の健兒は彼處に傷けられ、肝腦地に塗れ、死屍鮮血に漂ひ、腥羶の氣山野を蔽ふたはツイ昨日の事、今予等の此處に來つて、其後景に接するに、酷烈酸鼻の狀、予等をして目を蔽はしめた。戰後の光景は唯だ「悲惨」の二字を以て言ひ表はすより他に言葉があらうか。

火葬場

打ち見る山の一角に、白煙天に舞ひ昇り、異臭地を拂ふものあるは、これぞ我軍戰死者の火葬場であつた。國に殉じた尊き犠牲を焚くの祭壇であつた。幾百忠義の魂は、此煙に包まれて、遠く天外に昇つたことであらう。予等は覺えず脱帽禮拜して、彼等の英靈を弔つた。ア、故山には、糸繰る婦が隙間洩る風に手を休めて愛兒を愛ひ、征衣を縫ふの妻が懷に乳兒を撫して良夫を思ふの時、安んぞ知らん、其時既に其良夫、其愛兒は肉飛び、骨摧け、流るゝ血潮は草を染めて、今又た茲に茶毘一片の煙と化したりはは！

死屍累々

朱に染まつた綱帶の切端を見るすら、決して心持の好いものではない。然るにまして此の谷、彼の岩陰に死屍累々として黒く、紫色の血の塊が全身を染め、顔は青黒く、臉は膨れ上がり、頭髮は血と埃とで固まり、白き齒の四五枚軽く唇を噛んで、赤き襟のみ目立つ

敵の屍體

てゐるのを見たならば誰しも悚然として戰くことであらう。予等の如きも實に戰慄せずにはゐられ無かつた。而して我身も明日は斯くなり果つるのかと思つた。死骸に近づいて委しく見詰める者は恐らく一人として無かつた。遠くから指して其凄じい有様に寒心したのであつた。到る處、血に塗れた脚絆、軍服や編絆の切片、さては帽子などが散亂し、腥き風は絶えず鼻を掠め、懐怕の狀、鬼氣人を襲ひ、更に戰陣の那計り猛烈であつたかを忍ばしめた。無數の彈藥箱や藥莢が、散兵濠の附近に堆積してあるのを見ても、如何に敵は必死となり、彈丸の数を盡して我に雨降させたか知れる。敵の屍體を見て、少くとも憐愍の情を呼び起されぬ者は恐く無かつたらう。敵とは云ひ乍ら、彼等も國の爲に殞れた勇士、されど戰敗の悲しさには、設令我軍の丁重なる埋葬を受けても、姓も知られず、名も残らず、ムザ／＼犬死同様となつたのである。故郷の空には親もあらう、妻もあらう、子も待つてゐるだらう。されど其父、其夫、其子が何地で何時戰死したか、多くはそれだに知らずして、彼等は待ち詫びてゐるだらうに。敵の死骸のドレを見ても、十字架を胸にするか、又たは華像を手にしてゐた。彼等は神の手に導かれ其の福を享けつゝ、瞑目したのであらう。敗戦軍の死傷者ほど哀れなるは無い。赤十字條約の規定によつて、彼等も其敵から平等

無差別の取扱を受くるものなりとは云ひ乍ら、ア、敗軍はなすまじきものぞ！ 戦て敗れた耻辱の上に、戦友とは離れ、言葉も通ぜぬ敵の手に落ちたる負傷者の悲しみや如何に？ されど彼等はまだ幸福なので、戦死者に至つては、實に哀の極である。認識票があつて、番號で姓名を引合すやうになつてゐるから、分るだけは敵軍に知らせてやる筈であるが、それさへ判明せぬ場合も屢ばて、遂に何處の誰なるか知れず仕舞ひになるのである。

閻家屯に先づ假の宿營設備が出来た夕方、予は予等に當られた民家に來ると、其隣戸でしきりに人の呻き苦しむ聲がした。予は急ぎ駆け込んで見ると、これが眞に地獄の苛責とも云ふべきものだらう。我軍の重傷者十五六名と、敵の負傷者一名とが、庭に打倒れたまゝ重り合つてもがいてゐるのであつた。最先に予を見付けた一兵卒は、手を合せて予に救助を哀願した。何の拜むことがあらう！ 何の頼むことがあらう！ 救ふは當然。可憐の戦友が、かくも人知れずに悶えてゐるやうとは、シイぞ知ら無かつた。一時でも早く知らば、早く手當も出来たらうに。此状を見て予は覺えず落涙し、直に軍醫を招いて、彼等の救助に力を合せた。軍醫が手當の間にも、彼等は絶えず、御恩は忘れませぬ、難有うございませすなど言ふ其言葉は、心底より絞り出して、目には一杯涙ぐんでゐた。問へば既に二日の

間、一粒の飯、一滴の水も口にするを得無かつたのことであつた。孰れも重傷ならぬは無く、足の折れた者、手の挫けた者、又は頭部や胸部に彈創を蒙つた者、中には最早半時の命の覺束無き者も交つてゐたが、互に勞り慰め、手を取り合ひ胸を摩り合つてゐた。見るからに、其の傷しさ、其の哀れさ！ 如何に名譽の負傷者とは云ひながら、四千に餘る多くの死傷者を出したること、手當の行渡り兼ねたも是非無き事と思へば、彼等の更に不憫さ！ 少時すると、其中の二名は見る／＼顔色遽かに變り、呼吸も微になり行いたので、予は走り寄つて打成りゐたるに、涼しき眼は次第に瞑ぢ、唇は動か無くなつた。側なる戦友は涙ながらに、彼の一人の兵は、國に唯獨りの老母を残して出征したのであることを語つた。

惨又た惨なる戰場にて、殊に哀れに目を惹くものは、或は傷さ或は斃れた軍馬である。彼等は遠く海を渡つて、住馴れぬ朔北の野に、彈飛爆鳴の間を馳驅したのである。日頃愛育せられた高恩は、此時にこそ報ゆべきであると、鐵蹄軽く主人を負うて走り、能く其重任を助けたことであらう。日頃訓練せられた伎倆を表はすべきは此時にこそと、重き荷物や多くの車輛を運搬したことであらう。而して毫も其苦痛を訴へ無かつたであらう。戰場

軍馬の功績

に於ける軍馬の勢力は、一通りや二通りの沙汰では無い。戦陣の経過が、いつも幸運に繼
續せらるゝは、素より勇敢なる將卒の力に頼るのではあるが、又た能く其任務を心得、骨
身を粉にして、或は主人を乗せ、或は糧食、彈藥を運搬する忠實なる軍馬を記憶せねばな
らぬ。戦勝の幾分は實に軍馬の功績に歸せねばならぬ。然るに彼等は常に粗末な秣や、濁
つた水に甘んじ、雨の晨も雪の夕も、露天に曝されて、主人が軽く叩いて慰撫してくれる
のを、無上の喜びとしてゐるのでは無い。其重大なる任務の爲に勞苦するに至つては、
殆ど兵士と變りが無い。されど畜生に生れた悲しさには、傷けども訴ふる能はず、藥餌を
恵まるゝても無く、慰藉せらるゝても無く、のたうち倒れて、遂には悲しき呻聲を此世の
名残に絶命する。死して又た葬られず、屍は其儘打棄てられて、多くは狼の喰ふところと
なり、鴉の啄むところとなり、太く逞しき骨は、荒野の風に吹き晒されて朽ち果つるの
ある。彼等忠實なる軍馬も亦た其本分の爲に斃れた名譽の戦死者である。されば將卒が悲
慘なる戦場の紀念と共に、厚く之を用ひ、深く之に感謝すべきでは無さか。吾師中林浩林
和尚は、此度の戦役中奮つて看病人となりて従軍し、親しく負傷者を看護したと共に、陣
没軍馬の爲め、永く追善供養を施して其靈を慰めんが爲に、彈片を集めて馬頭觀音を建立

馬頭觀音

馬の赤十字

せんことを企圖して、今や既に其實行を見るに至つた。童阿彌なる人は又た、兵士の爲に
赤十字條約のあると共に、軍馬の爲にも亦た一種の赤十字條約無くんば、人道に反し、動
物愛護の道に欠けてゐると主張し、此議を万国平和會議に提出して、列國の協賛を求めん
とて奔走中であると聞き及んだ。勿論軍隊では馬匹の爲に、獸醫が備はつてはゐるかなれ
ど、戦場で傷き病める軍馬に對して思ふやうに手當が行届くもので無い。此缺點を補ひ、
可憐なる軍馬を慰藉せんが爲には、馬の赤十字は至極結構な計畫である。

南山陣地の
配備

予は又た南山陣地の配備を視察せんが爲に之に登つた。流石は露國のやつた事として、防
禦の配置に殆ど手落が無い。鐵條網、狼狽、地雷は素より、堅固なる散兵壕はグルリく
と幾重にも山を取巻き、機關砲の銃眼は到處に穿たれ、多數の重砲は砲臺の上に其砲門
を現はしてゐる。そして半永久的の築城であるから、兵營もあれば倉庫もある。其倉庫に
は冬期使用すべき、凡ての被服類が充滿してをつた。輕便鐵道もあれば、食糧包の製造所
もある。予は又た敵の司令官の仕立てゐた建築物の中へ這入つた時、彼が如何にも整潔な
呑氣な生活をしてゐたものであるに一驚を喫せざるを得無かつた。室内には美麗なる裝飾
が施されてあつて、これも陣中の生活かと怪しまれ、殊に甚だしく奇怪に感じたは、女

の寝具や化粧道具、それに子供の衣裳などが散亂してをつたことであつた。
此場所から、双眼鏡を手にして遠く東海岸を望めば、無数の人馬が波打際に斃れて、灰色の波に洗はれてゐた。これを即ち敵の騎兵旅團が、老虎山方面に屯在して、陣地の右翼を警戒してゐるに、我第四師團が西海岸からして、敵の側背に逼つた爲、退路を遮断せられて立ち場を失ひ、遂に海中に追ひ落されて、殆ど一騎も剩さず、水葬になつたのである。これは己が陣地の堅固なるに依頼した爲、退却の時機を失ひ自滅を招いたもので、實に可哀さうであつた。

山の半腹に探照燈の破壊せられたのと、光弾の無数に積重ねられてあるのを見た。我攻撃軍が、夜陰を利用して敵に近接するに就きて、いつも其運動を阻害せられたものは、即ち探照燈と光弾とであつた。此の探照燈は占領の後、兵卒が此の奴と云ひ乍ら、銃床で鏡面を叩き壊したものであつた。

無限の悲愁は予の胸裡に往來し、見るものとして傷心の種ならざるは無く、聞く事として断腸の媒介とならざるは無かつた。戦死者の忠魂を用ゝ假の木標は、追々と此處や彼處に建て置かれて、昨日まで英姿颯々たりし若武者の紀念に、手向の涙を漲がしめた。又た

視察の爲南山より金州に赴く途中に一堆の土が盛られて、上に竹が一本建つてゐた。只だ何心無く之を踏むと、土は潰れて露兵の死骸が現はれた。人の死骸を踏んだは、之が抑も初めて、予はキョットと膽を冷した、其の心持は今でも思ひ出される。要するに當時の予等は、まだ一戦もせず、殺氣満々たる戦場の光景にも馴れてゐなかつた爲に、自から其悲劇と其罪惡とに戦慄したのである。然るに今となつて考へると、實に不思議のやうであるが、之は誰も同様で、一回二回と弾丸の下を潜る數が殖えるに従つて、先には悲慘と感じたものも、後には左程に思は無くなるし、先には見るに堪へ無かつた事も、後には冷々と見流しにするやうになつた。これと云ふも全く、馴るゝに連れて感覺が鈍つたせゐてもあらうし、又たサウ／＼氣に留めてゐては、到底際限が無いから、自然かう云ふ氣分に變つたものなのであらう。

我軍能く十六時間の激戦に耐へ、猛烈なる十字砲火を冒して、數度の突撃を試み、遂に多大の價を拂つて南山を陥れたる其効果によつて、金州半島活殺の權を我に收め、敵の連絡を絶ち、大連灣は掃海に着手せられ、旅順要塞の攻撃に要する如何なる準備も、遺憾無く之を整へて、其死命を扼するを得るに至つた。南山の勝利は世界の戦史のレコードを破

つたものである。此大捷を致したる所以のものは、全く銃砲彈藥の力にのみあらずして、堅忍不拔なる兵士の精神に依ると最も大なるものであつた。攻撃中第三回突撃の効を奏せざりしや、奥司令官は剛聲叱呼「大和魂とは、どんなものか！」と曰はれた。すると全軍俄かに奮ひ立ち、破竹の勢を鼓して、一息に乗り取つたとの事である。英國大使マクドナルド氏は、日本軍が連戦連捷の最大動力は「銃後の人」に在りと云はれたが、此戦役に於て、南山は先づ此の「銃後の人」の力を著大に證明したものである。

備録

第九 守備と偵察

張家屯へ行

予等が張家屯を出發して、第三師團の守備隊と交代せんが爲に、張家屯に達したのは丁度五月の廿八日であつた。南山以後、予等の師團は第二軍と分れて、新たに編成せられた第三軍、即ち乃木大將閣下の指揮せられた旅順攻圍軍に属したので、それで第三師團と交代することにもなつたのである。さて張家屯より張家屯に至る間の行軍は、さして遠い距離では無かつたのだが、今日でも行軍と云ふことを考へる度に、此日の行軍を思ひ出さずにはをられぬ。旅順附近の岩礫地を除く外は、このあたり凡て一面の糠のやうな灰のやうな土質で、連も眞向に歩かれたものには無い。黄塵萬丈とは、蓋し如斯きを形容した語であらう。疾風は砂塵を怒濤の如くに煽り上げ、巻き起して、長蛇の如くにうねり／＼つて行軍する我々を呑み込めんとする勢で、一寸先も見え無い事は度々、時とすると隊の連絡を失はんとしたことのあつたくらゐ、目と云はず、鼻と云はず、口といはず、皆灰砂で埋まる、これは決して法螺では無い。實際蓋をした飯盒の中の大事の飯までが、埃に蔽はれ

てゐたのである。平時予等は十里も二十里も晝夜兼行で行軍したこともある。半分駆足で十數里の道を急行進したこともある。一滴の水さへ口に入れず、無理と行軍して見たこともある、鼻を摘まれても知らぬと云ふ程の暗夜に進軍したこともあつたが、未だ嘗て如斯き辛苦極まる行軍をしたことは無い。これが即ち戦地に來た價値だかと思へばサツでもあらう。戦地に在つての困苦辛勞は素より覺悟の上であるが、直接、劔の突き合ひ彈丸の撃ち合を主眼にしてゐると、雷だ唯だ野を過ぎ山を踰へ、雨に浴し風に梳り、或は暑さ、或は寒さに、狎も習はぬ草枕に、無情の山川をのみ眺めて暮らしてゐるのが、初は漫に憂愁の念に堪へ無かつた。されど彼れも此も皆、取りも直さず戦闘だと思ひ返すと、いつしかに馴れて、行軍も露習も、苦痛を感じしむることが少くなつた。否、高梁畑や岩の陰の、天地廣闊たる大廣間で、明月を仰ぎ虫聲を聞くは、金殿玉樓よりか洒落てゐるぞと呑氣な事を云ふやうにもなつた。

五歩にして小憩し、十歩にして大歇すと云ふ工合にはいかず、ドシノと行軍を續けて張家屯に達し、無事に第三師團と交代した。予等が初めて此師團の兵士を見た時には、何と無く氣耻かしくて、身が縮まるやうに、意久地が無いやうに感ぜられた。彼等で見れば、

ア、羨まし

怒龍奮獅の勢を以て、南山の強敵を壓倒し、身には名譽の光輝ある経歴を備へてゐた。之に引換へ、我等は如何？發車に乗運れた田舎者のやうに、アングリ口を開けて、殘る煙を眺めてゐると同様、胸甲斐の無い境遇であつたでは無いか？彼等が羨ましく、彼等の戦袍はさぞや裂け破れて血を印してゐるであらう。彼等の席には、名譽の傷が生新らしく包まれてゐるであらうと思ふことより、また埃塗れの帽子、血染の脚絆などを見ることよりして、彼等が實に慕はしく尊げに仰がれた。彼等の容貌、彼等の舉止は、言葉無くとも、勇ましく其戦功を語るもの、如くに見えた。

警戒正面

我部隊の警戒正面は、敵の警戒線に對する高地であつた。軍全般から云へば、安子山より毛頭子峠を経て、安子山に亘る一帯の地點で、延長實に二十五吉羅米突（六里強）に陣伍を張つてゐた。而して我隊の占めた陣地は、右は李家屯と云ふ村の南の毛頭子峠より、左は河を隔て、李家屯と云ふ村の南一帯の丘陵に至る間、此所に堅固なる工事を施し、外には専ら敵を搜索し、内には攻撃の諸準備を整へつゝあつた。斯する中、乃木將軍は幕僚を率ゐるて青泥窪に上陸せられて、同地の西北方約三里を距てたる北泡子崖てふ一部落に達せられた。これ先づ軍の編成は一通り出来上つたのである。扱て是れよりして我等は如何な

る事をして、初戦の時機を待つてゐたらうか。
南山で大敗北した敵は、青泥窪に未練は残つたけれど、詮方無く之を棄て、取るものも取り敢へず、先づ婦人小兒を載せて走り、次序に三十里堡も焼き拂つて、袋の底の旅順方面へ逃げ込んでしまつた。そして要塞からは前面の盤頭、亂泥橋、歪頭、雙頂などの山々を嚴重に守り運ねて警戒線を作り、我軍と三千米突乃至五千米突の處で對峙してゐたのである。これは我軍が斥候を派遣し、又は偵察隊を出した後で、漸く大體の形勢を突き止めたのであつた。

予等は守備線に就くと、其日からして、十字鉞や方匙でカチン／＼工事にかゝり、此處が砲兵陣地、彼處が第何大隊第中隊と、それ／＼に區劃せられて、受持の區域に、夜と無く晝と無く工事を急いで散兵濠を築く、將校は士方の親分、下士が組頭、兵卒が人足、それと土ばかり掘つてゐた。而して其間には絶えず將校斥候や下士斥候を敵方に派遣して、其動靜を搜索せしめてゐたが、まだ何の模様も知れ無かつた。其中工事は日々に進捗し、第一線たる散兵濠や砲兵の掩壕は立派な堡壘を築き上げ、青泥窪から色々な布地や袋類を取寄せて土囊を作り、それを胸牆(散兵濠の堤防)を固めた。また單簡な鐵條網も張られ

る、見事な新道路が開ける、各隊を連ぬる近道は蜘蛛の巣のやうに造られ、かくて終に殆ど半永久的とも稱すべき程に堅固な守備線が出来た。そして各部隊はあらゆる人家を利用して、庭先や櫓の下には天幕を張つて宿營も整ふ、先づこれで可なりと云ふになつて、それから愈々多數の斥候や偵察部隊を四方に派遣して、敵の動靜、其兵力等を詳細に搜索せしむる事となつた。

觀兵式や平時の演習では、軍隊は華々しくて香氣なやうに見えるが、戰場は大敵を相手の眞剣勝負だ。まだ鎧を削らずに、互に睨み合つてゐる守備警戒の時の覺悟で、既に勝敗の數が豫定せられる。だから此地位にある軍隊は夜だとして安眠を食ふ事能はず、寒いからとて、火など焚いて安閑としてはゐられぬ。否な夜間が殊に大切なので、一寸の隙も油断がならぬ。即ち警戒線にある歩哨や、前方に出る斥候は、原頭寂として草木既に眠り、銀河天に漲つて夜多凄然たる時も、晝の疲れの如何に甚だしからうが、目を張つて前方を注視し、耳を澄まして、虫聲さへも聞き流しにはせぬ。飛禽走獸と雖も見逃しにはせぬ。息を殺し、頭を冷かにして、後方にある全軍の爲に、靈活警敏なる耳目の働さをなすのである。人の戰爭を云ふ、多くは戦線に於ける兵士の勇壯なる働振を稱することであるが、又た警

戒線に在る時の彼等の辛勞と重任とをも察し無ければならぬ。此重任を油断すると千七百七十七年米國獨立戦争の間に、一步哨の過失によりて、英軍の三個聯隊が、米軍の爲に全滅したやうな、恐ろしい目に逢はぬとも限らぬのである。

歩哨の誰何

『止め！止め！…誰か？』

斯く歩哨が淋しく誰何する聲が微かに聞えて、夜は益す寂寥になる。忽ち歩哨線の方角に當つて、闇を破る一二の銃聲。多分敵の斥候を認めたのであらう。又た寂寥になる、空はいよ／＼更ける。一團の雲は北より起り、次第に延びて、今は滿天に墨を流したやう、雨は早やポツリ／＼と降り出す。予等は斯く物凄き警戒線上にあつて、敵を監視してゐたこと殆ど二十日。此間に行はれた偵察等に就いては、これより少しく話さねばならぬ。

敵の斥候

我守備線の整頓した頃になると、敵の斥候もそろ／＼と頭を出しかけた。それで一夜として我歩哨線の近傍に於て銃聲の起らぬことは無かつた。

『中隊長殿、敵の歩兵斥候五六名、前方約五六百米突の谷地に出没す。』

此種類の報告は日に何回と無く繰返されるやうになつた。其内には吾歩哨線で、追々と色々の工夫をして、敵の斥候を捕獲せんとするに努めた。かう云ふ事もした。歩哨線の前

方二十間程の處へ繩を一線に張り、其の繩から更に一條の繩を歩哨の足許に引いて、若しか敵の斥候が、我歩哨線前へ来たならば、其繩に引羅つて、歩哨の足許で知れると云ふ思付であつた。ところが或時果して歩哨の足許に信號が傳へられたから、ソレと云つて捕獲に行くと、一向に敵らしいものは見え無いて、一疋の大きな黒犬がグワンと吠へ付いた。

第十 捕虜の初獵

我軍の斥候は追々に増加せられて、第一線に在る部隊からは勿論、後方の豫備隊からも續々派遣せられてゐた。そして大抵は敵の小斥候と遭遇して、之を撃退するか、又は敵の稍密集せる部隊の所在地を発見して歸ると云ふ場合に、毎也都合能く成功して、旅團長、聯隊長等の要求に合することが出来た。殊に手等は敵と初對面の事であつたから、彼等がどれ程の腕前を持つてゐるか、力競べをして見んと、我も我もと競争して、斥候に出ることを希望してゐた。

土岐少尉

六月二十日頃の事であつた。土岐少尉(徳吉)の將校斥候は、部下半小隊ばかりを率ゐて、亂泥橋附近の敵情搜索の爲に出發した。其日は不思議に敵の斥候に出逢はなかつたから、一分隊の後衛を備へて歸途に就いた。ところが突然後衛と少尉の連れた隊との間に、敵の斥候が二名現はれた。スワと之を取圍んだが、彼等は中々頑強で、銃剣を揮つて抵抗し、容易に降参し無い。小癩な露助と、二三發ドン／＼と放つて、彼等を盛じた。併しまだ死

捕虜二名の訊問

にはし無い。殊に最初の捕虜であつたから、訊問して敵情を知らねばならぬ。それで楚の急造擔架に彼等を載せて、凱歌の中に、聯隊本部から少し距つた、小川の側へ連れて歸つた。何が扱て捕虜の初獵であつたから、其處からも此處からも、どんな顔をしてゐるか見てくれんと、人々黒山の如くに集まつて來た。頓て旅團副官と通譯とが來て、此二名の捕虜を別々に分ち置いて、各個に訊問を始めた。凡て俘虜に就いて敵情を知らんとするには、各人各個に場處を違へて訊問し、彼此言ふ所を對照して、情況の眞偽を明かにするものである。而して其訊問には、先づ其兵の所屬部隊、高等指揮官の氏名、前夜の宿營地、士氣の振衰等を糺すのであるが、悉く其等を問ふの暇無き時でも、彼の所屬部隊だけは必ず聞かねばならぬ。これは其部隊を知るに由つて、敵が如何に兵力を分配してゐるか、判明せらるゝ故である。譬へば狙撃歩兵第一聯隊だと云へば、即ち此隊は誰の指揮に屬して、かう配備せられてゐるのだらうと推測が出来るのである。

軍醫は彼等捕虜に手當を施し、色々と勞つて、

『心配することは無い。氣を静かにし、訊問に應じて眞の事を答へよ。』と懇切に云ひ聞かせた。而して又た軍醫が云ふには、此捕虜は二人ながら胸部の貫通銃

七十六
創で、今より一時間の生命が尙無いと思ふ、可成氣の確かな中に、要點だけ訊問したが宜からうとのことであつた。訊問者は其一人に向ひ、

哀れな捕虜

「汝は何處の第何聯隊であるのか？」
彼は苦しさを忍んで、

「狙撃歩兵第二十六聯隊。」

「汝の師團長は誰か？」

「知らぬ。」

通譯は更に念を推して、

「知らぬことはあるまい。汝が自分の師團長を知らぬ筈は無さ。」

彼は誠實の色を顔に呈して、其語の虚偽ならぬことを示してゐた。そして呼吸は頗る苦しげに、口からは頻りに黒血を吐いてゐた。

「水を飲まして下さい。」

傍に在りし予は一杯の清水を求めて彼に與へたが、それを見向きもせずして云ふには、
「私の水筒に、沸かした水がはいつてゐる、それを飲ませて下さい。」

衛生を重んず

予は乃ち求むるまゝに之を與へつ、而して彼は息三寸將に絶えなんとしても、決して敵の與ふる水を口にし無いと云ふ精神なるや否やは知らねど、此時に當つて猶ほ日頃敵へられた衛生の道を重んじて、生水は決して呑まぬとの心掛を忘れざりしことを感嘆した。これ位の男だから、豪膽にも能く我斥候隊に敵し、劍を揮つて最後まで戦つたのである。されど師團長の氏名を知ら無かつたのは、實に彼に限らず、露兵の多くは之を知ら無いつてあつた。予等後に至つて多数の捕虜を訊問した時、多くは同様の答を得た。而も何の爲に戦ひ、誰の爲に戦つてゐるか、それは知らぬ、唯だ何だか分らずに驅り立てられて來たのだと云ふものが十中の八九であつた。

最早彼に向つて重ねて審問するの時間が許され無くなつた。彼は色益す白く、呼吸は次第に切迫して、頓て臨終と見えたから、軍醫は、

捕虜の末期

「苦しいか？何も言ふ事は無いか？」
彼は此情ある間を喜んで、僅かに頭を擡げ、紅涙ホロリと一滴、

「私は國に妻と一人の兒があります。どうぞ私の戦死の有様を知らせて下さい……」
と云つて間も無く息は絶えた。ア、彼は何が爲め身を犠牲として戦ふものなるやも知らず

に、遙かに此地に驅り送られて、不運にも敵手に陥り、故郷の妻子を憶ひつゝ、荒涼たる原頭の露と消えたるは、敵乍らも予等をして同情の涙を催さしめた。彼は死後厚く弔はれて、遠山布教師讀經の供養を受け、十字架墓標の下に葬られた。

残る一人は、右の可哀さうな捕虜とは打つて變つて、其態度と云ひ、其口振と云ひ、面憎さくこと限り無してあつた。如何に敵なりとは云へ、彼等個人に對しては何の怨恨も無いのであるから、其心の哀れむべきは哀れみ、其愛すべきは愛するのであるが、此捕虜に至つては如何であつたか、通譯が、

「汝の聯隊は、今何の方面に宿營してゐるか？」

「やかましい、知らぬわい！日本人は殘酷だ、降伏したものを滅多撃にした。スープを飲ませろ、煙草をくれろ。」

先づかやうな面憎さ加減であつた、これは敵前に膝を屈せぬ豪毅の精神から出たのである。何でも無く、唯だ横着なものであつた。後日の捕虜も多くは彼の徒であつた。是と云ふも、彼等は南山では大打撃を受けたとは云へ、まだ充分に日本軍の腕前を知らず、殊に後に金城鐵壁の旅順を控へてゐたのを鼻に懸けて空威張をしてゐたのである。彼等は又た井底の

横着者

蛙で、我軍が九連城方面にて大捷を奏し、鷄林入道より露人の足跡を絶つた事を一向に知らず、話して聞かせても更に信じなかつたのである。國の大なると兵の多さを以て矜つてゐた露軍、彼等の迷夢は果して何の時に醒めたらうか？

如斯くに、我隊は日々夜々、敵情を知悉せんことに勉めてゐた。或時の如きは大隊長の率ゐる一個大隊の偵察隊を放つて搜索したが、果然敵の騎兵一隊と衝突して其多くを斃し、乗馬を生擒したこともあつた。敵からも亦た絶えず偵察をなし、遙か歪頭山では、展望哨らしき者の、頻りに黒い旗を振つて信號をしてゐるのも見えてゐた。時には又た支那人の服装をした斥候を放つて、我前哨線を窺はしめたこともあつて、最初は馴れぬ事であつたから、此方では只の支那士民だと油断してゐた中に、突然哨兵が撃たれたことさへあつた。それで後には前哨線で一層の警戒を加へ、假令支那人でも決して我第一線を出入せしめぬことにした。それで或時、前哨線前に住む村長が、出入を禁ぜられては甚だ困るから、村内へ避難をさせてくれと哀願した。よつて旅團司令部では別に委員を命じて、愈々疑無き者で、家族か親戚かのある者に限つて之を許可することにした。だが支那人と云ふ中々以て氣の置けない奴等て、中には露兵から金銀の後光を拜ませられて間諜をなし

支那人の賈物

軍に不利を與へた者も少く無かつた。
 かくて我軍は又た、内に凡ての準備に急いでゐたが、暫くは未だ機會の熟せざりしと、一つには軍略上の或理由があつたのとて、姑くは敵の行動に任せて、自から攻勢を取らず、唯だ來襲の押へをしてゐるのみであつた。此時分又た敵の軍艦は、近く小平島、黒石礁附近に出沒して、我陣地を搜り撃ちにしてゐた。かくする中、時は愈よ來り、六月二十六日を以て攻圍軍は活動を起し、予等の部隊の嚮ふ所は歪頭山及び劍山の戰となつた。

第十一 歪頭山の初陣

敵陣の高地

殆ど半永久的の陣地に就いて、敵と絶えず小闘合をなしつゝ對峙してゐたことは、實に三十日にも及んで、戰機の熟するを待つてゐたが、茲にどうしても棄て、置くべからざる事があつた。それは敵陣地中の高地からして、我が陣地の内部を窺望することであつた。彼には高さ三百七十二米突の歪頭山と、三百五十二米突の雙頂山と、又た此等に優つて高峻堅固な無名山(後に劍山と命名せらる)とがあつた。此等の山は敵の陣地中でも、殊に要害が良く、而して遠く我地區内を展望して、居ながら偵察が届くのであつた。敵は此等の高地に精巧なる望遠鏡を備へて、我陣地、大連灣、青泥窪等に於てする作業を瞰望するので、我軍の不利は夥多しきことであつた。若し一日たりとも永く、此等を彼の占領區域として放棄して置くならば、我軍は爲に後方の緊要なる作業に遲滞を生ずるのみならず、又た時としては進軍發展の機を失ふかも知れぬので、早く此等の地點を一括占領して、彼が地の利を奪ひ、我の不利を掃蕩せねばならず、併せて敵艦の屢ば出沒する小平島を我占

領地内に包み込んで、大連灣の掩護を確實にせねばならぬのであつた。是れ即ち予等が最初の戦闘として、歪頭山を攻撃するに至つた所以であつた。

これが初陣

歪頭山の戦は無論激戦と稱すべき程のものでは無く、唯だ此高地に占據せる敵の若干部隊を驅逐すれば足るのであつた。殊に要害を頼んで著しき防禦工事も施しては無かつたから、之を攻むるにさしたる困難も無いのであつたが、兎に角、是が少くとも火蓋を切る最初の戦闘であつたから、予等の覺悟も亦た格別であつた。

秘密命令

二十五日即ち守備最終の日の夜はいたくも更け、露營の篝火も已に消えて、折々驢馬の淋しき嘶きを聞く時に至つて、秘密の命令は傳達せられて、予等は直ちに戦闘準備に取かかることとなつた。何故真夜中になつて、此の様な命令が達せられたかと云へば、これは取りも直さず、土民に對する顧慮に基いたものであつた。實は二十四日に既に前進攻撃を開始する筈であつたのに、出發の仕度には、露營地の設備を撤去する事を始めたところ、土民が直ちに此狀を敵に内通したらしい兆候があつたので、其日は止め、愈よ二、六日拂曉攻撃と定まり、今夜は何喰はぬ顔して、土民に勸付かれるのを豫防してゐた。予も其の夜は中々に眠られ無いて、彼方に兼返り、此方に起き返り、或は明日の戦闘を想像して見た

出發の仕度

り、或は隣枕の战友とたわいも無い事を話したりしてゐたが、向ふの方でも闇中にチヨイチヨイ煙草の火が淋しく光つてゐるのを見ると、予と同じく眠りもやらで、考へに耽つてゐるものゝ少からざるを知つた。

頓て露營地は何となく活氣を呈し來り、將卒悉くムツと起き上り、なるべく音のせぬやうに、なるべく聲を立て無いやうに、天幕を巻むやら、外套を巻くやら、兎角音のする背囊も静かに負ひ、草に磨する靴の音にも心しつゝ、又銃線に集合した。折しも空は夏雲の墨を流したるが如く、夜色朦朧として、唯光れるものは、銃剣と帽子の星章とばかり。眼だけは眠むさうであつたが、衆は皆云ふに云はれぬ殺氣を帯び來つて、威風の凜平として犯すべからざるものがあつた。

「忘れ物は無いか？」

「火の氣は無いだらうか？」

暫くして全線は無言に、健兒は静に列伍を組み『静に行進』と云ふ號令で、ソロ／＼前進を始めた。何ても此部落を出る迄は土民に觸れ無いやう、彼等が朝起きて見て、オヤア！と驚く工合にしてやりたかつたもので、平素から訓練せられてゐる所謂靜肅行進をな

靜肅行進

八十四

して出發したのだ。さう乍ら守備の三十日もしてゐた事であるから、此土地も何と無く第二の故郷のやうに思はれて心が残らぬでも無く、また一樹の蔭に宿り一河の流を汲むだに他生の縁はありとかや。茲に士民の中に、張殿中と呼べる明朝遺臣の子孫で、これ迄千極まめやかに、我等のため朝の水から夕の火まで甲斐々々しく世話をしてくれた老翁が、我等の出發と心付いて、前夜は一睡もなせず、何から何まで世話をしてくれた老翁が、我々は、部落の出口まで見送つてくれた。されば彼と予等とは多少の因縁去り難く、其後も折に觸れては、此忠實なる老翁が予等の話題に上つてゐた。

曉霧模糊として太陽未だ東天に昇らず、旭旗皇軍を指麾して進むの時、遙かに右翼の方面數發の砲聲を聞き、戦端正に開かれたるか？

軍の左右兩縱隊此の時みな動く。右縱隊は盤道西南方高地の敵を攻撃すべく、左縱隊は北、亂泥橋東方高地より標高三百六十八の高地を経て、黄泥川、大上屯の東北方高地に沿ひ、南、雙頂山に亘る一帯の敵を攻撃すべく、部署はそれ／＼定められてあつた。

歪頭山を攻撃すべく部署せられたる我が左縱隊の中央部隊は、隊伍肅々全軍枚を啣み、馬に依り、旗を巻き、矛を伏せて逼り進み、既に近接するや、敵は山上より猛烈なる一齊

八十五

射撃をなして頑強なる抵抗を試みた。中々以て好敵手ぞ！我隊はスハと云ひなり、劇烈なる急射撃を以て之に應じ、盛んに彈丸を送つたが、敵は山上、味方は山脚、敵彈は夕立の雨の如くに、バラ／＼と我頭上に浴びかゝり、足許の砂を煽り立てた。戦鬨の序幕はこれにて開かれたので、是からが土俵際の手汗を握る處、飛び来る彈丸、撃ち返す銃砲、一刻は一刻よりも、一彈は一彈よりも益々激烈となつた。無煙火藥の爆發瓦斯は、一種の惡臭を放つて戦線を蔽ふ、銃の遊底を開閉する音、グララリ／＼と飛び跳ねる藥莢の音、ヒュン／＼と唸る小銃彈、ゴウ／＼と轟く大砲彈、傷つ者、斃る者、劇なり慘なり、否、な壯快！「前へ前へ」の號令は絶えず各所に起る、嶮しき山も、劍なす岩も何のその、踏みめ踏み鳴らし、足を速めて馳け登る、藥盒の中て丸が騒ぐ、劍が跳る、心が躍る、進むは撃つは、撃つは進むは、敵彈は篠突く雨、味方の彈は砂を巻く風、いよ／＼烈しくなつて來た。

喊聲を揚げて敵の胸腹を突き抜くまでは、先づ火力を以て制壓を加へなければならぬ。銃劍は最後で、火兵は戦鬨經過の大部分を占めてゐる。故に射撃には最も注意せねばならぬ。だが一度戦鬨になると、頭の尖から足の尖まで躍り立つ、夢中になる、沈着の動作は

沈着の動作

中々に得難い。それではいかぬ。照進するにも、引金を引くにも、周圍が如何に喧噪であらうと、如何に慘劇を演じつゝあらうと、決して氣を焦つてはならない。こゝが戦闘で強弱の分るゝ大切な點である。

引金は靜かに引けよ、心して、

夜寒に霜の、落つるごと引け。

と云ふ工合に射撃せねばならぬ。かう云ふ沈着な射撃は必ず命中する。敵はバタ／＼倒れる、それで突貫する、凱歌を唱ふ、君ヶ代を吹奏して萬歳を喚呼すると、マアかうした鹽梅にゆく。

我が散兵線の志氣は益す振つた。戰場は愈よ活氣を帯びた。負傷兵は續々出来る、アツと云ひ様バタリと仆れたものは、最早何事も知らぬ。

敵は色めく

戦機は愈よ熟したり。敵は既に動搖の色を示して、片足は前に、片足は後に、遁げ／＼棒を使つてゐた。サア突貫！突貫！かうなるとモウ破鐘を叩くやうな聲で、ツ／＼と喊を作つて突き込むべき時だ。果して起る、豪雨の急射撃、續いて起る百雷の吶喊、山谷爲に動き、天地爲に震ふ。中隊長村上大尉（政太郎）は勗聲叱咤、長劍を揮つて率先猛進し

實に占領

た、各兵は叫喚舞躍、銃劍を衝いて敵陣に乗り込んだ。此時早く彼時遅く、敵は背蕩見、て潰走し、跡には銃器、彈藥、軍帽の類ばかり残されてゐた。逃げるにかけては、其早い事、巧みな事、流石は退却に妙を得た露兵なりけりだ。

垂頭山は確實に占領せられた。さして戦と云ふ程の難をしたでも無かつたが、是も門出の祝ひ酒、先づは目出度し目出度しと、萬歳の聲いと高らかに朝の風に轟き渡りし時ぞ、是れ正に六月二十六日午前八時！

第十二 劍山の占領

歪頭山は容易く我手に落ちたので、勇みに勇める数千の精騎銃卒は、更に敵の退却を追尾して、陵水河子より標高三百六十八米突の高地、即ち劍山に通ずる長隘路を前進することとなつた。これは取りも直さず、同處に據れる敵兵を攻撃せんが爲なので、唯さへ昂れる我軍の志氣は愈々張り裂けむばかりになつて、一舉直ちに劍山の壘を陥ることを得べしと確信してゐた。

劍山の險

劍山は岩石嵯峨たる奇峯で、我が正面の傾斜は極めて急峻、到る處斷崖絶壁ならざるは無く、屹として天空に聳え、攀登降下共に困難で、所謂一夫險に據れば万卒を防ぐに足るべき、此の附近稀に見るの大難關である。元は無名の山で、但し露人は之を『クイン山』と稱してゐたさうであるが、劍山とは、占領後に乃木大將が、聯隊所在地の有名な險山、劍ヶ峯に因み、其聯隊の名譽を永遠に傳へんが爲に命名せられたのである。當時此險を守れる敵の兵力はまだ充分には知れ無かつたが、歩兵の居た事と、砲十數門の配備せられて

あつた事とは探知してゐた。

炎熱燄くが如し

我聯隊は此時歪頭山を廻り、海岸に近き畑の中に開進して、總隊備隊となつてゐた。丁度此頃の遠東の地は燄くが如き炎熱で、それに口を潤さんにも流るゝ小川の水さへあるて無く、命と頼まん樹蔭さへ部落の外には絶えて、一本の灌木があるても無い。殊にこの豫備隊の位置は、青草さへ見えぬ島の中であつたから、焼火箸のやうな太陽の光線は、帽子を突透して、頭を溶かしてしまふのでは無いかと思はるゝ位であつた。ても此處に居るのも少時の間であらう、今に前進すれば、此苦しい火攻を避れて、愉快な職園が出来たらうと辛抱したゐたが、トゥ〜其日の午前九時頃から午後の三時頃まで、日中の最も旺盛な光線に射られづめてあつた。遙か左方に當つては、水波激濤たる東海岸が見えたので、水に渴した予等は、ア、一寸でも水浴がしたい、さらばモウ残りは無いにとまで思つた。遠方から、礮に出もせぬ涎を垂らして水を眺めてゐるくらゐ、つらいものは無さ。

敵の砲艦現はる

斯する内に、左方、小平島附近に敵の砲艦が現はれ來りて、我隊備隊を目がけてドンドン撃ち出した。高く煙の輪を幾つも散らしつゝ、空気を渦巻いて飛び來る砲弾は、予等の前進地にグワツタン…と凄しい響を發して落ちる。一發又一發、續いて五六發、岩角な

どへ突き中つたものは、ピカリと火花を散らして硝煙漠々、岩は紛碎せられて四方に飛ぶ。遠く見てゐるなれば真に壯快、だが隊伍の中つてはたまらぬ。盛んに躍込んで来る砲弾は、殆ど過たず、我隊の前進地の近くまで達したが、幸に一人をも傷けなかつた。其中、劍山の方向に當つて、銃砲聲股々として起る、愈よ攻撃は開始せられたのだ。我等が渾身の血は湧いて、前進の命令を今や遅しと待つてゐた。すると、

前進！

『前進！』

殊更壯快に聞えた。此命令の下に乍ら立ち上つた兵士は、皆一齊に聯隊長の顔を仰いだ。凡そ聯隊長の勇武なる動作は部下の模範として尊敬せらるゝので、殊に劍電彈雷、危急切迫、勝敗の數の將に岐れんとする瞬間の如きは、即ち隊長の儼然たる態度と、不動の視線とに依つて、勝を制することが出来るほどである。

身軽な仕度

いよ／＼前進となつた。重い背囊などは可成持たぬ方が運動に便利であるので、兵士は大急ぎに一日分位の食糧を背負袋に詰込んで、外套を肩へ斜に懸けた。予は一袋の煙草の中から二三本を引抜いて前進した。誰れが命ずるとも無しに、一步二歩、漸々急速の歩調となり、唯だ銃砲聲の起る處を差して、一條の道路を何處までもと前進した。戦線の喧

擾は、次第に近くなり、いよ／＼此處戰場へと達すると、心は益々跳つた。

峻嶮無比なる要害は壘として眼前に立塞がつた。我が第一線は既に盛んなる銃砲火を交換しつゝあつた。戦が劇しくなればなるほどに、負傷者は更に多く、ズン／＼後方へ運搬された。擔架の上に血に染む士卒、銃を杖つき傷に惱みつゝ、辛うじて過ぎ行く兵士、此等を見る度に、新手の予等が憤激の念はいよ／＼高まつた。

地雷大爆發

戦闘は刻々に劇烈の度を増した。我砲兵は敵砲を沈黙せしめんと、切りに砲火を放つ。歩兵は一進一止、逐次峻坂を攀ち登りつゝ、絶えず猛烈なる彈丸を放つた。空は一面に灰色の雲に包まれ、白き黒き砲煙は猿り揚り、榴彈は霞の如く霧の如くに地に降り注いだ。暫くして優勢なる我砲兵は、確實に敵砲の三四門を沈黙せしめた。歩兵は既に敵に肉薄したが、俄然二個の地雷火が、黒煙を噴いて爆發した。漠々たる土砂の煙に巻き込まれた我進撃兵は、必ずや少からぬ損害を受けたに相違無いと思つたところ、意外！硝煙の晴れ散つた跡には、我兵は一名だに斃れてゐなかつた。敵は徒に多量の火薬を用ゐて、土砂を躍らせたに過ぎ無かつた。

斯く敵は地雷を爆發して、我が前進を阻止せしのみならず、又た山頂よりは、盛んに得

頑強なる抵抗

九十二
意の一齊射撃をなす。それが一分一刻も絶間なしてあつたから、我等は中々以て真向さに顔を擧げてゐる事は出来ぬ程であつた。されど我軍は怖めず應ぜず、唯だ「前へ前へ」と一途に進み、先頭に前進した小隊は塵殺にならうと恐れずに断崖を攀づる、其の勢についで後から一擧に突き込むと云ふ工合、地雷火坑を踏み、小銃、大砲の縦射側射を冒して攻め登る爲體、其危険、其困難、實に名状すべからざることであつた。敵は死力を盡くして、此の劍山の天險ばかりは、我に渡してならうかと、頗る頑強に抵抗した。

敵壘に突入

関の聲は我が全線に起つた。將校は軍刀を鑿し血眼になり、奮勵叱咤、部下を提げて敵壘に突入した。茲に於いて劍尖相打ち、彈丸猛射し、喚き叫んで攻め戦へば、戦友右に斃れ、部下左に墮して、敵屍を枕とする。されど大勢は既に定まつた。敵は斯く最後まで頑強なる抵抗を敢てしたにも拘らず、遂に幾多の耻辱を残して退却するに至つた。再び三たび起る萬歳の聲、歡呼の響、劍山の險は正に確實に占領したり。日章旗は山嶺高く風に翻へつた。我れ一度之を收めたる上は、なとて再び敵手に委すべからず。

第十三 敵兵逆襲

雙頂山亦た陥る

劍山の既に我有に歸するや、續いて雙頂山方面また陥り、漲り渡る硝煙の間に、我が戦旗は揺々として占領部隊の上に翻へり、凱歌の雷聲は風を壓して轟いてゐた。蓋し此の雙頂山たるや、劍山と共に是非とも陥れておか無ければならぬ地點であつたが、元々堅固なる防禦陣地と云ふても無いから、敵も烈しき抵抗を試むる力が無くて、我は直ちに之を占領する事が出来たのである。實に一雁驚いて全雁亂れ、一陣動いて全軍皆潰ゆとかや、敵の此處大事と頼んだ劍山が突破られてから、響の聲に應ずるが如くに、雙頂山も難無く破れ、小平島も亦た我軍の手に落ちるに至つた。此小平島は、雙頂山の南麓に當る處で、前にも述べた如くに、敵艦は屢ば此邊に出沒して、側面から我軍を悩まし、それが横腹から鎗を入れる工合だから中々に効力があつた。會々我外洋艦隊の驅逐する所となつて、一先は手を引いて旅順港へ遁げ込んだこともあるが、又た復た機會を見ては砲撃を試むる有様。二十六日の戦闘にも、現に敵の砲艦三四隻が此附近に徘徊して、劍山並に雙頂山の我

小平島占領

九十四
攻撃に一通ならぬ妨碍を興へたのである。されば我軍は早く此小平島を占領區域内に收めなければならなかつたので、即ち左縦隊の左翼隊は、之に向つて難無く占領を遂げた。これにて旅順に於ける敵の第一防禦線は、今や全線我有ならざるは無く、日章旗は到る處に翻へることゝなつた。

二十六日に於ける我軍各部隊の攻撃は、悉く其目的を達したので、今後の作戦上、運動の發展に殆ど測り知るべからざる程に宏大なる利益を占むるに至つた。嘗ては我陣地内部の諸動作を敵から瞰望せられてゐた不利益は、今や忽ち顛倒して、我は反つて敵の行動を窺知するに頗る便利な位置に立つことゝなつた。それで敵軍の方で、如何にもして、此の地點を恢復せんものと企てたのは當然の策なので、さればステッセル將軍は、普く全軍に令して、劍山は旅順の防禦上缺くべからざる要地なり、幾許大の犠牲を供すとも、必ず之を恢復するに努めよと命じたさうであつた。さもあらん、左り乍ら一度我有とした上からは、如何なる反撃に遭はんとも、如何なる詭計を加へられんとも、やはか再び敵に委してなるべきか。彼れが多大の犠牲を省みざらんか、我にも亦た其覺悟はある。勇あらば來れ、來つて覆轍の悔を増せよ。彼等が前門に虎を防いで、後門に狼の迫るを知らず、

地利顛倒す

二回又た三回逆襲に轉ぜしことの笑止さよ。

永き夏の日も西に傾いて、薄墨色の天地は、戦後の槍々たる氣を孕み、生暖かき風は血に染める草葉を拂ひ、先の喧囂はハタと静まつて、一しほ物寂しく感ぜられた時、折々思ひ出したやうに起る一發二發の銃聲が、鈍き音して空を切る。これを敵が未練の盲撃、これも却つて戦後の一興であつたが、時しもあれ、雲油然として岫を出て、見る／＼一天搖さ曇り、電光閃々、雷霆殷々、鐵砲玉のやうな雨がバタ／＼と降つて來て、天は再び奮撃殺倒の景を繰返すものゝ如くであつた。それが我々兵士に取つては頗る迷惑、一樹の蔭のあるても無ければ、全身は濡鼠となり、遙か麓で嘶く馬の聲の殊更淋しう聞ゆる中に、予等は今宵此處に戦後一夜の假の宿を求めたのである。

凡そ劇戦の後では必ず疾雷急雨が來るのである。戦鬪酣なる時、砲煙高く渦ま揚つて天地は晦暝の凄じき色を呈す、忽ちにして盆を覆へすが如くに大粒の雨が、雷鳴轟てザアザアと降つて、戦場の血を洗ひ去る。これが所謂勝つた者の嬉し涙、負けた者の悔し涙、そして又た幾多戦死者の弔ひ涙なのである。かゝる大雷雨の夜こそ、好機逸すべからず、桶狭間の二の舞を喰はしてくれんずとて、敵の逆襲のあるが殆ど常例であつた。さり乍ら

霖雨中の假

勝つて兜の

此方からは、何も御苦勞様だがと門前拂にするので、戦に勝つたからとて、決して氣を弛めることは無い、雷が鳴らうが、雨が落ちやうが、心に油断はせぬ。一度占領したからには、之に頗る嚴重な警戒線を張つて、敵の逆襲に備へる。勝つて兜の緒を締めるとは即ちこゝである。

敵は逆襲に

我軍が剣山より雙頂山に亘る一帯の要地を占領してから、既に一週日を過ぎたる後、乃ち七月三日の日に以て、敵は逆襲の態度を執り、此度こそはと多勢の兵を驅つて、我が剣山に向ひ來つた。敵の歩兵約八九百は、王家店から一直線に猛進し、其の砲兵は大石洞附近に放列を布いて、一時にドット撃ち出した。兼てかくあるべしと待ち構へたる事なれば、何條驚くべき、我は盛に銃砲火の火蓋を切り、前進した歩兵を目掛けて、集束砲の大時雨を浴せかけた。それにも屈せず前進した敵の歩兵は、中々の剛の者、さりながら、優勢なる我射撃には敵し難く、九て將基倒の如くに打ち殞れた。先頭を進んで來た敵の將校は、長劍を揮ひ跳るが如くに奮進したが、乍ちバツリと斃れた。撃たれては僅れ、撃たれては僅ること秋の木の葉の風に散る如く、殘兵は勢力遂に敵し難しと見て、四方の谷へ潰亂し、オメ〜と退却してしまつた。かく歩兵は既に退却したが、砲兵は中々

二度目の襲

沈黙せず、暫くは猶ほ踏み止まつて、烈しく我攻撃點を砲撃してゐたが、これとても後には、遁げて歸る歩兵を見ては、遂に力が抜けたか、二發は一發と減じ、最後の一發は不發彈。戦線は今更夢の如く、其の愉快！其の愉快！我等は覺えず萬歳！敵は剣山を奪はれた無念さに、どうにかして取返さんものと、氣ばかり焦つたけれど、一向に効能が無い。

龍虎相搏つが如し

露軍の頑強なる、此の大打撃を受けてから間も無く、又た約十年前と同数の歩兵が、太白山方面に現はれ、盛んに軍樂を奏しつゝ、堂々我第一線に進撃し來つた。彼我の距離僅かに七八百米突に迫ると、彼は全線を廣く展開し、ウラーア！の聲喧嘩しく、鼓の音、笛の音に鼓舞せられつゝ突撃したが、我は猛烈なる急射撃を以て之を迎へて、進む者を斃し退く者を撃ち、且つ一部隊を動かして攻撃に轉じたので、敵は之に辟易し、又もや背後を見せ、元の太白山方面へ退却した。かく到底我に敵はぬことは知れ切つてゐたに、一敗屈せず、二敗なほ撓まず、逐次生兵を驅つて、飽迄も剣山要害の恢復を圖つた其精神は、流石に強大國の軍隊だけあると感嘆せざるを得無かつた。我れに大和男兒の忠勇あれば、彼にもスラウ民族の剛勇あり、されば虎龍の雲を呼び風を起して鬨ぎ戦ふが如く、彼我實に修羅場裡の好敵手であつた。

巧智なる夜襲

翌四日の午前一時と云ふに敵は真夜中の霧を破り、決死隊を驅つて、我を劍山に襲撃した。其の運動の敏捷にして巧妙なる、彼等は草の根、岩の角にも心しつゝ、巧みに此峻嶒を攀ち登りて突然我哨兵を殲し、劍を振り、銃を擧げて、ドツト吶喊肉薄し來つた。茲に於て乎、混戦亂搏の活劇は開かれ、暗夜の格闘に彼我の區別も分り兼ね、唯だ斬つては薙ぎ、突いては倒し、向ふ見ずの亂れ撃、劍電閃く處ドツトと手に應へて、確かに殲したぞと知る位であつた。我が防禦の手痛さに、流石決死の露兵も遂には失望し、悠然と山を下つて退却した。其の剛膽、其の不屈、如何に我軍の勇敢なるを以てしても、此敵には又た一驚を喫せざるを得無かつた。彼が後に遺棄した負傷者さへ、猶ほ銃劍を揮つて抵抗を試みるのであつたし、又た一人の重傷兵の如きは、氣息奄々として、其顔を上げた時にも、決心の眼は血走つて、淋しげな笑をさへ洩してゐた。

敵兵の剛膽

敵は此の巧妙奇智なる襲撃を試みても成功し無かつたので、最早絶望したらうと思ひの外、彼は中々以て劍山恢復の初一念を斷たず、如何にもして奪取せんものとして、此日の拂曉、更に大兵を擧げて進襲に轉じ來つた。此時の逆襲は就中猛烈であつた。チヨイ／＼と續けた此迄の戦闘の作法とは異つて、敵も今度は能く／＼の大決心を起したと見え、全然

大兵の襲來

具體的に、堂々と砲兵を以て連續絶ゆる事無く我陣地を砲撃しつゝ、歩兵を前進せしめ、逐次其第一線を増兵し、此處を分目の戰と奮獅の勇を鼓し、劇烈なる射撃を我に送つた。如何に地の利に據つて、屢は逆襲隊を潰走せしめた我軍なりとて、此大兵の襲來に對しては、此迄のやうに造作も無く叩き潰す譯にはいかなない。だが我軍でも已に兵力を増加し、出來る限りの工事さへ施して、今日の大逆襲あることを期待してゐたのだから、イザ來れ、目に物見せてくれんと、爰に劍山攻撃以來の激戦を演じ出した。

彼我の火力

敵の優勢なる砲兵は、愈よ其砲数を増加して、王家屯、毛道溝、安子嶺等一帶の高地を占領して、主力は我が劍山を砲撃し、併せて一帶の我が歩兵陣地に向つて、榴霰彈の火の雨を降らし、其勢や、昨日とは打つて變つて頗る猛烈、此處を先途と戦ふものゝ如く、其の命中効力の如きも至つて確實で、彈子は驟雨の如く一寸一秒の間隙も無かつた。我が砲兵も歩兵も、有らぬ限の力を揮つて、朝來絶えず、急速なる射撃を以て、敵の前進を阻碍し、一度我有に歸したる此陣地に、一步たりとも敵の足を入れさせてなるべきかと奮闘し、殊に劍山守備の部隊は、敵の猛火の中に立ち、嚴然たる態度、正確なる照準を以つて、漸く彼の突入を防ぐの有様で、時としては危険に陥らんとしても、屈せず持ちます、將校は

撃て！撃て！

陣頭に立つて部下を激勵する、怒眼キント敵を睨んで『撃て！撃て！』と口角泡を飛ばして、切りに怒鳴る。部下は瞬きもせず敵を視つめて、手は遊底と引金とに少しの休みも與へず、根限り力限り、こんな時には平素儉約した弾薬も、容赦無しにドシ／＼と撃ち放すのであつた。

砲兵の苦戦

今は彼我の射撃益々急劇となつて、空飛ぶ鷲も翔ることを得ず、地を走る猛獸も匿るゝに處無きの狀、幾千萬の彈丸は、彼方より此方より互に入り混り、濁れる空気を切つてズル／＼と云ふ音、喧しく、天地は宛然阿修羅の狂ひ猛るが如く、戦いつ果つべしとも見え無かつた。敵砲の威力は非常大で、曳火彈は束になつて飛び來り、正しく我等の頭上に開きて、殺傷を逞しうする、榴彈の爆發は散兵線の前後に土砂を捲き上げて、濃煙白く黒く渦を漲つた。之に對する我が砲兵の苦戦も一通や二通で無かりし爲、或る場合の如きは、遂に一時其陣地の變換を行ふの止むを得ざるに至つた。斯して勝敗の數は未だ決せず、敵は益々優勢なる生兵を送つて、續々／＼攻撃に轉ずる。それで我軍よりも總豫備隊の一部を戦線に増加し、猶又た重砲數個中隊を、盤道より黄泥川、大上屯附近に進進せしめ、且つ海軍の陸戰重砲隊をして、南、沙河河口附近に陣地を占めさせて、茲に堂々たる

日は暮れた

戦勢を張つた。されど戦闘は益々劇烈となるばかりで、拂曉よりの銃砲聲は、黄昏に至つて少しも衰へず、而も敵は機を見ては奇襲に轉じ、砲の効果あるを見ては襲撃に移らんとする有様であつた。敵が斯く猛烈であればある程、我も十分の警戒をなし、十二分の打撃を與へた。

深夜の逆襲

慘憺なる戦場は、ドンヨリとした夕日の影に淡く照らされ、暗灰色の背景を負うて、少しほ増し加はりし物凄さは、爲めに戦闘の成行を疑はしめんばかりであつた。ア、此日の戦闘は遂に其局を結ばざるまゝに休止せんとしたか。否なく、日既に暮れたりとして、敵は何條其計畫を放棄すべきや。彼は今夜を期して大襲撃をなさんと思ひたればこそ、天明より日没に至るまで砲撃の絶間無く、先づ以て我軍に大打撃を加へておかつたのである。されば兼てかくと覺つた我軍、夜に入つては益々守備警戒を嚴密にし、手に唾し腕に槍をかけて、來らば來よと待ち構へてゐた。すると果然深更に及び敵は全線を擧つて大逆襲に轉じ、一聲直ちに劍山を抜いて之を奪ひ返さんとした。其勢や實に侮るべからず、闇夜に閃く劍尖の光は、陸離として氷霜の白日に映ずるが如く、ウラア／＼の喊聲は百獸の哮ゆるが如し。スワこそ御參なれ、日本男兒の腕前、これを見よと言はんばかりに、一

戰場遂に閑
たり

時にドツと撃ち出したる手練の彈丸、殆ど一發の空打だに無く、流石の敵もこれには色を失うであらうと思ふと、果してウラア／＼の聲も次第に細り、劍華また間に消えゆきて、遂には戰場閑として、夏草にすだく哀れな虫の音と、敵の負傷者の呻き苦しむ聲とが、手に取るやうに聞ゆるに至つた。空を仰げば密雲重く低く垂れて、今にも降り出しさうな模様なり、我等が何とは無しに思はず落す一雫、嗚呼此涙こそ實に名譽の戦死者を憶ふ一片の手向であつた。

戦後に諸情報と總合して見ると、天明の頃我に向つた敵は約千餘人と註せられたが、漸次に其兵數は増加して約五千人となり、遂には一万以上に及ぶの大兵となつたのである。加ふるに敵の砲艦若干隻は、龍王塘附近の海岸に顯はれて、我軍の中央隊及び左翼隊に向ひて盛に砲撃を加へ、海陸並び合して、其威力を發揮したのであつた。されど再三再四の逆襲も其効を奏せず、あらゆる奇策を廻らし、あらゆる詭計を用ひて襲撃を試み、前日の怨を返さんとしたけれども、遂に一回として其目的の一部をも達成することを得無かつたのは實に笑止の沙汰である。これが敵もトウ／＼根負けしたと見えて、此後は大逆襲を試むることも無く、劍山恢復の初念も弛みて、只だ專一に我陣地の偵察に勉め、毎日毎夜

敵の大失望

緩徐なる砲撃を我に與へ、時々的小夜襲を試みつゝ、其間に太白山一帯の高地に防備工事を急いでゐるものゝ如くに見えた。

第十四 防禦工事

骨肉の嘆

實に骨肉の嘆である！守備ほど厭なものはない。氣既に滿ち、力既に足ると雖も、進軍の機に遭遇し無れば是非が無い。腰間の軍刀は無聊を啣ち、双腕の筋骨は無事を嘆ずるかなれど如何せんや。されど守備は乃ち進軍發展の糸口で、嚴密なる守備線に於て、有らゆる手段を講じて、精細確實に敵情を偵察し、彼れの配備の如何を知るに依つて、私の作戰計畫が一定定まり、それ愈よ前進攻撃となるのである。されば則ち守備は蛟龍の池中に潜む時で、前進は雲霧を呼び起して、天空に躍るの時である。イザ予は是より少しく、劍山攻撃後に於ける、我守備線の状態を紹介して、其の辛酸の幾分を語り、而して機熟するを俟つて、太白山の攻撃に移らん。

彼我の守備線

十四個大隊の精銳を擧げ、二十四門の火炮を提げて、激戰奮闘我に抗した頑強なる敵兵も、遂に劍山に宿怨を晴らすこと能はず、ステッセル將軍が所謂「如何なる犠牲」を拂うても、其目的を遂行するを得無かつたので、彼は遠く軍を收めて、更に北、雙臺溝、安

安息を思はず

子嶺より南の方、太白山、老坐山に亘る一帯の高地に堅固なる防禦工事を施し、劍山の失敗を恢復せんことを企てゝゐた。而して我軍は依然守備地を變ずること無く、敵に寸尺の地をも譲らずして、北、安子嶺より亂泥橋、劍山、黄泥川、大上屯を経て、南、雙頂山に達する一帯の線上に在つた。予等の聯隊は乃ち此の黄泥川、大上屯の東北に亘れる高地を警戒する事になつて、當日から直ぐに例の十字鍬や圓匙で、カッチン／＼と土方をやる事になつた。先の張家屯附近とは違つて、敵と随分接近もしてゐるし、且は劍山占領後、敵はよし數度の逆襲に失敗したりとて、なほ機を見て襲撃を試みんとするは知れ切つた話であるから、これに備ふるには出來得るだけ堅固な陣地を構成し無ければならぬ。それで兵士が戰鬪の勞苦を痛ふ暇だに無く、彼等が可愛からとて、門を開け放して盜賊の侵すに任せては置けぬ。戰局發展の今は部下の勞苦を顧慮してはゐられぬ。勇氣の兵卒等も亦た毫も安息を思は無いで、晝でも夜でも、岩の細道、それをさへいつしか絶えて、草の根、岩の角を這ひ傳ひつゝ、先の張家屯に残した土囊や、鉄條網の材料を運搬して、少しでも堅固にと、工事に寸暇も無く働いた。

陣地は峻嶮崎嶇として、骨のやうな岩石で固めた山と、斷ち切つたやうな谷とに據り、

一樹の蔭も無く、一掬の水さへ容易くは得られ無い處であつた。唯だ遙かに霞む老鉄山の砲臺や。近き嶺々山々の堡壘を眺めては、日ならず黒幕が切り落されて、又たく大活劇を演ずるのだ。どのやうにか壯快であらう、肉一片も残さぬやうな、花々しい討死がして見たやなど、色々な想像を浮べつゝ、昨日も暮れ、今日も亦た暮れて、半宵月無く、闇の帷の四圍を包む時、一隊の黒影が山を登つて行く。之は何ぞ？乃ち晝間の工事に疲れた兵卒と交代して、夜間作業をなすべき一隊であつた。かく夜間までも働か無ければならぬのか？然り此守備地では夜間の作業が主であつたので、晝間には敵の砲兵が捜り撃ちに撃つたため、何分工事が果取ら無かつたから、兵卒は可哀さうだが、止むを得ず、夜業をさせたのである。敵の露營の篝の煙を眺めつゝ、圓匙の音、十字鉞の響が丁々憂々、石を積み、砂を運ぶ、土嚢を詰める、鐵條網の杭を打ち込む、それも可成く音の立たないやうに、敵に聞え無いやうに、無論煙草一服喫ふことは出来ぬ、其火光を見付けられるなら、乍らズドンと一發面喰はされるのであつた。兎角する中に、夜は益々闇に、二時となり三時となる。篠突く雨が降らうが、岩をも飛ばす風が吹くが、兵士は絶えず丁々憂々、ア、かゝる哀れな暮しの中にも、それを幸いとも思はず、苦しいとも云はず、専念國の爲、

夜間の作業

煙草一服喫ふことならぬ

君の御爲と骨肉を惜まず働いた兵卒こそ、實に感謝の辭を捧ぐべき者では無いか？

夜はいたくも更けた。工事の一隊も雲時手を休めた。されど此時もなほ想像の如くに直立し、銃を腕にし、眼を瞑つて敵方を睨む、彼の歩哨の身や如何に！半島の夜の嵐に吹さられつゝ、

夜半の歩哨

『オ、今宵はメツキリ涼し。どの。いつものやうに、夜襲でもして来るかナア……』と片頬に微笑を洩した彼は、三更寂寥の此時、嗚ぞや望郷の念の起ることもあつたらう。ア、それも無理は無。い。

巨弾飛び来る

何處に居たのか、定かに分らぬ敵の砲兵は、時々予等が幕營してゐた谷地に向つて、捜り撃ちに撃ちかけた。七月の十五日頃であつたと覚えてゐる。或時、巨大なる砲弾が飛んで来て、凄じき音して爆發し、岩を砕く、石を飛ばす、黄黒い煙がムツと舞ひ上がり、大地は震動した。予等はこれまで野砲弾ばかりに馴れてゐて、こんな巨弾を喰つたは、これが初めてであつたので、ギョツとせざるを得無かつた。是は多分敵が海軍砲を龍王塘に引揚げて、我陣地を攻撃したのものであつた。敵はなほ劍山に未練が残つてゐたと見え、絶えず遠彈を射かけたので、我各大隊では毎日時間を定めて、何時より何時までの間に、孰

れの方面には何發來たと云ふことを報告するやうにしてゐた位であつた。敵が用でも無きに、劍山の岩角を砲撃して、我を威嚇せんと試む、離れた處から榴霰弾が破裂するのを見ると、恰も煙花のやうだ。かやうに砲火を浴びせかけられて、其下にあるのは存外氣持の良いものでは無かつた。而して又た茲に、予等の毎も怪訝に堪へない一事があつた。それは毎日殆ど時間が定つて、敵は盛に砲撃をなし、都合能く我幕營地を犯して、時には思ひ掛無き死傷者を出すことであつた。これには何か秘密があるに相違無いとは思つたが、扱て容易に知れぬ。色々と研究の末に、漸く次のやうな驚くべく又た憎むべき事實を發見したのである。

牛羊を牽いて敵に信號す

それは支那土民が牛羊を牽いて我警戒線の後方の山に登つて、遙かに敵に信號する事であつた。例へば黒牛を牽いて登つたら、どの方向を撃てとか、羊群を追うて上つたら、此村を撃てとか、ちやんと敵と暗號を定めて、我の不利を圖つたのである。金銀の爲には生命でも獻上する支那人の事だから、素より彼等に油斷のならぬことは、張家屯の守備に於て已に實驗したのであるが、さり迎我が第一線を出入するでも無く、平氣の平左で、牛羊を追うて悠長に山道を行くのが、敵との通信暗號であらうとは夢にも知ら無かつたの

である。彼等は亡國の愚民で、貪婪飽くこと無く、唯だ金銀の爲を知つて、大なる利害得失を思はず、日露戦を交へて彼等の田園を荒すは何の爲なるか、そんな事は無論考へて見る事も無い。それで屢ば累を我に及ぼし、見付かると嚴刑に處せられたとは笑止千萬、否、愍然至極である。(人間も斯く迄に利慾の奴隷と墮落しては濟度が出来ぬ。)

此月の二十日頃であつた。我が將校斥候が深く敵が前哨線を潜つて、其下士哨を驚かしたことがあつた。首尾能く其任務を達成して歸る途中に、敵の歩兵斥候三四名に確と邂逅した。ソレ捕獲せよと追ひ回したが、彼はドン／＼と二三發死物狂に射撃して、遂に其姿を匿したが、中の一名はトゥ／＼遁路を失つてマゴ／＼してゐたのを難無く押へ、將校斥候は凱歌を唱へて歸つて來た。例によつて訊問となつたが、彼は歩兵の伍長であつて、何事でも自狀いたしますから、命ばかりは御助けをと、ベコ／＼頭を下げてゐた。情無い奴か女！義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕じとする日本男兒の膽を爪の垢ほどでも煎じて飲ましてやりたい。嘗て聞く、旅順にて不幸敵手に落ちた我一兵卒は、守將の面前に引き出された時、滿面朱を漲ぎ怫然として彼を罵つたと云ふが、之に反して彼の露兵の、敵に捕はれて命の欲しさに、漏すべからざる秘密も漏らした其根性は、實に見下け果てた

捕虜露軍の秘密を語る

ものては無いか？彼は我が警戒線上に導き出され、敵の配備を指示せよと命ぜられて、何の狐疑するところも無く、右は狙撃歩兵第二十六聯隊、中央は同第二十八聯隊、又左方は何聯隊と、頗る明確にスラ／＼と答辯した。これまでの偵察の結果によりて知れてゐた敵の配備表と照合するに、彼の言に些かの誤謬も無かつた。我軍の此の露兵によつて益したことは少く無いが、彼は丈夫の共に齒することを耻づべき鼠輩である。

序に劍山攻撃の一夜、岩陰に隠れてゐた一人の露兵を捕へて、之を訊問した話をしやう。其間答はかういふ風であつた。

露兵と問答

「汝等は昨今の日本軍からの攻撃を如何に思つてゐたか？」
「今にも日本軍が大攻撃をして来るだらうと心配してゐた。」

「上官は汝等を愛してくれるか？」

「旅順へ来た當座は、色々と勞つてくれたが、近頃は給料もこの三ヶ月ばかりは、三分の一しか渡さ無いし、麵包も半減して、残は皆、將校が懐中にしてしまふ。」

「南山で敗れた者等は旅順へ歸つたか？」

「南山の敗兵は、要塞内へ入れ無い。食糧も渡すのが無いから、自活して第一級で働け

給料を奪ふ

と命令せられてゐる。」

「汝の同胞が多費、日本へ送られてゐることを承知してゐるか？」

「知つてゐる。先達は自分の戦友も捕虜になつて、日本へ往つた。」

上官たるものが部下を愛恤し無いのに、何とて部下が上官を畏敬して、心からの服従をなすべきぞ。將校は兵卒を吾子の如くに慈しみ、兵卒は將校を親の如くに慕は無ければ、他の事はいさ知らず、戦場生死の間に如何にして、互の自分を全うするかが出来やうか？ 剩さへ將校が兵卒の給料を奪ひ、食糧を私して、彼等を飢餓に導くやうな所業をしては、などと生死を共にすることが出来やうか？ 一飯の食も共に分ちて食ふくらゐの情合で無ければ、劍戟の巻に相擁して屍を曝すことは出来ぬ。而して又た露兵が到る處に土民の財を掠め、食を奪ひ、婦女子を辱しめたといふは、彼の捕虜の洩した消息によりて、其所以を推察せらるゝては無きか？

我警戒線の工事は、日を追ふて着々堅固に構成せられた。此間敵は相變らず五月蟬の程に小夜襲を試みては其度ごと追拂はれた。砲弾も亦た絶えずヒュー／＼と空を掠めて、そして氣の毒な程効力が無く、無益な事をして弾薬は竭きはせぬかと心配して遣つた。され

流彈の死傷者

ど何處とも無く飛び来る小銃彈の爲めに、折々意外の死傷者を生ずる事もあつた。晴れの戦の舞臺でなら遺憾は無いが、守備の間に流彈の傷を負ひ命を殞し、近き日の大快戦に参加するの光榮を棄て、後方へ轉送せられるのは、何程残念だか！『私はドウしても歸りませぬ』とか、『彌帶所へは往きませぬ』とかと、負傷者が無念の言葉は、實に道理至極で、其の心底の苦痛は同情に堪へぬのであつた。

第十五 幕營生活

天幕破れた

せめて雨露だけは凌ぎ得らるゝと頼んでゐた天幕も、情なや、今は風に破られ、雨に朽ちて衰れな姿となり果てた。上陸以來殆ど六十日になる今日までは、幕營を以て唯一の宿營法としてゐたのである。凡ての情況が舍營を許さぬ。それに支那の村落では、多數の家が一團となつてゐることが甚だ稀で、此處に二三軒彼處に四五軒と散在してゐるのだから、大軍勢の舍營などは思ひも寄らぬのであつた。會ま運好く豚臭い大蒜臭い檐下にて、

も、一夜の露を凌ぐことが出来ると、立派な御座敷に絹布圍て寐るよりも一層難有いくらゐてあつた。幕營は殆ど常住の宿、天幕一枚が、我等の爲に晨の風を防ぎ、夕べの雨を凌いで、露繁き野原に土砂を塵とするの苦難より免れしめてゐたが、今はこれさへ僅かに日の光を蔽ふに足るのみとなつた。つれ無き雨は、何の咎あれば我等を惱すぞ、怒れる風は、何を恨みて我等を苦しむぞ。蔭と頼める天幕は、容赦も無く雨を洩らす、さては風に吹き捲られる。我等の軀はどうでも良いが、大事の／＼の携帶口糧が濡れる、武器の薬

雨洩り風荒

顔は垢黒し

室に水が溜る、實に泣くに泣かれぬ始末となつても、さりとて他に宿らん家は無く、頼ま
ん蔭も無きに、何を啣てばとて仕方が無い。雨に打たれ乍らも、晝の疲はたわい無くスヤ
スヤ寝て愈さん、心地よき夢でも見やう、今夜はドンナ夢を見るかなぐらゐを樂しみの關
の山にしてゐた。人あつて試みに眠りに耽ける我等の顔を覗つたならドツてあつたらう。
これが曾ては慈愛なる母に添寝して、隙間洩る風にも心せられし、昔の坊ちゃんとは受取
れ無いだつたらう。軀は着のみ着の儘、頭髮は伸びる、髪はムシヤ／＼、顔の色は垢黒く
なつて、丸て山賊か乞食のやう。誰も彼も可笑しい程に寝れて、樂しみは食ふに在り、暇
さへあれば、何か食ふものゝ工面は付かぬだらうかなど、考へる、互に話し合ふ、

何か甘いもの

『何か甘い物は無いか?』
『貴様の所に、甘い物があるだらう? 少しよこせ。』
など、は、いつも我等が出合頭の挨拶振であつた。口が淋しくてたまらぬと、果ては大豆
や玉蜀黍を炒つて、コッリ／＼と頬張ることもあつて、家にゐた時は何故食物の贅澤を云
つたのかと、今更過ぎし我儘を覺つたのである。
我軍は青泥塗を收めて以來、一般の給養上至極便利を得たのであつて、戦闘間の外は、

飯盒で自炊

先づ不自由を感じ無いで日を送ることが出来た。そして兵士は原料の分配を受けて、各自
携帶飯盒で炊くのであつた。岩の蔭や、石垣の隅で、高粱穀を焚いて、くすぶる煙の中で
飯はまだかと待兼顔の其無邪氣さ。副食物の十なるものは、胡瓜、干大根、蕪、干薯、罐
詰等であつたが、これ等は度々、重燒麵包を唾へ運んだり、半煮飯に梅干て舌鼓打た
ねばならなかつた仕合の我等に取つては、辱無い程の御馳走なのであつた。

な忘れ草

此の守備地區は、張家屯に比べると、少しは青々とした草木も見え、時々は草間に愛ら
しき花も笑つてゐたので、珍しさま／＼に摘みて、敵の砲彈の殻に生けて慰んだり、胸に挿
して其香を喜ぶこともあつた。洋名でフォルゲット、ミー、ナット(な忘れ草)と覺えた
瑠璃草の小さく可愛らしい花が所々に咲きて、遠征の人をして憶を故山の雲に馳せしむる
の媒介となることもあつた。

風土てふ巨敵

予等出征軍人は、露軍の他に、更に一大敵を控えてゐたのである。即ち風土てふ強敵で
あつた。あたら勇士が病魔の襲ふところとなつて、恨を呑んで戦線を下るは、これぞ風土
又は食物てふ敵の爲に傷けられたのである。風に晒され、雨に濡らされる。するとこれよ
り悪疫が発生する。嬉しき日光の我等を乾かしてくれるまでの辛抱の困難なるよりも、其

間に病疫てふ強敵の襲撃するところとなりはせぬかと恐れる心地の悪さ。此附近の地區には樹木と稱すべき程のものは無かつたが、幸に草叢があつたので、いつも之を刈つて、天幕代りの急造敵舎を造つた。でもこれとて雨や風に對しては一向役に立たず、破れた天幕よりも一層烈しく侵入されるのであつて、予等は火力の敵に勝つを得ても、天力の敵は到底防ぐことが出来ず、兵士の全身は濕潤し、下腹は冷却し、加ふるに晝夜の勞働の激しかりしと、飲用水の最も不良なりしと、又た睡眠の不足せしとよりして、腸胃の傳染病が發生して、幕營生活に一大不幸を現出するに至つた。予も實に此の恐るべき傳染病に侵された一人であつた。日に數十回の下痢を催したので、肥え太りて岩盤なりし予も日々肉落ち力衰へ、遂に病魔の敵に負けて、千秋の怨を呑むのであるかと、悲痛頻りに胸を悩ました。病氣は素より苦しいものだが、手當の行届き兼ねぬ戦地で、病に侵されるほど情無いものは無い。殊に戰機日を追うて熟し、何時前進攻撃の命令に接するかも知れない場合に此病氣に罹り、若しイザとなつて、これが爲に戦列に加はることが出来ぬやうだつたら、何程無念かと、それで一層心を苦しめてゐた。ア、予は此事を記するに當つて、三個の恩人の名を忘れてはならぬ。即ち安井(雅一)、安藤(一)の兩軍醫と、當時予の從卒たりし高尾文吉とである。

兩軍醫は、予が斯くも思はしき傳染病に侵されてゐながら、之を意とすること無く、予の身邊に附添ひて、懇切に藥餌を與へ、心籠めたる看護を盡した。又た面白可笑しい色々の雑談をなして、予の病める心を慰藉し且つ勵ました。此懇切なる介抱に、予の病も幸に輕快し、晴れの攻撃にも悉無く参加して、我任務を全うするを得た。共に戰場に臨みては、皆互に親子兄弟の親しみをなしたのであるが、予は此事ありて以來、特に兩氏と親密を加へて、此の守備中はいつも同一の場處で、共に辛酸を嘗めるのを愉快としてゐた。離合集散は戰場の習、それに何日何時永久の別となるか知れず、増して激しき要塞戰の事として、前方に進む歩兵が斃れて、後方に在る衛生官が傷かぬとは限らぬ。而も軍醫は死傷者收容の爲に屢ば危険を冒して第一線に前進せねばならぬのであるから、互に今をも測られぬ命である。若しも君戰死して我全からんには、我は君の遺物を收めて永く戰場の契の片身とせん、我斃れて君安からんには、願くは血に染める我が衣の一片を收めて、未代に傳へよ、唐紅の血潮は、我大君に捧げし微忠のしるしぞ、又た君を思ふ赤き心の色なるごと、斯くも深く予等は相契つて莫逆の友となつた。されど紛糾亂麻の戰場なれば、友は何

處に斃れしか、屍を收めん在所に知らぬが大方の習なれば、万一の邂逅は不思議の奇縁で、素より之を豫期し難し。然るに第一回總攻撃の將に開始せられんとした時、予は今生の永別と覺悟して、兩軍醫と最後の握手をなしたる後、望臺の敵陣中にて四肢を碎かれしに、不思議にも一勇卒の救ふところとなつて虎口を免れたれど、出血の甚だしきが爲に、遂に人事不省に陥つたが、再び息を吹き返へした時に、予を收養して、予の碎けたる手に接吻して『君に感謝す』と云つた者こそ、實に安井、安藤の兩軍醫であつた。

從卒高尾文吉

從卒高尾文吉、彼は予の會て中隊に在つて教育した兵卒であつて、其忠實なる熱誠なるとに感心してゐたもので、予が聯隊本部に轉勤した時に、特に中隊長に願つて、從卒としてのわが者である。平時でも將校と其の從卒との間柄は格別の親しみのあるものだが、殊に戰場に出て生死の境に立つては、一層の情交が湧いて、既に主従では無くて、兄弟である。予は何かにつけて高尾を頼りにする、文吉も亦た予を慕ふ。飯も食はしてくれ、何處からか水甕を拾つて来て、遠くから水を汲んで湯に入れてくれた事もあつた。彼が會て予の家族に送つた書状の中には、次ぎのやうなことが書いてあつた。

誠實の情

候ふ間、御安神被下度候、戰の事に候へば、何時御別れ申すかは知れず候へ共、死して少尉殿を御守り申すべく、御恩は決して忘れ申さず候。いつ迄も御家の者と思召し被下度候。

とは誠實の情掬すべきでは無きか？予が病に罹つた時の如きは、彼は其身の疲れを厭はず、晝夜一睡もせず、予の胸を摩り足を撫て、食を求むれば、彼は叱りつけるやうに、我兒を賺すやうに、『今は何も食つてはいけません、良くなられたら、どのやうにでもして上げます』と云ひ、何から何まで細な注意で、手落ち無く看護してくれ、予は彼が熱愛の情を思ふて、感謝に堪へなかつた。後日予の負傷した時には、高尾は最早予の從卒では無かつたが、彼も傷を蒙つた爲後送された途中、予の負傷したとを聞いて、此處彼處の野戰病院に予を探がしたけれど、遂に廻り合はずして大いに悲しんだとの事であつた。

高尾文吉が心の誠は、神も守りたまひてや、彼は運強く、今や凱旋の名譽を荷つて歸つてくれた。されど彼は負傷したこと二回、出征せし事實に三回、彼れは忠實なる從卒にして、又た戰場の勇者であつた。夙は重大なる傳令勤務に服し、其の剛膽と機敏とを以て、常に之を達成してゐたのである。

百二十
衰れなる幕营地は、斯く或は風雨の爲、或は炎熱の爲、又た或は悪疫の爲に無残なる襲撃を受けて、而して敵陣の御見舞は云ふまでも無かつた。されど此間にも將卒の元氣は益々旺盛となつて、ひたすら守備を出て、攻勢に轉すべき時機の、一日も早からんことを渴望してゐた。

第十七 警戒線の夜嵐

敵の來襲絶えず

孤軍重圍に陥りたる旅順の敵は、日々其區域を縮められたので、如何にもして、我が軍の一角を破つて、運動の範圍を擴張せんとしたるは、素より自然の數であつた。されば劍山にて幾度かの敗北を重ねて、最早大舉逆襲を試むるの勢を失ひたるが如くなりしに拘らず、我が警戒線の各所に向つて、多少の襲撃を加へたことは、殆ど一日として中絶しなかつた。而も彼は一度として有利なる戰鬪を交へた例無く、徒らに彈藥を消耗し、兵員を滅殺するに終つた。

七月十日頃よりして、我軍は其の陣地の前面に接したる、頗る峻険なる山陵、俗に岩山と命名した地點に前進哨を派遣することとなつた。此の地點には、屢は敵の斥候が出沒して、我れの防禦を窺つたので、我は直ちに之を驅逐して、別に警戒線を張ることとなつたのである。時は七月十六日、射干玉の闇夜に、此の岩山の前進哨に任せられたは、杉村少尉（要太郎）の率ゐた一小隊であつた。夏とはいへ大陸の夜の肌寒さ風は闇を拂うて、此

杉村少尉の苦戦

方の歩哨の面を掠め、彼方の草叢を騒がせる頃、連日の睡眠不足で、肉落ち頬骨は尖つても、心ばかりは彌増しに鋭き彼等歩哨は、今夜こそ敵は必ず襲撃し來たるならめと、目の皿のやうにして、闇を透し睨み、時々大地に耳を付けてゐたは、風の聲を潜つて敵の足音を聞き出さんが爲であつた。果して歩哨を闇を破つて張り上げた「敵襲!」の聲は、直ちに小隊長の「散れ!」の號令と突き合つて頗る壯快に響いた。沈着にして大膽なる杉村少尉は、此の緊要なる陣地の守備を全せんが爲に、勇ましく此の進襲を逆へた。敵は三面より包圍し來り、其數素より知るべからざりしも、我れに數倍するものなることは認められた。而も敵は側面に得意の機關砲を運び來つて急切なる射撃を加へた。機關砲これぞ露軍が防禦上第一の武器とし頼んだもので、此の利器は既に南山に於ても甚だしく我軍を憐まし、多くの我兵を屠つたものである。此の兇器を有する多勢の敵に對し、悠長長劍を揮つて、寡兵を指揮しつゝあつた杉村少尉の勇猛なる態度を想ひ見よ。三面に敵を受けたる前進哨の運命は、一に少尉の手に繫がつてゐた。然れども少尉の剛膽なる、又た部下の勇敢なる、彼等は能く二時間の交戦に耐へ、數倍の敵を支へて寸尺をも譲らす。敵は遂に力及ばずと知つたか、一齊に手を退いて、闇中に其姿を没してしまつた。されど噫!

少尉の致命傷

我が沈勇なる杉村少尉は終りまで健全では無かつた。敵の機關砲の彈丸は彼の頭部を貫通した。されど一念の徹する所、彼は猶ほ號令を絶たず、鮮血迸りて兩眼に注げども、敵が退却するを見届けたまでは、依然奮闘を續けてゐたのである。

敵の卑劣手段

敵は死屍十數を跡に残してゐた。而して夜來の腥風曉天に吹いて明れば十七日の早朝、敵は平氣な顔で赤十字旗を立て擔架を運び來たつて、我が哨兵線に接近し、甚だしきは僅かに五十米突の距離に進み寄り、屍體を拾ふに假托して、卑劣にも我が陣地内を窺はんとした。これぞ彼が白旗や日の丸の旗を利用して我を欺かんとしたと類似の奸策であつて、而かも彼等は此等の意久地無いことを度々繰返したのである。彼等の陋劣なる、或時かう云ふ事もあつた。一の地點に於て、歩哨は前面より確かに一個の黒き影の進み來たるを見ながら、

敵の日本語

『止め! 止め! 誰か?』
 と例の如くに誰何したれば、其の黒き影は低き聲にて、
 『我軍の將校……』
 と答へた。それで歩哨は我軍の將校斥候が歸つて來たものならんと思つて、

『通れ！』

と云つた。すると彼の黒影は、忽ち叱咤銃剣を突いて我が歩哨に擬した。欺かれたるを曉つた歩哨は、『何を小癪な！敵かり来い！』と叫びながら、銃床で之を殴り飛ばした。敵は何時の間にやら少しの日本語を覚えて、それで我れを欺かんとして失敗したは心地が良かった。如斯くに敵は勇らしくも無き小策を弄し、奸智を廻らす事多くなりしが故に、我軍たるものは常に細心密慮の注意を要してゐたのである。

從卒伊藤福松

杉村少尉が收容せられて、一民家の納屋に横へられた時、其の從卒伊藤福松は、慈母が我兒の病を護るが如くに、顔色は心配で蒼ざめ、眼には一杯の涙を浮べつゝ、少尉を慰安してゐた。其のいぢらしき看護のさまは、視る者をして漫に涙の滂沱たるを禁じ敢へざらしめた。少尉が野戰病院に送られた後にも、伊藤は暇ある毎に遠き道をも意とせず、而かも難路を越え往きて、主人の傷を看護してゐた。或日子が公用あつて旅團司令部へ行つた其の歸り途にて、重き荷物を肩に負ひ、喘ぎ／＼山坂を登つて來る一兵卒あるを見た。近づけば之れぞ即ち伊藤福松であつた。予は彼に、『杉村少尉の傷はどうか？』

『ハイ、非常に悪くて困ります。今日は何も分りになりません。』

『さうか。おまへが感心に能く見てくれるので、杉村も唯かし喜んでゐるだらう。』

予がかく伊藤を慰めると、彼は乍らホロリと涙を落して、

『私は少尉殿と一所に傷を受けなかつたのが残念でなりません。今日までの御恩返しもせず、お別れ申すのかと思ふと、何故一所に斃れなかつたのかと思ひます。昨夜でした、少尉殿が苦しさに私の手を握られて、「世話になつたよ」と云はれた時には、少尉殿の御供がしたくてなりませんでした……』

予は最早伊藤の顔を打成るに忍びなかつた。彼は『早く往つて見ませう』と云ひて、予を離れ、萎々と歩を運んだ。而して彼の擔ひたる重き荷物は、凡て杉村少尉の所有品であつた。

杉村少尉負傷してより、將卒皆共に憤懣の念を高め、早く靦面なる太白山の敵を攻撃して、幾多の戰死者の弔ひ戰をせずしてあるべきに非らずと競ふてゐた。されば猶ほ警戒線上に在つて、あたら無殘の最後を遂げた者の如きは、皆悲憤の涙を流しつゝ、眼目したのである。而して彼等が臨終の言葉には痛恨他の脇を裂るものがあつた。予は今茲に其最も悲

壯なる一例として、山下兵吾なる一卒を紹介せん。兵吾は平素よりして、何事を爲すにも熱心で従順で、聊かも勞を惜ま無かつた。されば彼が戦友等も、常に彼を敬愛して兵卒の模範としてゐた。彼れは戦場に在つて、或日襟を正し、日頃最も親しくしてゐた一戦友に向ひて、

『わしは決して生きては還らぬ。此の地の下にゐる十年前の戦友に逢つて、恨を返せる時の來たのを知らせてやる事が出来れば、他には何の望も無い。……が予には一人の兄があつて、貧苦の中で家を立てゝゐる。わしが死んだら、目覺しく死華咲かせた事を傳へてくれ。』

と云つたさうである。其後程無く、彼は或命令を受けて傳令勤務に服したが、其任務を達し、歸つて之を中隊に報告せんと急ぐ途中にて、敵の流彈の爲に腹部を貫通せられた。兵吾は憤慨叫んで、

『ナニ糞！これしきの事！』

と云つたが、遺憾なり、彼は復た起つこと能はずして、綑帯所に收容せられ、軍醫は彼を檢して、眉を盛めつゝ、逆も助からぬと云つた。聯隊長は彼を見舞ひで、

『氣を確かにせよ、苦しからうが、心を大丈夫に持たぬといけぬ。』

と慰められたが、でも最早臨終と見えれば、聯隊長の目には遺憾の涙が浮んでゐた。そして、

『名譽の負傷だ。能くやつてくれた……』

仇を討つて
下さい

此の慈言の耳に通じた兵吾は、細く目を開き、苦痛の中にも力の籠つた聲を出して、

『聯隊長殿、すまんことを致しました……どうぞ仇を討つて下さ……』
彼が手は震ひ、唇頭は猶も物云ひたげに動いたが、やがて事切れ、遂に歸らぬ黄泉の客となつた。兵吾彼は不日の花々しき戰場を待たず敢無き最後を遂げ、唯だ『仇を討つて下さ』を此世の名殘となし、又た聯隊長に託を云つて瞑目したとは不惑であつた。其翌日戦友は彼が遺骨を戰場に葬り、遠山布教師は懇切に之を弔ひ、釋忠肱の法名を授けた。其墓標は旅順に而して建てられた。

戦死者の追悼

予は今茲に筆を改めて、此の幕營地に於て戦死者の追悼祭を營んだことを語らねばならぬ。劍山攻撃以來、我等が部隊の戦死者は兎に角少からぬ數であつたので、我が師團長閣下は、彼等の英靈を祀り、其忠魂を慰せんが爲に、日は七月一日、空打ち曇る夕まぐれ、

陵水河子の畑地に、形ばかりの祭壇を設けられた。名は祭壇なれど、實は土民の家の庭に据ゑてあつた机を用ゐたもので、上には白き布を敷き、布教師が持合の阿彌陀佛の畫像を祭つて、其前には四寸角ほどの箱に納められた遺骨を幾つも積み重ね、又た焼香の備もしてあつた。其祭壇は又た丁度旅順の方向に面せられてあつた。薄暗き蠟燭の光は物悲しげに、遠近の虫の音は無常を告ぐるが如く、折しもあれや揚柳の枝を梳づりて静かに降り渡ぐ村雨は、一入の哀れを増した。師團の各將校は祭壇前に環形を成して整列し、兵卒は其後に立ち、布教師の讀經が終ると、師團長は静かに進み出で、香を焼き、恭しく禮拜し、雲時は頭を擡げられ無かつたは、定めし無限の悲愁と感謝の念とが、其胸裡に往來してゐたのであらう。口の中では『能くやつてくれた！』と念じてゐられたことであらう。亡き人も心あらば、此將軍の麾下を離れたことを悲み嘆いたらう。又た次ぎ／＼に焼香する將卒が心中の情や云ふべからず、我が部下の靈を祀る中隊長や小隊長の思ひや如何に？花々しく戰つてくれた、それこそ日頃教育した効はあれ、能く汝の自分を盡くしてくれた、能く陛下の股肱たる精神を貫いてくれたと嘆きの中にも感謝してゐたらう。入營以來同じ枕に寝ね、同じ務に勤みたる兵卒等は、故友が健氣の最期を羨み、自から死後れたるを

折からの雨

嘆じたてもあらう。祭壇に額突く將卒の袖に宿した露は、空の村雨の降りかゝるのみでも無かつた。

戦死者忠魂碑と記された記念の標の前に額突く戦友等が、鐘詰の殺に青き草葉を差して手向となし、又た水筒の水を注いだ其のやさしき心根！中には『戦死の魁』など云ふ文字を記して供へたものもあつた。かく厚く巾ははれて、亡き魂も嘸や嬉しく感動したことであらう。

第十七 太白山の激戦

(共 一) 苦 戦

我軍の配備

願みれば、劍山に敵の大逆襲を撃退してより以來、我陣地は益々堅固なるを加へた。内には各般の進撃準備を講じ、且つは南山にて分捕たる大砲十二門を龍泥橋附近の高地に配置し、又た海軍軍砲六門を西部猪園子溝の西方高地に配備し、而して外には屢は有力なる偵察隊を派遣して、敵の前進陣地に於ける一帯の防備を知悉するに努めた。此時の敵の主なる陣地は北、營城子より起つて、雙臺溝、安子嶺を経て、南、太白山及び老座山に亘る一帯の峻嶮なる山陵であつた。而かも彼等は此の天險に據つて、歳月を厭はず費用を惜まざ、あらゆる限りの堅牢なる設備をなして、我軍をして一歩も南地に進む能はざらしめんとしてゐた。されば之を抜き之を陥れんことは、眞に容易の業では無かつたのである。然るに我軍の満を引いて未だ放たず、將率皆脾肉の歎をなすこと實に一関月、今や進軍發展の機は充分に熟し、志氣亦た愈々振ひたるを以て、遂に七月二十六日を期して、諸隊等しく陣地を發し、南方進撃の戦端を開いた。

敵軍の陣地

目標は太白山

予等の屬せる聯隊の攻撃すべき唯一の目標は、即ち敵が前進陣地中の最要地點と頼んで、防備最も堅固なる太白山一帯の高地であつた。攻撃開始の前夜に當りて、凡ての部署に關する命令は發せられ、旅團長よりは特に、這般の戦闘は實に旅團攻圍の第一着步で、敵の堅固なる前進陣地を攻略することであるから、將校以下各員奮起努力して、飽くまで奪略せんことを期せよと勵まされたのであつた。聯隊長に於ても亦た部下一同に向ひ、我が聯隊全部が勢を揃へて戦闘に當るのは、今回が初めてである。凡そ戦争終極の勝利は、初戦に於て既に決を見るものである。聯隊長たる予は既に汝等の生命を貰ひ受けたものであるから、戦闘に關しては、あらゆる手段の下に汝等を惜み無く犠牲とするぞ。又た汝等が日頃練り鍛ひたる武士道の精神を發揮するは眞に此時である。汝等は予が平素の訓戒と、殊には出發の日汝等に授けた訓示とを能く心肝に銘して、一途に陛下の御信頼に應へ奉らんことを期せよ、我が名譽ある軍旗の下に悉く殫るゝの覺悟をなせよと、斯くいとも嚴格なる訓示を與へられたのである。而して又た大隊長は各中隊一般に、中隊長は各小隊の一般にそれく諭告して、各員擧つて聯隊名譽の爲に努力奮闘せよと云つたのである。斯如くにして、予等は兼ての覺悟の上に、更に大決心を促されて、英氣益々勃々、雄心愈

汝等を犠牲とせん

上落々、未だ交へざるに、各員の意氣既に太白山の敵勢を壓してゐた。
 進發前夜の幕内にて於ける光景は一種異様の觀を呈して、戰友互に何事かを囁き合ふものあり、軽く銃を摩して獨り苦笑を洩すものあり、死恥殘さじとや晴の襟袷と着換へするものあり、さては天を仰いで微吟するものあり。而して此時予等が心底には如何なる思想が往來してゐたらうか？蓋し各員必ずや、天に謝す、予は予の義務を盡くしたりと云ふを得んことを冀つてゐたことであらう。

七月二十六日の天未だ明けず、夜來の驟雨は漸く晴れたるが如しと雖も、霧深くして咫尺を辨ぜず、涼風征衣を拂ふの時、幾千の貔貅は闇に紛れて、長蛇の如く徐々に動き出した。午前三時といふに例の岩山の麓に到着した。此處が聯隊中の豫備隊の位置で、此の山頂は散兵陣地、右方の山陵が砲兵陣地と斯く部署せられ、而して戰團開始の合圖があるまでは、一兵も頭を出すことはならず、銃に裝填し、彈藥盒の口を開いて、ソレ撃てーとの聯隊長の號令を待つてゐた。聯隊長は岩山の最頂點に双眼鏡を手にして立ち、副官は地圖を開き、時々圖表を手搜ぐる。小行李の彈藥駄馬は山麓に寄り沿ひ、輪卒は手に唾して待ち構へてゐた。而して今に合圖の砲聲がある筈であつたから、我々は時計を出して、今五

分か今三分かと、針の進むに連れて胸を躍らせてゐた。

午前七時四十九分、待ちに待つたる第一發の砲聲は、曉の雲を破つて左翼隊の方面に轟いた。是れが即ち老座山及び太白山一帶の敵に向つて、攻撃を開始する最初の砲聲であつた。守備の三十日間、我れよりは未だ會て一發だにも砲聲を加へなかつたものだから、此の砲聲にて敵も流石に驚いたのであらう、頗て彼より周章で、撃返した砲聲は、如何にも眠むさうにブルーンと空を掠めた。我等の戰團方略は、左翼部隊先づ老座山の敵に當りて之を破り、然る後に予等の部隊は之と並列して前進すると云ふのであつたから、予等は暫く手を束ねて、老座山方面の戰團の如何に成り行くかを氣遣つてゐた。やゝあつて我が海軍砲は、耳を劈くばかりの巨音を以て發射を始めた。此の勢なら、敵は造作無く敗れて、彼の前進陣地は容易に我手に入るならんと思つたが、どうして／＼敵もさるもの、我が攻撃の前に、決して蜘蛛の子の如くに散るものでは無かつた。

老座山方面の戰團は益々激烈となり、我が全砲門は老座山の北側斜面に在る敵の重砲隊に集中して、之を沈黙せしむることに努めた。稍や暫くして敵の砲火漸く衰へたるを見ると、我左翼隊の歩兵は、砲兵の掩護に依つて前進を始め、直ちに正面の約二千米突前なる

敵の死守

新月形の高地を占領し、續いて時を移さず、左方に轉回して、十時頃になつて老座山の北方鞍部を占領した。元來敵は此の方面に對して、防備に多大の力を加へ無かつたものと見え、若干抵抗の後に其大部分は老座山の主要地點を棄てたけれども、猶ほ中々に頑強で、我が歩兵の既に山頂を占領した時となつても、一部の敵は其の南方斜面に占據し、我れの瞰制射撃の集中火の下に儼立して、死守の態度を取つてゐた。是れがため意外に長時間の戦鬪を要した。されど左翼隊は遂に此敵を壓迫して此地點より逐ふことを得たかねれど、彼等は後に龍王塘の入江を控へて、所謂背水の陣を成してゐたもので退却することが出来なかつた。されど彼此する中に我軍の追撃に遭ふたので、多くの死傷者を棄て、殘兵はジャンクに乗つて對岸へ隠れてしまつた。

左翼部隊の成功既に斯くの如くであつたので、我が騎隊たるものは乃ち此に於て、攻撃開始の機會に逢着したのである。由つて聯隊長青木大佐は、各大隊長を顧みて、

全線射撃を
始め!

『ヨシ! 全線射撃を始め!』
と號令する、乍ら第一大隊と第二大隊とは右方に、第三大隊は左方に、全線は豫定の陣地で揃つて頭を出した。豆を炒るやうに、パチ／＼と響き出した。我れが撃ち出す

死傷續出

が早いか遅いか、敵の彈丸は夕立の雨の如くに、大粒で、バタリ／＼と前後へ落ちて砂を煽る、石を蹴る、兵を斃す。耳を掠む音はヒューツと鳴り、空を切る聲はブルーンと響く。一連の鎖のやうに繋がつた散兵線には、段々と空隙が出来る。擔架卒は彼方に走り、此方に駆けて、死傷者を繃帶所へ運搬してゐた。小銃彈の霰ばかりか、巨大の砲彈が頭上で白煙を噴いて爆裂する。其彈子はボテ／＼と地上に落ちて砂を蹴り、又た散兵を頭から突き通した。そのみか砲彈の空筒は山を越して、豫備隊の中へドンと落ちて來るのであつた。予が猶ほ豫備隊の位置に就いてゐた中に、一兵卒が敵の砲彈を受け、右の腕を切り飛ばされて即死したものがあつた。後で其砲彈殻を見ると口元には外套の片、其下には上衣の片、襦袢の片、それから肉に骨、その先には襦袢、上衣、外套と云ふ順序で、血に染んだ草や石を交へて、丸で一個の罐詰を成してゐた。

砲彈殼の罐詰

斯くして戦鬪を持續せしこと數時間であつたが、敵の銃砲は甚だ優勢で、我軍は爲めに容易に前進の機會を得無かつたのみならず、死傷者は續出して、擔架は逆も間に合はず、而も後方に在つた繃帶所までが、敵砲を蒙つて、一旦收容した傷者が、再た傷いて斃れると云ふ有様で、苦戦一方ならぬのであつた。それで更に豫備隊を前進せしめて、砲兵陣地

砲兵陣地の
慘状

豫備隊の
進

軍旗は破れ
たり

仁王立の聯
隊長

の左翼に位置せしめ、イザとならば突撃隊となつて前進の出来るやうに用意して置いた。此時予は軍旗を奉じて、此の豫備隊中にゐたが、其の地位が一つには砲兵陣地であつたのと、又た一つには軍旗を敵に與へたのと、乍ち王家屯附近にあつた一隊の敵は、此地點に向つて凄じい砲撃を開始した。其の集注火は命中實に確實で、爆發の轟音は空気に劇烈なる震動を與へた。而して其の彈子は横斷りの散雨の如く、砲煙の飛散した跡には、只の今まで勇壯に指揮を取りつゝあつた小隊長が、早や半身朱に染んで死んでゐた。砲車長も砲手も手足其處を異にし、腦漿は湧き出て、膈は血泥に塗れてゐた。豫備砲手が其の補充に就かんとすれば又た斃れた。其の壯烈悲惨の状は實見者ならでは、殆ど想像も及ばぬことで、予の筆亦た到底能く之を盡すことは出来ぬ。

敵が砲彈の襲撃に、我が豫備隊亦た察からざる損害を蒙りしより、今は只た向ふ見ずに暴然猛進するの一途あるのみとなつた。一分でも長く此位置に止まらば一人でも多く損傷されるのであつた。扱て先の程より空は陰々たる黒雲低く垂れて物凄さ有様となつてゐたが、やがて疾風は砲煙と共に吹き來り、狂雨は彈丸と共に斜に降り出した。其中で我等豫備隊は命令によつて、直接、聯隊長の位置へ轉進することになつた。されば直ちに砲兵陣

地を棄て、左方、岩角傳ひに行進を起したが、疾風は軍旗を高く半月形に吹き揚げて、卷けども巻けども、又た裂き破らんばかりに吹き飛ばした。其時恰も一發の砲彈は予の頭上に破裂して、其の破片がシュー、と響いたと思ふ間に、軍旗を劈きて舞ひ上がらせ、上等兵一名を斃して、遠く後方の谷間へ落ちた。

前にも云へるが如く、我が聯隊長の占めたる位置は岩山の絶頂で、此激戦の最中、敵は此處を必ず主眼の在る所と、切りに榴霰彈の霰を降らしかけたが、其中に在つて青木大佐は仁王の如く又た不動の如く、屹と敵を睨んで立ち、予が近づいて軍旗の裂けたることを報告すると、睨だ「サツか！」との一言があつたのみ。稍やあつて、

『九て機動演習のやうぢや無いか！』

聯隊長其人の膽や斗の如く大に、其勇氣凜々たる態度は不言にして衆を激勵し、稍ともすれば喪心せんとした兵卒も之を仰ぎ見て、更に數層の勇を鼓して奮闘するのであつた。既に午後二時にも及んだが、大勢は未だ定まらず、我れは刻々に損害を増加せらるゝの苦境であつたか、此時左翼隊の一部は、更に前進を起した。山を下る隊伍の先頭に立つたは大隊長であつたらう、軍刀を閃かして奮進するのが見えだ。そこで我隊も『前へ！』の

八田少尉の
勇敢

號令を發するや、全線は黒き柵の如く、一度に起ち上つて、敵の銃口前へドシ／＼前進した。此時こそと敵は一層火力を増大して、其勢や狙撃を極め、爲に進む者は斃れ、止まる者は已に死してゐるのであつた。小隊長八田少尉（雄次）は遂に敵彈の爲に胸部を貫かれたが、彼は毫も屈せず猶ほ「前へ！前へ！」の號令を叫び、迸り出づる血潮を意とせず、負傷せしことを部下にも告げず、唯だ一心に目ざす敵陣さして猛進せし事實に千米突、遂に第二の占領線に近づくや、微かに萬歳を唱へて息は絶えた。

左手銃を取
つて進む

勇將の下、豈に弱卒あらんや。八田少尉の部下なりける一兵は、小隊長に先だち、敵の砲彈の爲に右の腕を劈かれたが、それでも後へは退かぬ。小隊長が細帯所へ下れと勸めても聽かず、「ナニ、これしきの傷、まだ／＼躰は出來ます、大丈夫です」と云ひ、水筒の水を傾けて傷口を洗ひ、手拭を縛り付け、左手に銃を握りて、息を吐き／＼散兵と共に前進したが、最後の線にて、兄とも頼みし小隊長八田少尉と同じ枕に討死した。而して彼は決して武夫の魂たる銃器を放たなかつた。彼の八田少尉と云ひ、此の一卒と云ひ、孰れ劣らぬ大和心の華であり、彼等の覺悟は斃れて猶ほ已まざるに在つたのだ。遂に聯隊長の手許に在つた豫備隊は、繼ぎて歩兵の二個小隊と、工兵の一個小隊となつた。

何等の効果
無し

た。之に由つても如何に困難なる戦闘を交へたるか推せらるゝのである。朝來我が砲兵は苦戰に苦戰を重ねたれども、優勢なる敵砲を威壓すること能はず、而かも堅固なる敵の陣地に對しては何等の効果をも奏せず、遺憾此上無き事であつた。我が歩兵は敵前實に五百六百米突までも押し揉んで通つたかなれど、砲兵の榴彈が能く敵壘の工事を破壊してくれなければ、盲進は單に斃死部隊を曝すこととなるのみであつたから、多大の恨を呑んで、デット其處で敵と對峙したまゝに、夏の永き日脚も遂に西に没して、凄慘たる黒幕は戰場を蔽ひ包んだ。

夜色凄然

雨は小歇となりたれども、夜色凄然、幾多勇士の死屍は、彼の山に重なり、此の谷を埋め、敵壘は高く閣中に屹立して、堅牢拔くべからざるを誇るが如き觀を呈してゐた。されど我等の志氣は毫も衰へず、反つて憤慨の火の手は益々熾なるを加へ、明日を期して必ずや大に此の勁敵を破らんものと決心してゐた。夜間銃砲火は一時も絶えず、死屍の運搬は擔架のみにて事足らねば、天幕を代用して此等を谷間に集めた。負傷者は又たそれ／＼衛生隊に收容せられた。而して健全なる予等は、靜かに横たはれる勇士の屍に凭つて、微霽一匯をも食らず、戰場に明るる日の早かれかしと祈つてゐた。

第十八

太白山の激戦

(英三)

占領

敵陣の危険

砲火奏効せず

砲兵は未だ奏効せず

明れば二十七日、今日こそ必ず敵陣を奪略せずしてあるべきかと、拂曉よりして既に我が砲兵は協力して砲火を放ち、以て歩兵突撃の通路を開かんと努めてゐた。前日より一層猛烈に砲撃したが、敵の之に對する應射も亦た前日に比すれば一層劇甚であつた。斯く怪しまでに堅固なる敵の陣地は、如何なる構成であつたかと云ふに、一帯の高地には悉く岩石を以て堡壘を築き、木材を以て掩蓋を作り、銃眼を穿ちて、敵は我が砲弾の爆發に耐へつゝ、身を匿して充分に射撃が出来るのであつた。速射砲、機關砲等を各方面に配備して、縦横自在に砲撃が出来る、而して此等は堅固なる材料と工事とに依つて、陰蔽せられてあつた。加ふるに山の前岸對岸共に岩石峭立せる峻險の谷地であつて、降ることも攀ることも中々に容易で無い。此の危険なる山谷を越え、敵の集團火を冒して前進するのであつたから、私の被害の多大なるは當然の事であつた。

砲兵は未だ奏効せず、小銃火は無論何等の効力をも現はさぬ。どうかして敵の機關砲

肉弾は最後の手段

突撃縦隊

奮進の状

を根本的に撲滅せざれば、我は徒らに斃死の大部隊となるばかりだとは知つたが、今は致方が無い、火力にして効無くんば、即ち最後唯一の手段は、人間を擲つ肉弾にありだ。大和魂の塊つた此の肉弾、如何でか敵壘を破らざるべき！果して令下る。乃ち我が第五、第七、第十の三中隊は阪落しに谷を下つて突撃を開始した。すると今迄我が砲兵と對戦してゐた敵の砲兵は、乍ら目標を變換して、此の突撃縦隊に向つて火焰を吐き、榴霰弾を打ちかけた。同時に機關砲は素より、各壘の歩兵火は悉く射撃を我れに集中した。突撃隊は之にも怖まず、喊聲を放ちつゝ疾風の如くに猛進した。其聲は銃砲聲と相合して、百雷の一時に轟くばかり。突貫！突貫！猛りに猛り、隊長傷つけども顧みるの邊無く、部下もれども最後の握手を爲すに山無し、死屍を踏み越え踏み越え、遂に敵前僅かに十數米突まて肉薄した。されど地形の險なるは之を平ぐることが得ず、屏風の如き峭壁は藩として前に立塞がり、後を顧みれば、山腹悉く死屍ならざるは無く、部隊の半は既に殞れてしまつた。それでは是非も無く、此處で敵と脱合つて對峙するの止むを得ざるに至つた。此の突撃縦隊が、敵の砲弾を浴びつゝ前進した時の状態は、實に壯烈また慘憺を極めた。彼等は硝煙濃々たる内に包まれて、淡く薄き影の如くに見えつゝ奮進してゐた。中には時々砲

彈に跳ね飛ばされて宙に揚がる者も見えた。後で屍體を收容した時に、唯だ一つの彈痕も無さに、前身の紫色に變つてゐた者があつた。之は乃ち敵の砲彈に跳ね飛ばされ、礫のやうに擲けつられたものなのであつた。

全滅を覺悟す

敵の抵抗は斯くの如くに頑強にして、我が火力は、雷に針を以て大鐘を撞くが如く、何等の痛痒をも與へたらしく無かつた。若し此勢で往昔久しきに彌らば、戦闘の終局は殆ど期し難く、或は遂に不幸なる戦況に陥るやも測り難し、今は全滅を覺悟して、飽くまでも奪取を圖らねばならぬのであつた。果然我が旅團長より次の要旨の命令が下つた。

旅團長の命令

『前日來の將卒の勇敢なる動作を曠賞す。旅團は本日午後五時より太白山東方一帶の敵を攻撃する爲、全砲兵を以て砲撃を加へ、左翼隊は砲撃の熟するを待つて前進、敵を攻略せんとす。其の聯隊は此の好機を逸せず、死力を竭して當面の敵陣を占領すべし。』

軍旗下の將校

然り我等は死力を竭して敵を破らんものぞ！今更の事ならねども、今日こそは如何な事があつても、軍旗を敵陣に懸へして、前日來凱歌の聲を聞かすして斃れたる幾多勇士の忠魂を慰籍せずしてあるべきか！

機の際を待ちつゝ、軍旗の下に集まつたる一團の將校、孰れも昨朝以來の戦況を語り合つて、

『敵も中々豪いぞ！敵の將校で胸臆の上に立つて指揮して居たものがあつたぞ。』

『敵も随分苦戦してゐるのだ。今日こそドツしても抜いて見せねば承知せぬ！』

ビール一瓶

など旺に氣焔を吐いて、敵の頑強なるは器械の効力のみならず、又た其動作の勇敢なるに依るのなどと批評を下しつゝ、憤激の念は愈々勃發し、攻撃精神は復讐の情と共に益々高まつてゐた。時に一人の少壯士官が、一瓶のビールを提げて來た。予等は、昨日來殆ど食はず飲まずの状態であつたし、それに此の戰場でのビールの一瓶は、如何にも珍しく思はれてたので、げげんな顔して此士官を見た。此の將校こそは管中尉（正）とて、時の大隊副官であつた。中尉は如何にも壯快な口調で、

管中尉の別盃

『珍しいだらう、ビールとは？昨日から、敵陣で萬歳を唱へて祝杯を挙げやうと思つて、腰に吊してゐたのだ。今日は愈々諸君と永き別れの盃を酌まうと思ふ——諸君には長々と至極眞面目になつて、一椀のアルミ製湯呑に之を酌んで、予等は順次に飲み廻し、何の意味無しに片頬に笑塵さへ洩した。別盃終るや、管中尉は空瓶を高く差し舉げて、

「諸君の健康を祈る！」

と云ひ棄て、戦死者の遺骸を埋葬する爲にと立去つた。嗚呼これぞ實に管中尉が別れの盃であつたので、彼は之より間もなく、敵陣に凱歌を唱ふべき時をも俟たずして、名譽なる戦死者の列に加はつた。中尉と予とは同郷竹馬の友で、彼は口頭予を弟の如くに愛してくれたのである。されば戦場で邂逅ふ毎に、互に手を握りめめて「丈夫でゐたか？」と云つて、泣く程に嬉しかつたものを、彼時これが愈よの永別なりとは夢にも曉らねば、しみく、是迄の禮も云はせて、これも戦場の習、飽かぬ間に盡させぬ名殘となつた。後にて聞けば中尉は死骸の埋葬を監督して、

丁馬に士を
かけてくれ

『丁馬に士をかけてやつてくれ。此のふれも今少しすれば、此のやうにして貰はねばならぬのだから。』

勝受を囀る

と云つたさうである。中尉は自から命の盡くるを悟りしか。曩に戦死した八田少尉も前進に當りて、思ひ出したやうに、衣兜から一包の勝栗を出して、從卒に、

『これは母が神前に備へたもので、戦の前には必ず戴けと云はれた。わしも戴くから、まへも一つ戴け。モウこれが別れになるかも知れぬ。』

とて押し載せて兩人で囀つたとか。予等も常に死を覺悟し、逢ふた時が乃ち別れだと思つてはゐたが、イヤ眞の別れとなる時には、何が目に見えぬ不可思議の糸が、特に心に前兆を傳へ来るものか？

午後五時來
れり

午後五時は來れり、我が全砲兵は一齊に砲撃を開き、歩兵も亦た全力を擧げて射撃を始めた。天地は忽ち硝煙の雲霧に鎖された。飛彈爆鳴は山谷を劈かんばかりであつた。今度こそは決戦であつたから、其の猛烈なりし事、其の慘烈なりし事、之を形容せんにも語が許さ無い。我歩兵は射つては進み、止まつては撃ち、奮進又た躍進、されど嵐に突の敵弾は眞向きに前進するのを阻じ、『小隊長殿』と微かに響くは最後の感謝で、アツと叫ぶは玉の緒の絶ゆる聲。さり乍ら今は此等の劇境、慘狀を氣にかけてゐるべき場合で無く、一歩でも前進して敵陣に逼らねばならぬ。旅團長の命令には何とあつたか、勇敢を噴賞すであつた、死力を竭せとあつたては無いか？唯だ進め、進みて死せよ、今は半歩も止まるべき時で無いぞと、將校は軍刀を揮つて、戦線を彼方に走り此方に驅けて、志氣を鼓舞してゐた。豫備隊たりし二個小隊も工兵も亦た第一線へ増遣せられた。遂に我が第一大隊は、敵前實に二十米突の近くまで肉薄したかなれども、前に立塞がれるは屏風の如き岩山で、殆

進みて死せ

一の足場無

ど一つの足場も無ければ、如何に急つても攀ち登ることが出来ず、側面からは敵弾がバラ／＼浴びせかゝる。正面に向つた第二中隊は只だ唯だ敵の機關砲の標的となるばかりで、見る見るバタ／＼と仆れる。一弾は松九大尉(淳一)の劍身を貫き左眼を掠めた。而して又た我が砲兵の射撃は花火のやうに空中で破裂したゞけのことで、敵の防禦工事に對しては、殆ど何一つの効力をも奏さなかつたやうだ。榴霰弾では役に立たぬ、榴霰を爆發せしめて、敵壘の掩蓋を碎破せなければならぬ。爲めに我歩兵が損害を受けても致方は無いから、兎に角、早く榴霰を發射してくれと、砲兵隊へ切りに傳令を派遣したが、一人として歸つて來ず、皆途中で儘れた。工兵の小隊長に、爆薬を送つて來いと命じたが、それも間に合は無かつた。

傳令悉く曉る

形勢は依然たり

七時も過ぎ、八時、九時ともなりたれど、形勢は依然として揺らさず、第一大隊は一時進撃を停止するの止むを得ざることとなり、又た第二大隊方面にては、大隊長玉井少佐(清水)重傷を蒙り、副官管中尉は突撃進路の偵察中、後を振り返つて「傳令」と云つた其刹那、敵弾に頭部を貫かれて即死した。第三大隊方面に在つても、只だ敵と接近したばかりで、其上如何ともなし難く、死傷者は續々増加するの苦境に陥つた。我等は恰も鯉魚の

岩を缺き石を積む

戦場の弦月

口に呑み込まれんとする細鱗のそれ、此末如何に成り行くべきかを疑はしめた程であつた。されど不撓不屈は我軍の精神なり、敵が頑強なれば我も亦た然り、我が各大隊、就中第一大隊方面にては、十字鋼を以て、岩を缺き石を積んで、足場を造ることに勉めてゐた。さりとて敵と尺寸の地を隔て、互に牙を削いて、今にも飛び懸らんとする兩虎の勢であつたから、敵は絶えず、我の作業に非常大の妨害を試み、カチンと音がしても、乍ら火焰の舌を出して背め廻すのであつた爲、容易に成功し無かつた。でも此困難を冒して、足場を略方造ることが出来たら、一舉に突入せんとの計畫であつた。

夜は已に更けたり、物凄き下弦の月は淡く戰場を照して、陣地の半面をいと朧に露はしてゐた。此の時左翼隊なる第二大隊長内野少佐(辰次郎)より聯隊長に宛て、左の意味の一通報が來た。

内野少佐の通告

『我大隊は今より全滅を期して突撃に移らんとす。貴官も共に攻勢に轉せられんことを希望す。予は攻撃の實施者が、予の最も敬愛する聯隊長にして、旭日東天に朝する時は、即ち名譽ある聯隊旗が、赫灼として敵壘に翻へるの時なるを祝す。予は茲に謹んで告別の敬意を表す。』

「君ケ代」吹奏

折しもあれや、遙かに左翼の方に當つて、唳唳たる「君ケ代」の吹奏が聞えた。月影細き空を傳ひ、餘音微かに長く曳いて、予等の腦裏に一しほ深く沁み渡つた。「君ケ代」の唳の聲は恰も陛下御身親から「前へ！」と號令せらるゝかの如くに感ぜられて、將卒は皆自然に身を引きよめ、勇氣更に百倍し、乍ち奮躍、彈雨を犯し岩石を攀ちて猛進し、大喊聲を放ちつゝ敵壘に突入した。眞黒に固まつた一團の先頭に立つたる松村少佐（安雄）は怒眼叱聲、

突入接戦

「突き込め！〜」

「君ケ代」吹奏はなほ盛に起る、各隊は續いて萬歳々々の聲に天地を轟かして聲援を與へた。山上には劍尖相磨して火花を散らし、接戦格闘、これぞ大和男兒の最後の肉弾なるぞ！傲慢無禮の此仇、今ぞ思ひ知れやと、打ち込む太刀筋に鮮血の河を流し、伏屍の山を築き、惨は惨なりしかど、窮苦の餘始めて敵を破つたる我等が愉快の情は那計なりしぞ！津波の如き一團の後からは、又た一團と、我れは續々兵力を増加し、敵は遂に此の猛烈なる攻撃を耐ふること能はず、なほ暫くは逡巡しつゝも、接戦格闘を續けたが、我れは益々勇を鼓して奮闘し、時は七月二十八日午前八時、東天紅を染め出だしたる頃、我軍は確實

太白山占領

に太白山一帯の高地を占領した。

軍旗はヒラ〜と陣頭に翻へり、萬歳の聲は潮の如くに湧いた。

第十九 戦場の跡

我軍が太白山一帯の敵陣地を占領するの成功と名譽とを得るに至つた迄のあひだ、上は師團長より下は一兵卒の堅忍と勇氣とは那計なりしぞ。天險と戦ひ、地利と戦ひ、堅固なる工事と戦ひ、食はず、飲まず、眠らざる事、實に五十八時間の長きに亘つて、而かも頗る頑強なる勁敵に對して、遂に多大の成功を収めたる事が、爾後の作戦に幾許大の重要な効果を生んだであらうか。四千餘名の死傷者を出したる彼の南山の戦闘は、これまでの最激戦と稱へられてゐたが、それとて此の太白山の戦闘に較ぶれば、更に低廉なる價を拂つて勝ち得たる賜物なりと云はねばならぬ。南山の地形は、敵が前面に展開したる緩斜面の地帯を叩へて、我が攻撃部隊を掃射したものであつた。然るに太白山一帯の地形は、全く南山と異なり、千仞の山谷を以て成れる處で、敵の彈丸に對しては死角（急斜面の内側にて彈丸の中らぬ箇處）に據ることも出来れば、掩蔽も出来た。然るに南山と殆ど同数の死傷者を出した。之によつて見ても、其攻撃の困難なりし事が判定せられる。

實に五十八時間

南山と太白山

糧食來らず

難戰苦闘三日に亘りて、敵と殆ど尺寸の地を争うて對抗してゐたのであつたから、無論糧食は後方から少しも運搬されず、將卒は總かに携帶口糧の重燒麵包を嚙り、一滴の水も掬ふことも出来ず。小便も其位置に垂れ流し、無論一睡たりとも假眠むことはならず。されど滿腔の憤激に、氣は張裂けんばかりであつたから、到底眠るとか飢しいとかの考へも浮ば無かつた。敵に於ても亦た同様であつたと見えて、陣地占領後、其の散兵濠を見れば、到る處大小便にて汚されてゐた事から思ふと、敵も亦た一歩も動くことが出来ずに、五十八時間の間デット嚙り付いてゐたものなることは確かである。只だ彼等の遺棄したる黒麵包、角砂糖の類が、随分と我兵士の枯腸を肥したくらゐであつたから、敵は糧食の點に就いて格別不自由を感じ無かつたものだらうと察せられた。

只だ眠むたし

それで、連日眠ら無かつた我等の、占領後先づ第一に感じたのは、眠くて／＼堪へられぬ事であつた。他に何の慾氣も起ら無かつた。彼處に一團、此處に一群、始めは誰が戦死したとか、誰がカウであつたとかと色々な壯快悲痛なる話をしてゐたが、聽てコクリ／＼と眠り出して、たわいも無く、敵の棄てた掩蔽下に横臥するのであつた。其處には敵の死骸もあれば、生々しい血が一杯に流れてゐたのに、それさへ一向無頓着で、食ひたいとも

飲みたいとも何とも思はず、唯だ霹靂雷の如くに起つて、折々何か思ひ出したやうにヒュッとして空を切る敵の未練弾（特に斯く唱へてゐた）を、最早蚊の唸聲ほどにも氣に掛け無かつた。

戦場の悲慘

戦争の壯觀は彈丸雨注の中に於て之を見る事を得れども、戦争の悲慘は戦後にあらずんば之を知ることを得無い。公平なる『死』の影は、敵と云はず、味方と云はず、等しく襲ひ來りて凄じかりし争闘のハタと止みたる草の蔭、石の間に、血潮に塗れて長く横はれる無數の死屍！其の顔の奥には如何なる深き意味の潜めるやらん。予等の囊に南山に於て死屍を見たりし時は、目を蔽うて之を見るに忍び無かつたが、今此處で、ゴロ／＼斃れてゐる屍は、素より酸鼻の狀を極めたものではあつたが、之を見るも昨日の如くに戰慄するのでは無かつた。頭から顔へ掛けてグチャ／＼に碎かれ、腸味噌の湧き出してゐるものもあつた。腸が飛び出して血の滴つてゐるものもあつた。されど予等は爲に先の如くに肩を擡めるのでは無かつた。是れぞ、前日の未だ戰場を踏まず、たゞ僅かに其跡を吊つたばかりの時とは異なり、今は連日苦しみ苦しき、戦場慘劇の場裡を往來して、其の酷烈なる殺戮の光景に慣れたがせぬであつたらう。

憎悪の念

而して又た敵兵の死屍に向つて同情を寄せた昨日の心は、今や一變して憎悪の念を生じた。死したる者に何の罪かある、彼等も等しく其任務の爲に殞れた勇士であつた。されど實際劍華彈雨の間に見えて、幾多の愛すべき部下を殺された我等の情よりすれば、此の奴等が、到底叶はぬ癖に頑張り過ぎて、陣地に隠れて穴から鐵砲を突き出して、我兵を屠つたのであるかと思へば、其の面憎かりし事、これは恐らく實地其場に立つた人て無ければ考へ及ばぬことであらう。されど之は所謂端なない愚痴に過ぎぬので、健氣な最後を遂げてゐた彼等敵兵の、那計り勇敢なりしかは、舉げて之を賞嘆せねばならぬ。能く五十八時間苦戦に耐へて、我軍を掻み惱ましたる其働き振りは、流石は強兵を以て誇るだけの技倆が確かに發揮せられてゐた。一人の敵兵の頭部を繃帯したまゝで、散兵壕に斃れてゐたのを見た。彼は最初の一弾に屈せず、傷に繃帯を施して、依然戦闘を繼續してゐたのであらう。そして第二發目の我が彈丸に腹部を貫通せられて、終に斃死したものだど判定せられた。又た胸臆前に散亂せる敵屍は、我が突撃に遭ふた時に、濠を跳り出して、我に劍尖を擬したる勇士の名残であつたらう。又た或者は胸に妻子の寫眞を抱いて死んでゐた。其寫眞は一面に血の塊で塗れてゐた。戰場に戀々として妻子の寫眞を抱くなどは、女

勇戦せし敵

妻子の寫眞

支那土民の

女しい腐れた奴だと罵る者あらば夫れ迄だが、されど萬里遠征の空、殺氣満々たる戰場の裡、而かも孤軍途絶えて、故郷の雁の音信だに無き彼等の胸中には、果して何等の情が往來しつゝありけん。情を山川に寄せ、憶を風月に委ねて、家郷を望むは人情の常、心の猛き武夫とて、此情に何の差異があらうか？最も勇敢なるものは最も柔和に、最も愛情あるものは最も剛毅なりとさへ、詩人は歌つたては無いか？嗚呼彼等露兵、身は虐政の下に獵り立てられ、家を去りて萬里に苦厄を嘗む。其心事や誠に憐むべきでは無きが！

戦争が先着すると、予の従卒は眞先掛に敵の雜糞一團を拾つて來た。之を開けて見るに、支那土民の服が一着押込んであるのみであつた。予は實に意外の感をしたが、然り是なりだ。曾て警戒線上へ、支那服を着した露兵の斥候の近接した事を思ひ合はすと、さては彼等は之を貴重なる商賣道具として使用してゐたのだな、イザとならば直ぐに早替の發當をやるのだなと心付いた。米國獨立戦争の時に英軍の歩哨が、山羊の皮を被つた敵の爲に、毎夜殺されたと云ふ事であるが、露兵は正に此の故智を襲ふにも似たり、偵察の爲に彼等は如何なる狡猾手段を廻らすかも知れ無かつたのだ。戰場には決して正味の露兵ばかりは出て來ぬ。化物も折々飛び出したとは、寧ろ一奇では無いか。戰場の跡には又た彼

機關砲の威力

等の使用したと思はるゝ、日本國旗も落ち散つてゐた。

扱て機關砲であるが、これを實に我等の最も恐るべき火器であつた。此度の戦國の後で破壊せる機關砲を分捕つたが、それを見ると、略ましの仕組は、楯とも見るべき廣き鐵板を通して照準を取り、上下又たは左右に動かしながら引金を引くと、自動的に一分間に六百餘發の彈丸が繰り出されるのであるから、丸で彈丸の棒が砲身から出るやうなものである。又た恰も唧筒で水を撒くやうに、動かし方次第に依つて、廣くも狭くも、遠くも近くも彈丸を發射することが出来る。それであるから、一度機關砲の掃射の標的となつたなら、續けざまに三發でも四發でも同じ所を貫かれて大きな疵口を開くのである。其彈丸はと云へば小銃彈と同じものであるが、それが長い一連のツツク製の帯に幾發と無く挿入せられてあるので、此帯を藥室に裝填するなら、活動寫眞のフィルムが旋轉するやうに、瞬く間に無数の彈丸が飛び出す、其の凄じい氣味の悪い音は、近くで聞けばカタ／＼と響き、遠くで聞けば、夜更けて人の眠静まつた頃に、程隔つた所の紡績機關がタツ／＼と鳴るのと同じやうだ。敵は之を以て無二の火器と頼んで、防禦上には實に多大の殺傷力を有してゐたのである。而して又た露軍の之を使用するに巧妙なるは大に驚くべき事だ、

全身七十餘
彈

我兵が突撃して、今四五間と云ふ處に迫り、將に凱歌を揚げんとする瞬間に、彼等は例のカク／＼を振り廻す、すると帚で掃いたやうに、忽ち斃死部隊の黒山を築くので、其の効力や實に多大であつた。此の太白山の役に、我が第二中隊の決死隊斥候の一兵卒にて、兵頭なる者が、占領後敵の陣地内で殺されてゐたのを發見したるに、彼が身には正に四十七彈を受けてゐて、右腕のみにても二十五發の多數であつた。又隣接隊の某兵卒は七十餘彈を蒙つてゐた。機關砲の殺傷力の莫大なることは此の通りであつた。斯くの如くに數十彈を受けてゐるものに對しては、創の名稱を一々數へ立てる事も出来ぬので、軍醫は之に『全身蜂巢銃創』なる新名稱を附してゐた。我軍が一たび敵の陣地に向つて攻撃を開始するや最も多く苦しめられ、最も多く惱まされたものは、孰れの戦闘に於ても、實に此の恐るべき機關砲であつた。

敵の軍犬

此陣地内には敵の軍犬が四五匹戦死してゐた。逞しき筋骨の、茶褐色の毛の短い、又だ顔の鋭い犬であつて、我が砲彈の爲に見事に殺され、畜生ながらも名譽の討死を遂げたものであつた。敵は平素よりして軍犬を訓練して、戰場に於ては之を種々に使役し、時としては歩哨の勤務さへも取らせたとの事であつた。

敵の損害

予は慘烈なる戰場の跡を一々詳しく見廻つて、一帶の地形が如何にも都合よく、而して其の配備の如何にも堅固なるに、兎にも角にも我等は能く之を占領し得たるものかなと、我れながら寧ろ怪しまるゝばかりであつた。我工兵の堀り出した地雷も幾個と無く並べられてあり、鐵條網も破壊せられてあつた。敵は此戰に非常大の損害を受けたので、多數の死屍を陣地又は退路に委棄し、辛うじて收容し得たる死屍を牛車十數輛に満載して、候家屯より旅順方面へ運び散つたのである。

フォック將
軍の手記

予は今暫く悲惨なる戰場を離れて、此に我軍が敵に那計りの感觸を與へたるかを語り、又た嘆賞すべき一二の兵卒を紹介せん。此の戦後に予等の部隊で、敵の師團長フォック將軍の手記したる紙片を拾つた。それを翻譯すれば次の如き意味の文句があつた。
『日本軍は前進を知つて退却を知らず。一の陣地に向つて一度ひ攻撃を開始するや、猛烈頑固に前進を續行するは、予も同意する所なれども、情況の之を許さざる時には、退却も却つて有利に導かれ得る場合尠からず。然るに日本軍は常に損害の如何を顧みずして攻撃を持續す。惟ふに日本の戰術書は退却に就いて研究せざるものならん。』
果して野豬の勇か、我は知らず。逆橋は我國古武士の排斥せし所、今の軍人も亦た進取

敵に後を見
せず

あるを知つて退却あるを知らず。之を缺點と云は云へ、敵に後を見するは武士の恥づる所。之を實に日本國民の本領である。敵將をして此言を吐かしめたるは、即ち我軍の決死奮闘的精神の靈動を表彰したるに外ならぬのである。我の百戰百勝は退却を知らざりしに基き、而して退却も時々有利に導かれ得るてふ戰術を偏信して、豫定の退却を誇としたる敵は、畢竟幾許の有利なる戰鬪をか交へたる？

松本祐市

敵將をりて彼語を殺せしむるに至りたる、我軍の志氣、兵士の精神を證するが爲、今二の例を舉げんに、二十七日の事であつた、松本祐市なる者、斥候となりて、嵐に突つたれよりも烈しき銃砲火を肩して前進したが、常に最先頭に立つて、他兵を激勵してゐた。恰も此の日の正午を過ぎた頃であつた。フト頭部より流れ出づる血潮が顔を傳はつた。そして彼は我れ知らず、『しまつた！』と叫び、續いて『しまつた！しまつた！』を七八回も繰返したが、遂にバタリと倒れた。分隊長野本伍長は駆寄つて、祐市を抱き起し、『コリヤ、しつかりせぬか！』と勵ませば、祐市は無念さうな目を開き、伍長の手を握つて、ニコと笑みながら、『ナニ大丈夫です。進んで下さい！』

進んで下さい！

仙波軍曹

と云ひ終るや、彼は眠るが如くに息が絶えた。彼は絶命せんとする刹那にも、なほ大丈夫と叫んで、他兵の前進を促したのである。又た第八中隊に仙波と云ふ軍曹があつた。彼は優れて勇敢なる分隊長であつた。過ぎし劍山の戦にも、先驅の功名を顯はしたる剛の者であつた。彼は前進中に絶えず『仇はあれが取つて遣るぞ！大丈夫だ！』と叫んで、敵弾を蒙つて死に瀕せる部下を慰めて最後の激勵を與へ、且つ永遠の告別をなすを常としてゐたのである。されば部下は、兄の如くに慕ふ仙波軍曹の傍で一處に斃るゝ事なら、毫も遺憾は無いと思つて、我も我もと軍曹に從はんことを競つた。小隊長は又た仙波を我が手足の如くに愛して、彼れ一人は百人の兵にも勝ると信じ、困難なる任務は、必ず此軍曹を撰抜して遂行せしめ、而して之は常に彼の沈着と勇氣とによつて成功してゐた。扱て二十七日に猛烈なる前進を始めると、軍曹は其部下の兵を手許に固く握つて一途に前進し、例の如く『仇はあれが取つてやるぞ！大丈夫だ！』と、右に斃れ、左に躓く部下の死傷者に對して引導念佛を授けてゐた。兎角する中、彼れ仙波も亦た遂に小隊長の前で躓き仆れた。之を扶け起さうと抱き上げたる小隊長の手には、生暖かき血が傳はつた。「ア、しまつた、此の軍曹もか……」と小隊長は痛恨に堪へず、

仇は取つてやる

『しつかりせよ、仙波軍曹！分隊長！』

『旅順が』

『小隊長殿！旅順が……』

彼は聽て事切れて、勇魂遂に此士を辭した。其の『旅順が……』の一句は、自から旅順で決戦するに及ばずして死するを遺憾に思つたのか、果た又た旅順の一日も早く我手に落ちん事を祈つたのか、孰れにしても、命脈將に絶えなんとしても、誠忠なる彼れ仙波軍曹は、旅順の他更に何事をも考へ無かつたのである。

第二十 繙帶所

黄泥川及び大上屯の東北高地に、第一發の火蓋を切つてより此の方、戦闘の焔に熱せられて、餘事を考へる餘も無かつた予は、今や親友安井軍醫の身の上を思ひ出で、彼は無事に此度の戦闘を経過したか、戦後幾千の傷者に對して、朱に染みながら、手當を施すに目が廻る程であるであらうかなど、獨言しつつ、物淋しき二十八日の夕暮、雲行き悪しき空谷を眺めながら、今夜の露營地を定められたる太白山下細流の邊、楊柳の蔭を歩みつゝあつた時に、一人の將校が靴の踵をカチンと音して立止まつた。

『安井君。』

『櫻井君か？』

『健康でゐたか？』

二人は握手して、互に褒れたことを話の始めとして、それより戦闘の劇烈なりし事、悲惨なりし事など、何かと嬉しく楽しく語らつた。先に負傷した松九大尉も亦た此處に在つ

て、彼の刀身に圓窓を貫かれて「く」の字なりに曲つた軍刀を肩にして、至極眞面目に戦闘の模様を話してゐた。予は安井軍醫に綱帶所に於ける悲惨の光景を尋ねたれば、彼は詳かに其の當時の状を繰返した。

敵軍綱帶所に落つ

此の戦闘中、敵の砲弾は絶えず、假綱帶所に充てたる民家の附近に落ち來つて、其の危険なりし事は一通で無かつた。或時の如きは砲弾が屋根を突き抜いて、内庭で爆發した。め、傷者の大部分は粉微塵に碎け、壁や柱には血の塊、肉の片が附着して、目もあてられぬ惨状を呈した。又た或時は、擔架卒がヤットの事で戦線から收容して返つて庭前へ下す間も無く、其の傷者は敵弾にヒューと中てられて即死してしまつた。彼等は戦闘線にて、花々しき側をなし、名譽の傷を負うて還つて來てから、この不憫極まる最期とは！敵弾は何處までも追つて來て我が勇士を殺したのである。

綱帶所の惨状

綱帶所の状況の其惨、其烈なる、到底名状すべからざる事、九て地獄を想起せしむるものであつた。負傷者が戦線から送られて來るや、將校下士卒の區別無く、軍醫や看護手は片端から、直ぐに應急手當を施す。戦線の銃砲火が劇烈の度を加ふるに従つて、負傷者はいよいよ増加するため、手當が中々間に合は無い。此方で手當をして居る中に、彼方では息が苦しくなつて、最早顔色の變つてゐる者が目に付く。それと云つてブランドー一滴を唇に落してやる間に此方では早や息が切れる。一人に救急手當を濟ましたかと思ふと、其内に又た十人も十五六人も昇がれて來る。軍醫の身邊は、瀕死の負傷者を以て一杯に埋められ、彼等は襦袢一枚になつて、全身血糊に染みながら、綱帶を巻いたり、手足の折れた者には副木を副へたりする。素より一時間に合せの手當ではあるが、其の忙しい事、到底力の及ぶところ無く、悲惨の光景に逼られて、精神も錯亂したかのやうになり、氣ばかり急れども、一向に果敢らぬ。

傷者の状態

されど此の家、彼の庭に横たはれる者は皆一塵の剛の者ばかり、綱帶所の手當が行届かぬからとて、何の不平を訴ふるで無く、何の望むところあるでも無く、而も戦場の熱がまだ醒めてゐ無いら、戦線の喧噪が耳柔に響き、飛彈空を掃めて響くと、彼等は其身の痛手を忘れて、再び戦線へ駆出さうとする。軍醫は周章て之を止めると云ふ有様。頭部を撃たれて精神に異常を呈した者は、孰れも微かな聲で「天皇陛下萬歳」とか、「露助」とか、悲痛なる言葉を吐きつゝ、フラ／＼彼方此方走り廻る。軍醫等が、之を引き押へて置く、と、「コラ露助」など、嘖言吐いて狂ふ。狂つた末が出血夥だしくて、遂に程無く息を引

取るのであつた。

二十七日は殊に負傷者が多かつたので、綱帶所の前の畑地は、端から端まで一杯に彼等を以て埋められてゐた。一人を手當してゐる間に、後から軍醫のゾボンの裾を引くものがある。振り返れば、軍醫の膝に手を乗せ凭れかゝつて、スヤ／＼と子供の眠るが如くに息が絶えた。右からも左からも引張つて、「逆も助からぬ命だから、早く殺して下さう」と頼む者がある。或時はかう云ふ事もあつた。一人の軍曹が両手を突いて足を引つりながら俯ふて来て、涙ながらに、

「軍醫殿、あの向ふに居るのは、私の部下であります。息が苦しうて、最早駄目だとは思ひますが、モ一度診てやつて下さう。」

と云つた。彼れ軍曹は脚部骨折の重傷を蒙りながら、部下を愛するの一念に、我が痛みを忍んで、彼の爲に診察を乞ふた其精神は豈に神々しからずや！又た息の將に絶えなるとした者で、自分はマア宜いから、戦友の手當をして下さいと頼んだのも少く無い。其美しき心根は何を以て譬ふべきであるか？彼等勇士は氣息奄々として顔色蒼白に變じ、血に塗れ砂に蔽はれてはゐたが、其の確乎たる武士的精神は、決して流血と共に逸し去るもので無かつた。

奇特の軍曹

神々しき精神

かつた。

一重傷兵

何某と云ふ兵卒は、二十七日の朝方、ボンヤリとした顔付で綱帶所の前に佇んでゐた。軍醫は彼を見て、『どうしたのか？負傷したのか？』と尋ねたが、彼は何事も言はず、唯だ唇頭を震はしながら、モグ／＼してゐるのみであつた。軍醫は更に『どうしたのか？言はねば分らぬ』と言つたが、彼は猶ほ何事をも答へ無かつた。軍醫は之を訝り、彼の顔を打守つてゐる間に、フト氣付いたのは、其顔に少しの血が付いてゐることであつた。能く能く見れば、彼は右の蜂谷から眞一文字に敵彈の貫通する所となつて、目も見え無ければ耳も聞えぬのであつた。斯くと知るや、軍醫は應急の手當を施さんとて、彼を勞りつゝ其手を取つたが、彼は齒をギリ／＼鳴らして、『仇を……』と云つたきり、五體は忽ち固くなつて、此世の別れとなつた。彼は其死の迫れるとも知らず、これしきの事て斃れては、如何にも無念や残念やと思つて齒ざしり噛んだ其心は健氣では無いか。

或時から云ふ事もあつた。一名の負傷兵が大手を振りながら綱帶所へ駆け込んで、『非常な激戦です。中々面白くない！今直ぐに占領します。』と云つたので、軍醫は、

重傷兵の元氣

「汝は負傷したのか？」

「腰を少々やられました。」

軍醫も戦闘の経過が大に氣懸りであつたもので、

「敵を大分殺したか？どちらに死傷者が多い？」

彼は此時聲を低くして、

「矢張、日本の方が多いです。」

軍醫はさうかと聞流して、彼の腰に在ると云ふ傷を検した。ところが其傷の甚だ重大なるに驚かざるを得無かつた。砲弾の爲に右臀部の肉が殆ど全く削ぎ取られてゐたのであつた。彼は暗に己れが勇敢なる行爲を以て、能く其責任を盡し得たるを誇つて、而して滴々たる血潮が彼の生命を奪ひ去りつゝあるを知らず、頗る壯快に、頗る元氣に、戦況を物語つたのである。軍醫は彼に「ヨシ、細帯が出来たぞ、後へ下れ」と命じて立たせたが、彼は最早歩行する事が出来無かつた。戦闘の熱は斯くの如き重傷者をも歩ましめた。然し乍ら一旦衛生隊に收容せらるゝと、猛き心が弛むとても云ふのであらうか、俄に傷が痛み出すものだ。其實例は多く之を見た。而して予も亦た實に其一人であつた。戦場に倒れてゐ

此傷て此元氣

赤十字旗

擔架卒の美勳

た二日間は少しも傷の痛みを覺え無かつたが、收容せられて細帯を施された時の痛み、どんな事なら何故死な無かつたのだらう。萬死に一生を得たとは實に予の事であつただけれど、予は決してそれを難有く思は無かつた。天は何故に予を一思ひに殺さずして、半死半生の苦痛を與へたのかと恨むばかりであつた。戦闘の間、此處彼處に懸る赤十字旗は、博愛の風を孕んで、戦線に倒れたる負傷者を招いてゐる。一彈の下に激き最期を遂ぐる勇將猛卒は、此の慈悲に溶せずして、却つて花々しき屍を原頭に晒らすこともせずに、慰ひに傷を受けた者が、身に餘る鄭重な手當を受くるとは、死んだ勇士に濟まぬ譯のやうだと、予は毎もさう考へてゐた。戦闘が開始せらるゝと、彼の擔架卒なる者は、擔架を擔いで戦場を往來し、戦線に出て傷者を拾集して、細帯所へ運搬する。彼等も亦た直接戦闘に従事する兵卒と同じく、勇敢且つ熱心で無ければ其任務を達成する事が出来ぬ。彼等は劍華彈雨の間を冒し、傷者を尋ねて、之を安全の地に收容するの、博愛にして大膽なる行動に任ぜられてゐるのである。己れの乏しき食を折半し、貴き水筒の水を配分して、勞はり慰めつゝ、輸送するの任務に當つてゐるのである。擔架卒の其勞、其徳は特に記して感謝すべきものでは無きか。

内地の病院に轉送せられたる傷病者は、白妙の病衣に包まれて、慈愛忠實なる醫官又は看護婦に看護慰藉せられ、予も正に斯る厚遇に感泣した一人であつた。内地では此の如くであるが、戦地では果して如何？予の實戦したる頃は、折しも夏の事なりければ、幾千とも数知れぬ傷兵は、蠅の大軍に攻め立てられる、口や鼻に蛆蟲が湧いてウヅ／＼してゐても、手の利かぬ悲しさに、之を除き去ることの出来ぬ者もあつた。さりとて之を除いて慰むべき看病人は、傷者百人に對する僅かに一人位であつたから、手が届か無かつた。而かも炒り付けるやうな白日の炎天にも、夜陰の雨露にも、一枚の被ふ物さへ無くて、全くの露天に曝されてゐた。大小便の自由も利かず、或時の如きは、傷者を小川に浸し、糞帯で大便の汚れを洗ひ去つて、始めて糞帯を施したことさへもあつた。これと云ふが全く、戦闘の經過上、意外の多數なる傷者を出した爲なので、蓋し無理も無い。一時でも早く手當して、一日でも早く後送して、早く快癒させて、又た之を戦闘員に加へばならぬとは、衝に當る者の熱心ではあつたが、如何にせん、二百人を收容し得る一野戦病院に、千人以上の傷者が輻輳したやうな場合であつたから、當然斯くの如き不本意なる状態となつたものなのである。

戦地の傷兵

手が届かぬに當然

第二十一 長驅追撃

天險を誇つた太白山の堡壘すら、遂に我軍の抜く所となつたので、流石の露軍も、今は我の甚だ侮り難き勁敵なるに驚いたであらう。されど猶ほ彼の背後には鐵圍要塞の本防禦線を控へてゐたので、彼は如何にか僅かに二三戰の敗吻に屈すべきや。乃ち敵は更に退いて干大山一帯の高地の防禦工事に着手して、第三次の抵抗を試みんとした。而も急速に其工事に従事してゐるのであつたから、我軍に在つては、一日たりとも、攻撃を忽せにすることは出来無い。一日を忽せにせば、乃ち敵に一日の利を興へて、其險を増加せしむるのであつた。されば我は連日の劇戰に疲れたる足を休む暇も無く、恰も海嘯の勢を以て、長驅敵の備の尙ほ薄きに乗じて、彼を要塞内に壓迫せんが爲、直ちに追撃の隊形を以て攻撃を開始した。二十九日は彈藥の補充をなし、隊伍の整頓を行ひ、且つ敵騎の偵察に勉めて、愈よ七月三十日を以つて、各隊共に前進を起すこととなつた。

敵の處を衝かんとする

我聯隊は二十九日の夜、候家屯附近の谷地に假の露營設備をしてゐたが、夜半三時に、

丸裸の傳令

旅團司令官からして、命令受領の爲急いで來いとこの事であつたから、予は即ち一名の傳令卒を従へて、河原の一里半を駆足で、王家屯なる司令部に到着したのは、丁度四時前であつた。然るに攻撃開始は五時だと示されたから、急いで命令を受領して、切て歸路の一里半は韋駄天走りて無くば、逆も刻限の間に合はぬ。そして予は軍服をスッカリ脱いで傳令卒に渡し、丸の全裸となり、拳銃と軍刀とのみを掴んで、宙を飛んで駆け出した。夜明にはまだ間があつたので天地は暗い。それで方角を違へては大變、でも此の河原を真直に突き抜けさへすりや歸れるだらうと、只だ一目散に駆け出した。途中で糧食の運搬を司どつてゐた三島主計の聲を聞き付けたので、予は矢張り走りながら、

『三島主計殿、糧食は駄目でござ。今から又た前進です！』

云ひ終つた時は、已に遠く後で主計の聲が聞えたくらゐであつた。幸に方角も誤らず、道も迷はずに、露营地へ歸つたのは、正に四時と五十分であつた。直ぐ糧集合を令して、攻撃命令は達せられた。然るに先に予が軍服を預けた傳令は未だに歸つて來無い。夏の晴天の事なれば、これも却つて涼しくて宜いとは云ふもの、丸裸では困る。首尾能く任務は遂げたもの、これから丸裸の戦もなるまい。それで更に一人の傳令を後方へ送つて、先

攻撃命令を達す

裸で戦は出

痛快なる前進攻撃

の傳令を搜索させたが、中々に見付ら無かつた。兎角する内にモウ前進を始める事になつたので、予も甚だ閉口してゐたが、眞際になつて彼は歸つて來て、予も裸合戦の無様だけは免れた。今から考へると實に滑稽沙汰だが、其時は予も中々の心配であつた。

斯くして茲に最も痛快なる前進攻撃が、豫定の如くに行はれた。此の戦闘は全く野戦と同様の感じがしたものであつた。乃ち平時に野外で演習する如く、第一線にては散兵がズン／＼前進する、後から豫備隊が續いて行くといふ工合であつて、山來地形に應じ情況に臨んで、逐次に豫備隊を増加すべし要塞戦には中々見られぬ戦闘であつた。是までは奇岩怪谷を攻撃地帯としてゐたので、近く敵と接觸して噛り付いてゐて、時機を見て堡壘内へ躍り込むのであつたから、操典に示してあるやうに、正規の隊形を保つて攻撃する事は無論出来無かつた。然るに我軍一たび太白山を乗越へてより後、大孤山に至るまでは高山ではあるが、山腹から山頂へかけて、逶迤起伏の地形であつたため、此度の如くに未だ會つて踐まざりし愉快な野戦的戦闘を實施することが出来たのである。殊に我軍は敵の虚に乗じて、急速に襲撃に轉じたのであつたからして、敵は若干頑強なる抵抗を試みたかなれども、漸次一步一步と後退を始めた。聯隊は二個中隊を豫備として残した上で、餘は全線